

三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ

1995～1999年度 埋蔵文化財発掘調査

2001年3月

三原郡広域事務組合



三原町幡多遺跡行當地地区 墨書土器



三原町幡多遺跡行當地地区 大阪湾型銅戈 左) c類 右) d類



三原町幡多遺跡野水地区 B地区 方形周溝墓群（北より）



三原町幡多遺跡野水地区 E地区出土 刻書土器



南淡町楠谷遺跡出土 有舌尖頭器



西淡町片山遺跡出土 須恵器

序 文

三原郡に埋蔵文化財調査事務所が誕生して早いもので10年が経過いたしました。

この10年の間には、圃場整備等の大規模な開発事業が年々増加し、それに伴い埋蔵文化財調査のニーズが高まり、発掘調査量も飛躍的に増大いたしました。

そしてこの増大した発掘調査は新しい調査成果を生み出し、この10年で淡路を取り巻く歴史は大きく変化いたしました。

しかしながら、これまで得られた貴重な調査成果は様々な事情から行政機関のごく限られた場所に留まり、広く一般住民が知りえる機会は非常に少なく、埋蔵文化財に理解をいただきその保護の必要性を周知するには程遠い状況に至っております。

そこでこのような状況を少しでも解消するため、今回初めて三原郡の埋蔵文化財の状況を年報形式をとって幅広く報告することにいたしました。

紙面の都合上、各遺跡の報告は不十分さも目立つとは思いますが、今回報告する各成果は我々の祖先の営みを直接推し量る必要不可欠な資料であり、これを忠実に後世に伝承していくことが現代に生きる我々に課せられた重要な責務であると強く考えております。

今後、本書が「ふるさと淡路」を知る社会教育資料として広く活用されることを祈念するとともに、本書の完成に満足することなく、本郡の埋蔵文化財の理解と保護に日々精進していく所存でありますのでご支援を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。

平成13年3月

三原郡広域事務組合

管理者 森 紘 一

例 言

1. 本書は、緑町、西淡町、三原町、南淡町の三原郡4町において、1995～1999年度に実施した、埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、三原郡4町の各町教育委員会を調査主体として実施した。調査は三原郡広域事務組合（平成9年3月まで三原郡町村会）の坂口弘貢・定松佳重・山崎裕司・的崎薫（旧姓中島）が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、中原美佐子（平成10年8月まで）、初田典代、細川光代、山田いづみ（平成10年9月より）が行った。
4. 各遺跡の発掘調査には、葭光洋、石川まり、上村知恵、榎本全克、河西雅隆、久留米晃子、作田利美、露本和也、仲野裕恵、濱本善美、前川恭範、松浦孝充、山口昌規、山本真理の補助があった。
5. 本書の編集は、三原郡広域事務組合の定松佳重が行った。執筆・レイアウトは文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。
6. 本書に使用した遺跡位置図は、国土地理院発行2万5千分の1の地図「都志」「広田」「諭鶴羽山」「鳴門海峡」「福良」を使用した。
7. 本書では遺構について次の略号を使用した。
SB：掘立柱建物、SD：水路・溝・河川、SE：井戸、SH：竪穴住居、SK：土坑、
SP：柱穴、SX：不明
8. 付録淡路国分尼寺・国分寺跡軒瓦型式一覧1999年度版の国分寺部分については濱崎真二「淡路国分寺出土瓦からみた古代淡路国」『文化財学論集』1994を基礎に修正・加筆を行った。
9. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、下記の方々のご協力とご指導を頂いた。記して深く感謝の意を表す。（五十音順・敬称略）
足立敬介、荒木幸治、伊藤宏幸、岩永省三、浦上雅史、大石雅一、大平茂、岡田章一、岡本稔、
荻能幸、賀集一裕、賀集徹、金田明大、川渕泰司、川吉知子、岸本一宏、西東祥征、篠宮正、
嶋谷和彦、素川恒男、武田信一、館野和己、種定淳介、貫益巳、永井正浩、中尾福夫、仁尾一人、
波毛康宏、箱崎和久、長谷川眞、菱田哲郎、平田博幸、藤田淳、藤平明、古尾谷知浩、本田裕満、
水野正好、三宅進、村上賢治、森岡秀人、安田貴史、山上雅弘、山下史朗、吉川聡、吉田広、
渡辺晃宏、渡辺昇
辰美中学校、三原中学校

目 次

序 文

例 言

第1章 三原郡内埋蔵文化財事業の動向

第1節 事務所の動向	1
第2節 発掘調査の動向	2
第3節 普及・啓発活動の動向	4

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査位置図および調査一覧表	5
第2節 主な発掘調査の成果	11
1) 平成7(1995)年度	11
2) 平成8(1996)年度	24
3) 平成9(1997)年度	40
4) 平成10(1998)年度	56
5) 平成11(1999)年度	69

第3章 資料紹介

1) 緑町成福寺原遺跡出土須恵器	83
2) 三原町山惣廃寺採集軒丸瓦	84
3) 南淡町賀集採集和同開珎	85
4) 南淡町灘城方山ノ神出土大量銭	86

付録 淡路国分尼寺・国分寺跡軒瓦型式一覧1999年度版	88
-----------------------------	----

あとがき	91
------	----

第1章 三原郡内埋蔵文化財事業の動向

第1節 事務所の動向

平成2年4月に、三原町八木国分所在の淡路国分寺跡の整理作業を経緯として、埋蔵文化財の調査員が三原町から三原郡町村会（以下町村会と記す）に派遣され、三原町市549-1にある1884（明治17）年に建てられた旧三原郡役所を利用し、埋蔵文化財事務所が三原郡4町（緑・西淡・三原・南淡町）で共同設置される。これをもって三原郡での埋蔵文化財行政が本格化する。この広域組織での調査員共同設置方式は島内では津名郡と同じ方式で、調査に係る事務は各教育委員会が、現場の実務や内業作業は町村会が担当する方式である。



旧三原郡埋蔵文化財調査事務所

その後、平成4年4月に町村会職員として調査員1名（嘱託職員）が増員される。平成4年度から5年度にかけて調査員の入れ替わりがあり、2名（町村会の嘱託職員）が三原郡の調査員となる。平成7年4月からは、さらに調査員2名が増員され、合計4名の現在の体制に近い形となる。この頃から郡内での大規模な県営圃場整備事業も多くなり、発掘調査も広範囲を面的に調査するケースが増える。これに対応し、凶化作業の効率化を図るために、平成9年度から外業補助員を現場の状況に応じて採用するようになる。また外業作業と共に重要な位置を占める内業作業については、3名のパート職員が遺物整理作業にあたっている。

	調査員	内業作業員	外業補助員
平成2(1990)年度	1	3	
平成3(1991)年度	1	3	
平成4(1992)年度	2	3	
平成5(1993)年度	2	3	
平成6(1994)年度	2	3	
平成7(1995)年度	4	3	
平成8(1996)年度	4	3	
平成9(1997)年度	4	3	2
平成10(1998)年度	4	3	2
平成11(1999)年度	4	3	6

平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災は、三原郡にも大きな爪跡を残し、これまで事務所兼収蔵庫として使用してきた旧三原郡役所は、立ち入り禁止となり、7月に事務所が現在の三原町市善光寺18-27に移転となり、保管スペースの問題で出土遺物は各町がそれぞれ保管するようになった。

事務所が移転した2年後の平成9年4月には、これまで町村会に所属していた埋蔵文化財事業が三原郡広域事務組合に移行し、現在にいたる。

表1 埋蔵文化財関係職員推移表

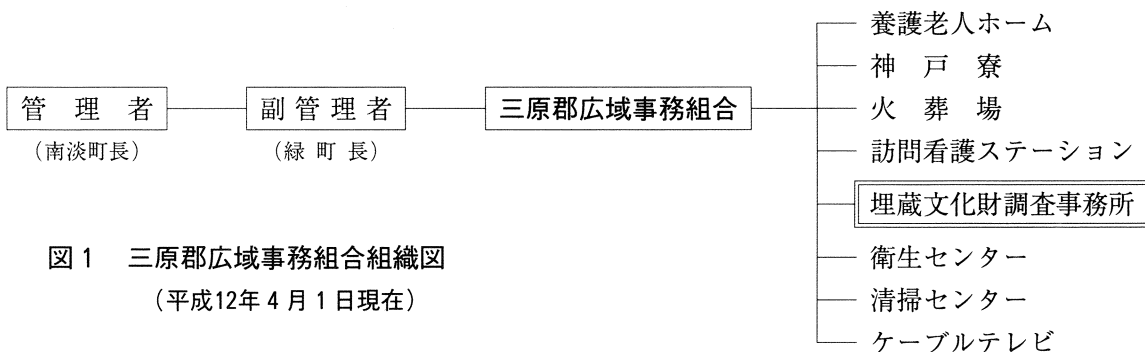


図1 三原郡広域事務組合組織図
(平成12年4月1日現在)

第2節 発掘調査の動向

平成2年度から本格的に始まった埋蔵文化財事業は10年が経過した。発掘調査の件数も開発事業量に比例して増加し、平成2年度に9件あまりであった埋蔵文化財調査が平成6年度以降は分布調査も含めて年間30件あまり実施するようになった。また発掘調査面積（分布調査面積を除く）は平成6年度に4,000㎡を超えてからは、平成8年度には最高の約7,500㎡となり、それ以後5,000㎡前後の面積を調査するようになった。本格調査も平成2年度に350㎡であったのが、平成11年度には5,681㎡と約16倍に拡大した。町別の調査件数については合計277件中、三原町が115件（42%）、南淡町が65件（23%）、西淡町が61件（22%）、緑町が36件（13%）となり三原町内での調査が事務所開設当初より継続的に進んでいることがわかる。これは、事業内容ごとの調査件数を見ればわかる様に、三原郡ではこ

	分布調査				試掘調査				確認調査				本格調査				合計
	緑	西淡	三原	南淡	緑	西淡	三原	南淡	緑	西淡	三原	南淡	緑	西淡	三原	南淡	
平成2(1990)年度	1	1		1		1			2		2				1		9
平成3(1991)年度	1(1)	5	3	5		1	1		2	2	6(3)						26(4)
平成4(1992)年度	1(1)			2		1	1(1)		2(1)	3(1)	2(1)	2		1		2	17(5)
平成5(1993)年度	1	8	4(1)	4(2)				1		3	4(1)	1		1	1		28(4)
平成6(1994)年度		8(3)	3(1)	3(1)		1	1	1(1)	1	7	3(1)	3(1)	1		2	3	37(8)
平成7(1995)年度	2	3(1)	6	6					1	6(1)	3	5(1)		2	1	1	36(3)
平成8(1996)年度	2(1)	1	6(1)	3			2(1)	2(1)	1(1)	1	6	3		2	1	1	31(5)
平成9(1997)年度	4(3)			1(1)			3(3)	2(2)		1	13(2)	5			2	1	32(11)
平成10(1998)年度	3		2	3	3		1		2(1)		5				5		24(1)
平成11(1999)年度	2(2)		15(10)	1	2(2)		2(2)		2(1)	2	5	3			3		37(17)
合計	17(8)	26(4)	39(13)	29(4)	5(2)	4	11(7)	6(4)	13(4)	25(2)	49(8)	22(2)	1	6	16	8	277(58)

表2 埋蔵文化財調査件数の推移（括弧内は民間事業の調査件数）

	分布調査	試掘調査	確認調査	本格調査	合計
平成2(1990)年度	21.78ha	4㎡	344㎡	350㎡	698㎡
平成3(1991)年度	139.11ha(3.1ha)	30㎡	584㎡(74㎡)		614㎡(74㎡)
平成4(1992)年度	13.839ha(0.189ha)	28㎡(8㎡)	682㎡(204㎡)	734㎡	1,444㎡(212㎡)
平成5(1993)年度	198.35ha(8.089ha)	12㎡	760㎡(28㎡)	543㎡	1,315㎡(28㎡)
平成6(1994)年度	298.77ha(199.55ha)	174㎡(20㎡)	852㎡(108㎡)	3,118㎡	4,144㎡(128㎡)
平成7(1995)年度	243.7ha(0.5ha)		1,099㎡(16㎡)	1,921㎡	3,020㎡(16㎡)
平成8(1996)年度	135.59ha(0.65ha)	59㎡(35㎡)	884㎡(16㎡)	6,571㎡	7,514㎡(51㎡)
平成9(1997)年度	121.555ha(120.255ha)	69㎡(69㎡)	1,418㎡(24㎡)	4,131.7㎡	5,618.7㎡(93㎡)
平成10(1998)年度	125.6ha	132.6㎡	700㎡(8㎡)	3,882㎡	4,714.6㎡(8㎡)
平成11(1999)年度	52.885ha(4.965ha)	66㎡(66㎡)	796㎡(28㎡)	5,681㎡	6,543㎡(94㎡)
合計	1,351.179ha(337.298ha)	574.6㎡(198㎡)	8,119㎡(506㎡)	26,931.7㎡	35,625.3㎡(704㎡)

表3 埋蔵文化財調査面積の推移（括弧内は民間事業の調査面積）

れまでの埋蔵文化財調査の総合計数277件中、121件が農地関連（圃場整備）事業に伴う調査で割合が非常に高い（約44%）。各町の重要政策の一つとして掲げられてきた圃場整備事業は、三原平野を中心に精力的に進められており、島内の自治体の中で耕地面積が最も多く（表4参考）、三原平野の主要部分を占める三原町で調査件数が多くなっている最大の要因と考えられる。

またここ数年、三原郡では圃場整備と平行して道路を新設するケースが目立ち、農地関連について道路関連事業に伴う発掘調査が合計40件（14%）と増加傾向にある。

一方民間事業については、これまで合計58件（21%）の調査が実施されているが、分布調査や試掘・確認調査といった小規模な発掘調査に留まるケースが多く、それより進んだ調査に進展する場合は非常に少ない。

また個人住宅は平成4年に1度発掘調査をして以来、発掘調査の費用や調査期間の問題で十分な対応が実施されておらず、今後の重要な課題といえよう。

市 町	耕 地 面 積 (ha)		
	田	畑	計
洲本市	1,460	179	1,639
津名町	1,120	178	1,298
東浦町	355	87	442
淡路町	76	58	134
北淡町	891	292	1,183
一宮町	1,040	206	1,246
五色町	1,200	186	1,386
緑町	437	86	523
西淡町	819	62	881
三原町	1,690	80	1,770
南淡町	939	176	1,115
合 計	10,027	1,590	11,617

表4 淡路島内の耕地面積（注1）

	公 共 事 業									民 間 事 業							合計
	農地 関連	道路 関連	住宅 関連	下水 道	学校 関連	公園 関連	福祉 関連	公共 建物	その他	営利 企業	集会 所	福祉 関連	公園 関連	住宅 関連	個人 住宅	その他	
平成2(1990)年度	5	1	1					2									9
平成3(1991)年度	10	3	2		1		1	3	2		1			1		2	26(4)
平成4(1992)年度	6				1		3	1	1	4					1		17(5)
平成5(1993)年度	16	1	1		1		1	2	2	4							28(4)
平成6(1994)年度	20	2			1			3	3	3			1	2		2	37(8)
平成7(1995)年度	20	5	3	2		1			2	1						2	36(3)
平成8(1996)年度	15	8	1			1		1		3				2			31(5)
平成9(1997)年度	10	8	1	1				1		1	1	1	2	5		1	32(11)
平成10(1998)年度	8	7	1	1		1		2	3	1							24(1)
平成11(1999)年度	11	5				3			1	8	8	1					37(17)
合 計	121	40	10	4	4	6	5	15	14	25	10	2	3	10	1	7	277(58)

表5 事業内容別埋蔵文化財調査件数

第3節 普及・啓発活動の動向

調査員が4名に増員された平成7年度あたりからは、西淡・三原両町で大規模な県営圃場整備事業も目立つようになり、発掘調査面積も拡大した。調査面積の拡大は、大きな調査成果をもたらした。特に平成10年度の幡多遺跡（行當地地区）の大阪湾型銅戈や墨書土器、平成11年度の幡多遺跡（野水地区）の方形周溝墓群や大型掘立柱建物、刻書土器といった三原町榎列幡多地区での発見は印象深いものとなった。一方でこれらの調査成果は、わずかではあるが以下の通り説明会や講演会などで公開を行ってきた。しかし、他地域などに比較して、やはり相対的に少ないことや各行事の宣伝不足を反省点として挙げることができる。また三原郡の場合、震災以後、事務所と遺物保管場所が分離してしまったため、遺物は整理が終わると一旦各町の収蔵庫に保管され、新たに展示会などの行事を行うとなると、遺物の運搬や展示スペースの確保といった様々な問題が発生する。今後、早急に改善していかなければならない課題と考えている。



幡多遺跡（野水地区・E地区）説明会風景

（坂口）

年 月 日	町 名	名 称	内 容
平成5年3月13日	南 淡 町	岩谷遺跡	現地説明会 (福良小学校)
平成8年2月4日	西 淡 町	後山遺跡	現地説明会
平成8年11月6日～12月1日	南 淡 町	南淡町と中国の文物	展 示 会
平成8年11月17日	南 淡 町	護国寺東遺跡の発掘調査について	講 演 会
平成9年7月14日～8月29日	南 淡 町	ふるさと大昔展 -弥生時代の南淡町-	展 示 会
平成9年10月1日～10月30日	西 淡 町	古の西淡	展 示 会
平成10年2月5日～5月27日	三 原 町	郷土の古代瓦	展 示 会
平成10年7月25日	三 原 町	考古学から探る歴史	講 演 会
平成11年2月16日～6月8日	三 原 町	弥生時代の三原	展 示 会
平成11年11月27日	南 淡 町	南淡町賀集地域の古墳を訪ねて	見 学 会
平成11年12月15日	三 原 町	幡多遺跡（野水地区・E地区）	現地説明会 (三原・辰美中学校)
平成12年2月20日	三 原 町	幡多遺跡（野水地区・B地区）	現地説明会 (五色町歴史教室)

表6 三原郡内埋蔵文化財調査成果公開一覧

（注1）『淡路の土地改良』兵庫県洲本土地改良事務所 1992

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査位置図および調査一覧表

調査一覧表 1995年

No.	事業名	町名	所在地1	所在地2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要	備考
1	団体営土地改良総合整備事業	西淡町	伊加利	畦原	確認	坂口・山崎	畦原・畦原寺	H7.5.15～6.2	中世の遺構確認	
	集約農業地域再編総合整備事業	南淡町	賀集	牛内	確認	山崎・坂口	上梶原(長原)	H7.6.12～27	遺構未確認。石鏃(縄文)・弥生土器出土	
	集約農業地域再編総合整備事業	緑町	中条	中筋	確認	定松・中島	鳩尾	H7.6.19～22	遺構未確認	
2	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	確認	定松・中島	後山	H7.7.10～14	平安～中世の遺物、中世の掘立柱建物確認。武士階級か	
	ジャスコ(浄化槽)建設事業	南淡町	賀集	八幡北	確認	坂口	石ヶ坪	H7.7.20	遺構・遺物未確認	
3	団体営土地改良総合整備事業	西淡町	伊加利	仲野	確認	定松・山崎	伊加利仲野・大唐原首	H7.8.1～4 10.23～24 11.13	仲野で柱穴確認。中世集落跡?	
4	町営住宅建設事業	南淡町	賀集	八幡南	確認	山崎・坂口	護国寺東	H7.8.21～25 9.5/10.30～31	弥生後期・平安～中世の遺構・遺物確認	
	農業集落排水事業	西淡町	伊加利	本村	確認	定松		H7.8.29	遺構・遺物未確認	
5	農業生産体制強化総合推進対策事業	三原町	市～志知	新～難波	確認	坂口・中島	円座	H7.9.11～29	弥生後期の土器多量に出土	
6	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	本格	定松・山崎	後山	H7.9.18～11.6/H7.12.4～H8.2.6	中世の集落確認。土師器皿の重なった地鎮遺構検出	
7	農業生産体制強化総合推進対策事業	三原町	市～志知	新～難波	本格	坂口・中島	円座	H7.10.4～H8.1.26	弥生時代後期・中世の遺構確認	
8	県営集約農業地域再編総合整備事業	三原町	八木	寺内	確認	坂口・中島	外かち	H7.10.18～24	中世の地鎮遺構を検出	
	三原町文化財保護施設整備事業	三原町	市	三条	確認	中島・坂口	大御堂	H7.10.25～26	遺構未確認。安国寺と同時代の丸瓦の玉縁部出土	
	淡路未活動断層(湊・本庄断層)トレンチ発掘調査事業	西淡町	松帆	西路	分布	坂口	大町	H7.10.27	須恵器・土師質土器片を採集	
	町道賀集野田牛内線道路改良工事(土取り)	南淡町	賀集	野田	分布	坂口	野田山古墳	H7.10.27	採集遺物なし	
	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	確認	定松・山崎	片山	H7.11.8～10	赤焼土器小片出土、遺構未確認	
9	町道賀集野田牛内線道路改良事業	南淡町	賀集	野田	確認・測量	坂口・定松	野田山古墳	H7.11.20～25	遺構未確認	
	基盤整備促進事業(一般型)	南淡町	阿万	上町	確認	中島・山崎・坂口	池の尻	H7.11.22	遺構・遺物未確認	
	町立図書館建設事業	南淡町	福良	甲	本格	坂口・山崎	玉造	H7.11.27～12.1	製塩土器が出土したが、遺構未確認	
	淡路未活動断層(湊・本庄断層)トレンチ発掘調査事業	西淡町	松帆	西路	確認	定松	大町	H7.12.7	溝状遺構より須恵器片出土	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	八木	寺内	分布	中島・坂口・定松・山崎	下の土井	H8.2.5～9	弥生・中世の遺跡埋蔵の可能性有り	
	土地改良総合整備事業	三原町	八木	鳥井	分布	中島	うとの口	H8.2.13～16	古代以降の遺跡埋蔵の可能性有り	
	町道上町吹上線道路改良工事	南淡町	阿万	上町	分布	山崎	池の尻	H8.2.13	わずかに土師質土器の小片採集	
	土地改良総合整備事業	南淡町	阿万	東町	分布	山崎		H8.2.14	遺物わずかに採集。遺跡埋蔵の可能性薄い	
	土地改良総合整備事業	南淡町	賀集	福井	分布	坂口・山崎		H8.2.14～28	石鏃9点採集	
	農業生産体制強化総合推進対策事業	三原町	神代	社家	分布	中島		H8.2.19～20	縄文～弥生時代と思われる石鏃採集	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	分布	中島	若宮	H8.2.21～3.5	凹基無茎式石鏃・土師質土器・須恵器・瓦質土器・陶磁器採集	
	公共下水道(汚水処理施設)建設事業	南淡町	阿万	下町	分布	坂口		H8.2.29	採集遺物なし	
	総合運動公園建設事業	南淡町	北阿万	筒井	分布	坂口・山崎		H8.3.1～13	採集遺物なし	
	県営圃場整備事業	西淡町	志知	志知北	分布	定松	門の上	H8.3.5～13	弥生時代～中世にかけての遺物(サヌカイト・須恵器・土師器等)採集	
	土地改良総合整備事業	西淡町	松帆	志知川	分布	定松	雨流	H8.3.13～19	古墳時代～中世にかけての遺物(須恵器・土師器・陶磁器)採集。雨流遺跡の続き	
	町道市11・12号線道路改良事業	三原町	市	十一ヶ所	分布	坂口		H8.3.18	平安時代前期と思われる須恵器の散布が顕著	
	町道神代41号線道路改良事業	三原町	神代	国衙	分布	坂口		H8.3.19	須恵器(奈良?)・サヌカイト片を採集	
	町営住宅天壬・宮処団地建設事業	緑町	倭文	庄田	分布	坂口		H8.3.28	採集遺物なし	
	町営住宅宮川団地建設事業	緑町	広田	広田	分布	坂口		H8.3.28	住宅・コンクリートのため地表面観察不可能	

調査一覧表 1996年

No.	事業名	町名	所在地1	所在地2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要	備考
10	町営住宅建設事業	南淡町	賀集	八幡南	本格	山崎・中島	護国寺東	H8.2.21～9.13	弥生後期の住居跡、中世の掘立柱建物確認。淡路国分寺出土軒平瓦と同文の瓦出土	
	町道神代41号線道路改良事業	三原町	神代	国衙	確認	坂口・定松		H8.4.1	遺構・遺物未確認	
	町道市11・12号線道路改良事業	三原町	市	十一ヶ所	確認	坂口・定松		H8.4.3～4	平安時代前期の須恵器出土。皿状の落ち確認	
	農村総合（モデル型）	緑町	中条	徳原	分布	坂口	池尻	H8.4.25	土師質土器片・石鏃1点採集	
	団体営土地改良総合整備事業	南淡町	阿万	吹上	確認	定松	小舩原	H8.5.20	遺構・遺物未確認	
11	土地改良総合整備事業	南淡町	阿万	上町	確認	中島・山崎・定松	北佐野	H7.11.24/27/ H8.6.3	中世の集落跡	
12	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	確認	定松・中島	大畑・片山	H8.6.12～7.27	大畑は中世の遺構・遺物。片山は古墳時代の遺構・遺物を確認	
13	県営土地改良総合整備事業	三原町	八木	寺内	確認	坂口・定松	外かち・戎添	H8.6.17～7.10	弥生後期・中世の遺構確認	
14	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	本格	定松・坂口・中島・山崎	大畑	H8.7.15～12.6	13～15世紀の遺構・遺物。一般集落	
	神代第2期造成工事（民間）	三原町	神代	国衙	試掘	坂口		H8.7.22	遺構・遺物未確認	
15	県営土地改良総合整備事業	三原町	八木	寺内	本格	坂口・山崎	戎添	H8.10.7～11.29	弥生時代後期・中世・近世の遺構・遺物確認	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	確認	中島・山崎		H8.10.7～17	摩滅の著しい土師質土器・須恵器・青磁出土。遺構未確認	
	センターパーク建設事業	三原町	市	市	試掘	山崎		H8.10.8	遺構・遺物未確認	
11	土地改良総合整備事業	南淡町	阿万	上町	確認	中島・坂口	北佐野	H8.10.21～24	柱穴確認	
16	民間宅地建設事業	緑町	広田	広田	確認	山崎	宮ノ下	H8.10.28	奈良～平安時代前半頃の遺構・遺物確認	
17	農業生産体制強化総合推進対策事業	三原町	神代	社家	確認	中島・山崎	上中原	H8.10.28～ 11.7/22	中世と思われる遺構・遺物確認	
18	団体営土地改良総合整備事業	三原町	八木	鳥井	確認	山崎・中島	内御堂田	H8.11.11～19	土師器・須恵器・黒色土器片出土。平安時代の遺跡	
	鉄工所及び倉庫建設用地開発事業（民間）	緑町	広田	中筋	分布	坂口		H8.12.12	須恵質土器片を採集	
	町道賀集154号線道路改良事業	南淡町	賀集	福井	試掘	坂口		H9.1.9	遺構・遺物未確認	
19	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	本格	定松・坂口・中島・山崎	片山	H9.1.13～3.14	古墳～中世の遺構・遺物。流路内より弥生後期末・布留・5世紀末の遺物出土。公的要素強い遺跡	
	町道丸山畦原線道路改良事業	西淡町	阿那賀	木場	分布	坂口		H9.1.20	遺構・遺物未確認	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	八木	寺内	分布	中島		H9.1.27～2.5	土師器・須恵器・石鏃採集	
	リカーメイツ南淡路店建設事業	南淡町	賀集	野田	試掘	坂口		H9.1.30	遺構・遺物未確認	
	農業生産体制強化総合推進対策事業	三原町	神代	社家	分布	中島		H9.2.5	土師質土器・須恵器・サヌカイトを採集。中世の遺跡埋蔵の可能性有り	
	県営圃場整備事業	三原町	榎列	上幡多・下幡多	分布	中島		H9.2.6～27	土師質土器・須恵器・陶磁器・石鏃を採集。弥生～中世の遺跡埋蔵の可能性有り	
	経所ニュータウン開発事業（民間）	三原町	神代	地頭方	分布	中島		H9.2.7	土師器・須恵器採集	
	小榎列農道3路線道路改良事業	三原町	榎列	小榎列	分布	中島		H9.2.19	須恵器（古墳時代含む）・土師器採集	
	町道榎列111号線道路改良事業	三原町	榎列	西川	分布	中島	久保	H9.2.20～28	須恵器・土師器多量採集	
	町道賀集154号線道路改良事業	南淡町	賀集	福井	分布	中島・坂口		H9.3.10	土師器片少量採集	
	保健センター建設事業	南淡町	賀集	賀集	分布	中島		H9.3.10	土師器・陶器採集	
	町道野田牛内・御陵線道路改良事業	南淡町	賀集	賀集/野田	分布	中島		H9.3.10～12	土師器片・須恵器片採集	

調査一覧表 1997年

No.	事業名	町名	所在地1	所在地2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要	備考
	町道榎列111号線道路改良事業	三原町	榎列	大榎列	確認	山崎	久保	H9.4.2	遺構未確認	
	共同住宅建設事業(民間)	三原町	市	市	試掘	坂口		H9.4.7	遺構・遺物未確認	
	経所ニュータウン開発事業(民間)	三原町	神代	地頭方	確認	中島		H9.4.10	遺構・遺物未確認	
	集合住宅建設事業(民間)	緑町	山添		分布	山崎		H9.4.14	初尾川の氾濫原もしくは河道そのもの	
	地域農業基盤確立農業構造改善事業	緑町	中条	徳原	分布	山崎・坂口・中島		H9.4.15~17/5.6~7	地形的に遺跡埋蔵の可能性あり	
20	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	確認	定松・中島・坂口	片山	H9.5.12~20/7.23/10.14~22	遺構は断層調査時の溝のみ。遺物は7~8Cの須恵器出土。小山状の東側で律令期の包含層確認	
21	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	確認	中島・坂口・定松・山崎	幡多遺跡若宮地区	H9.5.26~6.13/6.30~7.29/8.20	弥生後期~鎌倉時代の遺構・遺物確認	
18	団体営土地改良総合整備事業	三原町	八木	鳥井	確認	山崎	内御堂田	H9.6.2~6/16~20	平安時代の遺構確認	
	保健センター建設事業	南淡町	賀集	賀集	確認	坂口		H9.6.11	遺構・遺物未確認	
	町道154号線道路改良事業	南淡町	賀集	福井	確認	坂口		H9.6.12	遺構未確認	
	基盤整備促進事業(一般型・本庄佐野地区)	南淡町	阿万	上町	確認	中島	北佐野	H9.6.16	遺構は確認しなかったが地形等から遺跡範囲内と思われる	
22	県営土地改良総合整備事業	三原町	八木	寺内	確認	坂口	宮地	H9.6.16~7.16	室町時代の遺構確認	
23	土地改良総合整備事業	南淡町	阿万	上町	本格	中島・定松	北佐野	H9.6.17~27	中世の遺構・遺物確認	
	ダントー(株)淡路福良工場改築事業	南淡町	福良	丙	試掘	坂口		H9.7.10	遺構・遺物未確認	
	ケアハウス淡路エルベ新築事業(民間)	三原町	八木	養宜中	試掘	山崎		H9.8.19	遺構未確認。流れ込みの土師質土器小片	
24	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	本格	中島・坂口・定松・山崎	幡多遺跡若宮地区	H9.8.25~H10.5.6	弥生後期~室町時代の遺構確認。阿波・讃岐系の弥生土器出土	
	町道御陵線道路改良事業	南淡町	賀集	野田	確認	坂口		H9.10.24~27/H10.1.20/3.10	遺構未確認	
25	町道賀集野田牛内線道路改良事業	南淡町	賀集	野田	確認・測量	坂口・山崎	楠谷	H9.10.22~11.4	有舌尖頭器出土	
26	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	確認	定松・坂口	幡多遺跡下内田・野水地区	H9.10.27~11.10	下内田は黒色包含層と柱穴確認。下層の砂礫層より弥生末~古墳初の遺物。野水は律令期の遺物確認	
	農業生産体制強化総合推進対策事業	三原町	神代	社家	確認	坂口		H9.11.10~12	遺構・遺物未確認	
27	特定環境保全公共下水道(八木榎列処理区)処理施設建設事業	三原町	榎列	上幡多	確認	定松・坂口	幡多遺跡下内田地区	H9.11.11	黒色包含層と柱穴確認。包含層より弥生中期の高坏出土	
	上幡多団地建設事業	三原町	榎列	上幡多	確認	定松		H9.11.12	遺構・遺物未確認。成相川の砂礫層の堆積	
	上幡多公会堂建設事業	三原町	榎列	上幡多	確認	定松		H9.11.13	遺構・遺物未確認。成相川の砂礫層の堆積	
28	小榎列農道3路線改良事業	三原町	榎列	小榎列	確認	定松・坂口	志知川沖田南	H9.12.9	志知川沖田南遺跡の続きと思われる水田確認	
	町道21号線道路改良事業	三原町	市	十一ヶ所	確認	定松・坂口		H9.12.11	遺構・遺物未確認	
	町道榎列111号線道路改良事業	三原町	榎列	大榎列	確認	山崎	久保	H9.12.16	遺構未確認	
	南淡バイオファーム計画事業	南淡町	阿万	東町	分布	坂口		H10.1.7~3.22	遺構・遺物未確認	
29	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	本格	定松・坂口・山崎	幡多遺跡下内田地区	H10.1.12~3.13	弥生中期の竪穴住居3棟、廃棄された布留式土器が多量に出土	
	無線基地設置事業	緑町	広田	広田	分布	坂口		H10.2.9	採集遺物なし	
	分譲住宅造成事業(民間)	緑町	広田	中筋	分布	山崎		H10.3.11	摩耗した土師器片。初尾川の影響大	
	南淡バイオファーム計画	南淡町	阿万	東町	試掘	坂口		H10.3.23	遺構・遺物未確認	
	土地開発事業(民間集合住宅建設)	三原町	市	市	試掘	坂口		H10.3.26	遺構・遺物未確認	

調査一覧表 1998年

No.	事業名	町名	所在地1	所在地2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要	備考
	地域農業基盤確立農業構造改善事業	緑町	中条	徳原	試掘	山崎	油谷	H10.4.15	遺構未確認	
	鉄工所及び倉庫建設用地開発事業(民間)	緑町	広田	中筋	確認	坂口		H10.5.13	遺構・遺物未確認	
	三原郡小規模作業所建設事業	三原町	神代	浦壁	確認	定松		H10.5.19	遺構・遺物未確認	
30	町道八木73号線道路改良事業	三原町	八木	国分	本格	坂口	淡路国分寺	H10.5.20~6.3	古代瓦多量に出土	
31	町道入田おのころ線道路改良事業	三原町	榎列	上幡多	本格	山崎・坂口	幡多遺跡若宮地区	H10.5.30~12.20	縄文後期・弥生後期~古墳初頭・中世の遺構・遺物確認	
	区画整理事業(中田地区)	緑町	広田	広田	分布	坂口		H10.6.4	須恵器・土師器採集	
	区画整理事業(四十町地区)	緑町	広田	広田	分布	坂口		H10.6.4~5	須恵器・土師器を採集したが遺跡埋蔵の可能性は低い	
32	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	確認	定松・坂口	幡多遺跡行當地区	H10.6.11~29	集落寄りに7C末~8C初の遺構・遺物確認。弥生IV様式の遺物と木製品刳物出土	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	八木	寺内	確認	坂口		H10.6.15~7.1	遺構・遺物未確認	
33	集約農業地域再編総合整備事業	三原町	八木	鳥井	確認	中島・定松	うとの口	H10.6.15~29/7.15	9~10世紀の遺構確認	
34	集約農業地域再編総合整備事業	三原町	八木	鳥井	本格	中島・定松	うとの口	H10.8.17~27	9~10世紀の遺構面と14世紀より新しい三味の遺構面を確認	
35	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	本格	定松・坂口・山崎的崎	幡多遺跡行當地区	H10.8.26~H11.1.25	弥生中期・奈良時代の遺構・遺物確認。大阪湾型銅戈が破片で土坑より出土。弥生中期の祭祀土器多量出土	
36	土地区画整理事業(中田地区)	緑町	広田	広田	確認	坂口・山崎	中田	H10.10.19~11.16	中世の遺構・遺物確認	
	基盤整備促進事業(一般型・本庄佐野地区)	南淡町	阿万	上町	確認	坂口		H10.11.18~24	遺構・遺物未確認	
	給食センター建設事業	三原町	神代	地頭方	試掘	坂口		H10.12.9~24	自然溝確認	
	町営住宅(宮川団地)建設事業	緑町	広田	広田	試掘	坂口		H11.1.11	遺構・遺物未確認	
	農業集落排水(神道地区処理施設建設)事業	緑町	倭文	神道	試掘	坂口		H11.1.14	遺構・遺物未確認	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	神代	浦壁	分布	的崎・定松・山崎		H11.2.16~3.8	遺物の散布は希薄。しかし鳥田氏居館跡が事業対象地内に含まれる	
37	町道八木73号線道路改良事業	三原町	八木	国分	本格	坂口	淡路国分寺	H11.2.17~3.1	中世~近世の遺構確認。中門推定地付近から古代瓦多量に出土	
	農村型観光施設整備事業	三原町	八木	入田	分布	定松	由ヶ谷古墳・長泉寺古墳・宮田古墳	H11.3.3~8	由ヶ谷古墳1・2・3号墳、直径13mの宮田古墳(横穴)発見	
	団体営土地改良総合整備事業	南淡町	賀集	生子	分布	坂口	細田	H11.3.3~28	土師器・須恵器・サヌカイト・石鏃27点採集	
	ふるさと農道緊急整備事業	緑町	広田	中筋	分布	山崎		H11.3.10	土師質土器片・須恵器片採集	
	町道稲田南本線道路改良事業	南淡町		稲田南	分布	坂口		H11.3.29	土師器・サヌカイト・石器採集	
	町道賀集186号線道路改良事業	南淡町	賀集	野田	分布	坂口		H11.3.30	土師器・須恵器・石鏃1点採集	

調査一覧表 1999年

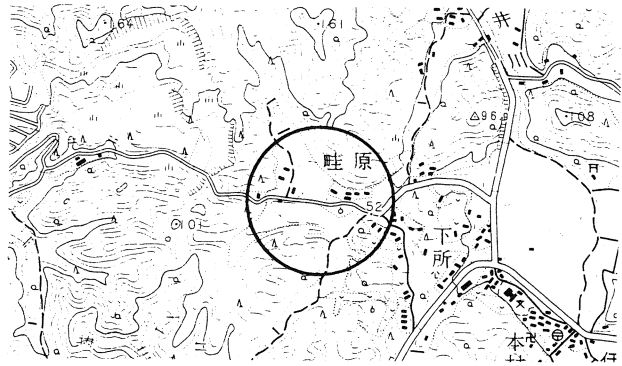
No.	事業名	町名	所在地1	所在地2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要	備考
	農村型観光施設整備事業	三原町	八木	入田	確認	定松		H11.4.12～16	遺構未確認	
	民間土地開発(飲食店建設)事業	緑町	広田	広田	試掘	坂口		H11.4.27	遺構未確認	
38	農村型観光施設整備事業	三原町	八木	入田	本格	定松・坂口・山崎	由ヶ谷古墳	H11.5.6～6.10	2号墳は1号墳の廃棄されたものであった。1号墳は横穴で後期の須恵器出土	
	町道賀集186号線道路改良事業	南淡町	賀集	野田	確認	坂口		H11.5.10	遺構未確認	
		南淡町	灘	城方			山ノ神	H11.5.14	古銭約1,200枚畑より出土	
	はるやま洲本店(紳士服販売店)建設事業	緑町	山添		分布	坂口		H11.6.9	土師質土器・須恵器採集	
39	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	確認	山崎	幡多遺跡野水地区	H11.6.14～7.15	弥生後期の包含層・遺構面、律令期の包含層・遺構面、中世の遺構面を確認	
	団体営土地改良総合整備事業	南淡町	賀集	生子	確認	坂口		H11.6.16～17	遺構未確認	
	はるやま洲本店(紳士服販売店)建設事業	緑町	山添		確認	坂口		H11.7.5～6	遺構未確認	
40	新庄地区公会堂建設事業	三原町	八木	新庄	試掘	坂口	淡路国分尼寺	H11.7.26～8.4	版築状の整地層及び中世の落ち込み確認	
	下幡多地区公会堂建設事業	三原町	榎列	下幡多	分布	坂口		H11.8.24～25	試掘調査必要	
	福永地区公会堂建設事業	三原町	市	市	分布	坂口		H11.8.24～25	問題なし	
	佐礼尾地区公会堂建設事業	三原町	志知	佐礼尾	分布	坂口		H11.8.24～25	立会調査必要	
	円行寺地区公会堂建設事業	三原町	市	円行寺	分布	坂口		H11.8.24～25	試掘調査必要	
	浦壁地区公会堂建設事業	三原町	神代	浦壁	分布	坂口		H11.8.24～25	問題なし	
	鳥井地区公会堂建設事業	三原町	八木	鳥井	分布	坂口		H11.8.24～25	再分布調査	
	段地区公会堂建設事業	三原町	神代	社家	分布	坂口		H11.8.24～25	問題なし	
	(仮)ハートランド三原店建設事業	三原町	市	市	分布	坂口		H11.8.24～25	試掘調査必要	
	県営圃場整備事業	西淡町	松帆	西路	確認	定松		H11.9.6～10	遺構未確認	
	(仮)ハートランド三原店建設事業	三原町	市	市	試掘	坂口		H11.9.8	遺構・遺物未確認	
	洋服の青山洲本店増築事業	緑町	山添		分布	坂口		H11.9.9	試掘調査必要	
	(仮)特別養護老人ホーム太陽の家建設事業	三原町	八木	養宜上	分布	定松		H11.9.16	既に土取りによって表土なし。問題なし	
	洋服の青山洲本店増築事業	緑町	山添		試掘	坂口		H11.9.27	遺構未確認	
41	陸の港建設整備事業	西淡町	志知	南	確認	定松	鉦田	H11.10.4～5	遺物包含層・柱穴確認。県調査と同時代(平安)。一部に古墳時代らしき土師器壺出土	
	民間土地開発(店舗建設)事業	三原町	神代	国衙	分布	坂口		H11.10.8	試掘調査必要	
42	県営土地改良総合整備事業	三原町	榎列	上幡多	本格	山崎・坂口	幡多遺跡野水地区	H11.10.12～H12.3.1	弥生中期後半の方形周溝墓8基、弥生後期の円形周溝墓2基確認。平安時代の刻書土器出土	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	神代	浦壁	確認	定松		H11.10.12～13	遺物未確認。土坑らしき遺構壁面で確認	
	団体営土地改良総合整備事業	南淡町	賀集	生子	確認	坂口		H11.10.13～14	遺構未確認	
43	基盤整備促進事業(一般型)	南淡町	阿万	上町	確認	坂口	下中原	H11.10.18～29	中世の遺構・遺物確認	
	ふるさと農道緊急整備事業	緑町	広田	中筋	確認	定松		H11.10.20	遺構・遺物未確認	
44	町道幡多山線道路改良事業	三原町	榎列	下幡多	本格	定松・的崎	幡多遺跡野水地区	H11.11.22～H12.3.2	弥生Ⅳ様式土器と7C末の大型柱穴掘立柱建物と遺物確認。神本駅家関連遺構の可能性高い	
	県営土地改良総合整備事業	三原町	神代	浦壁	分布	的崎		H12.1.21～2.14	遺物散布わずか	
	農村型体験交流施設整備事業	三原町	八木	養宜上	分布	的崎		H12.2.18	土師器・須恵器採集	
	立石西地区圃場整備事業	三原町	八木	立石	分布	的崎		H12.2.18	採集遺物なし	
	町道榎列111号線道路改良事業	三原町	榎列	西川	確認	坂口		H12.3.1	遺構未確認	
	基盤整備促進事業(笑原地区)	三原町	八木	国分	分布	的崎	淡路国分寺	H12.3.6～7	国分寺推定寺域を含む。古代遺物と中世瓦器・瓦質土器採集	
	基盤整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	野原	分布	的崎		H12.3.9～10	幡多遺跡若宮地区の続きが埋蔵されている可能性有り	
	町道賀集1号線道路改良事業	南淡町	賀集	八幡中	分布	的崎		H12.3.13	採集遺物なし	

第2節 主な発掘調査の成果

1) 平成7(1995)年度

1 あぜはら あぜはらはらし 畦原・畦原原寺遺跡

所在地 三原郡西淡町伊加利2435外字畦原外
事業名 団体営土地改良総合整備事業
調査主体 西淡町教育委員会
担当者 坂口弘貢・山崎裕司
種別 確認調査
調査期間 平成7年5月15日～
平成7年6月2日
調査面積 136㎡(34ヶ所)



調査の位置

1. 調査内容

本調査地は、淡路島南西部の標高約200mあまりの山に囲まれた、複雑に交錯しあう谷筋内に位置している。調査は2×2mの調査区34ヶを設定し、重機・人力併用で進めていった。

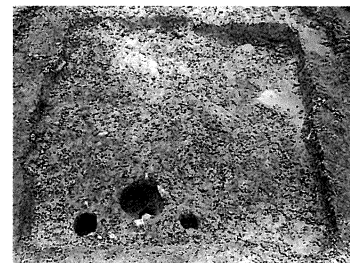
調査の結果、大きく2つの地区(畦原遺跡～No.1・7・23・29・30と畦原原寺遺跡～No.13・22・26)で遺構または遺物包含層を確認した。確認した遺構は中世と考えられる柱穴や小穴などである。出土遺物には、土師質土器、須恵器、瓦器、石鏃などがあつた。

2. まとめ

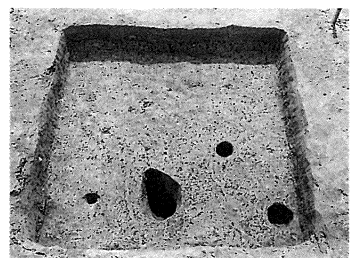
本調査により、大きく2ヶ所で中世の遺構を確認した。出土遺物が少ないことや平坦部が限られていることから、小規模な集落と考えられる。(坂口)



調査区設定図



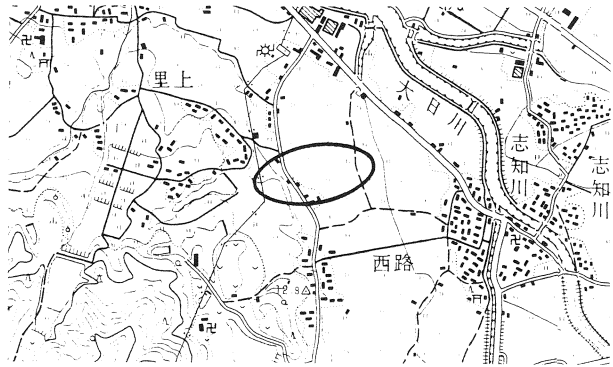
No.13 調査区 全景(東より)



No.22 調査区 全景(東より)

2 ^{あとやま}後山遺跡 - 1次調査 -

所在地 三原郡西淡町松帆西路字後山外
事業名 県営圃場整備事業
調査主体 西淡町教育委員会
担当者 定松佳重・中島薫
種別 確認調査
調査期間 平成7年7月10～14日
調査面積 96m² (24ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

圃場整備事業に伴い分布調査を行った結果、多くのサヌカイト片や未完成の勾玉を採集し、遺跡の埋蔵が推定された。そのため遺跡の範囲や性格を把握すべく、遺跡範囲確認調査を実施した。

調査対象地は、淡路島最大平野である三原平野北西縁辺部の丘陵先端とその前面に広がる緩斜面からなる。

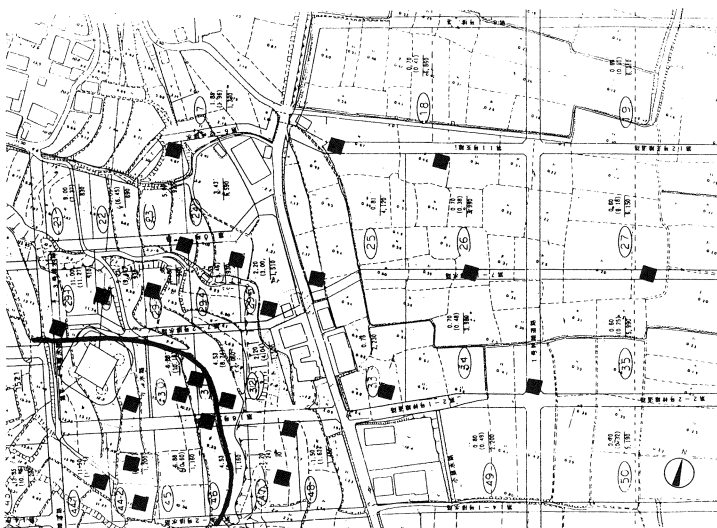
丘陵先端部で柱穴状小土坑を確認した。また、丘陵北側の谷筋で溝状遺構を確認した。

緩斜面部の調査区では遺構は確認されず、大日川の支流である新川の后背湿地となり、土壌も安定はしていなかった。

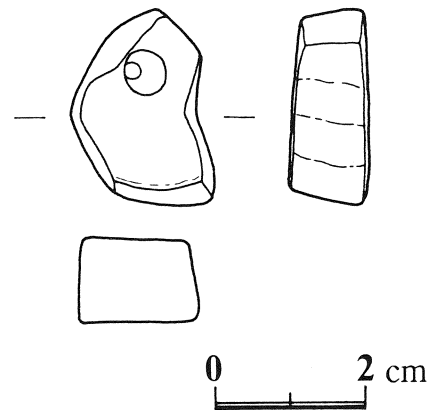
2. まとめ

立地条件の良い丘陵先端部で平安時代と思われる遺構・遺物を確認した。

(定松)



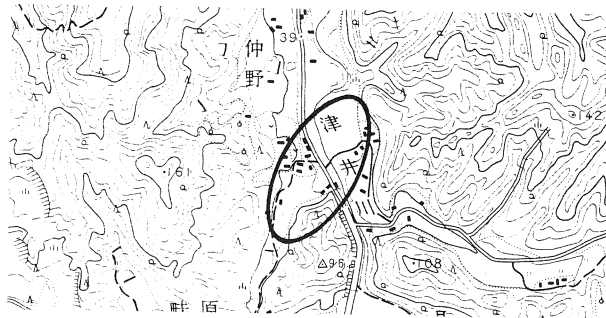
調査区設定図



勾玉未製品実測図

3 ^{いかりなかの}伊加利仲野遺跡

所在地 三原郡西淡町伊加利仲野字仲野外
事業名 団体営土地改良総合整備事業
調査主体 西淡町教育委員会
担当者 定松佳重・中島薫・山崎裕司
種別 確認調査
調査期間 平成7年8月1～4日
調査面積 136㎡ (34ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

上記の事業に伴い分布調査を実施した結果、一部で中世の遺物とサヌカイトの散布をみたことから、事業実施に先立ち遺跡範囲確認調査を実施した。

事業対象地は南辺寺山塊に開けた谷底平野から派生する規模の大きい谷筋に位置する。この谷底平野には弥生～中世の集落跡である伊加利沖田遺跡が立地する。

地山である黄色粘土より掘り込まれた遺構を検出した。杭状やわずかに炭化物を含有する小土坑、柱穴・小土坑を確認した。

2. まとめ

津井川と東部の山との間に広がる平坦部に遺跡を確認した。出土遺物は少なく、また小片であるため確実ではないが中世の範疇に入るとされる。約750m南にも中世集落跡である伊加利沖田遺跡があることから、周辺の谷筋には中世集落が展開すると思われる。

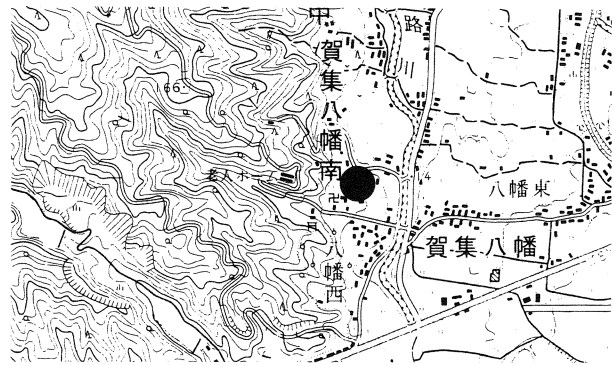
(定松)



遺構完掘状況

4 護国寺東遺跡 - 1次調査 -

所在地 三原郡南淡町賀集八幡南字琴土居外
事業名 町営住宅建設事業
調査主体 南淡町教育委員会
担当者 山崎裕司・坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成7年8月21～25日
平成7年9月5日・10月30～31日
調査面積 100m² (25ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

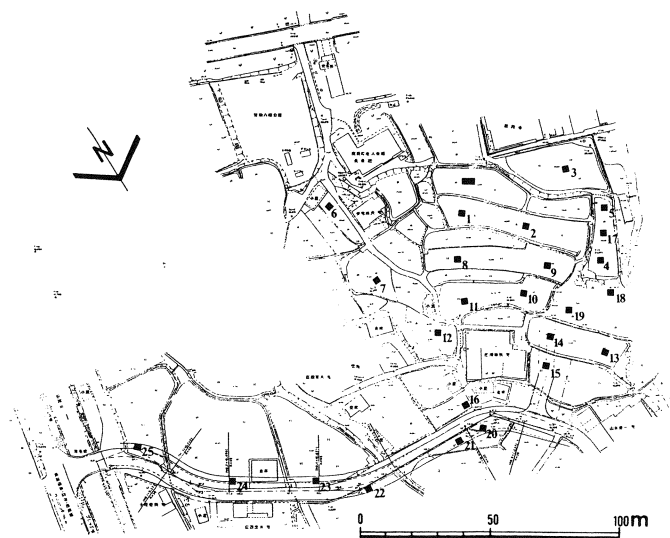
調査地に隣接する護国寺は、淡路島でも多くの中世文書を所蔵することで有名である。また調査地周囲には、現存する淡路島最大の横穴式石室をもつ西山北古墳、佐々木土居城跡、城が丸城跡、殿土居館跡、南辺寺山頂に弥生時代の散布地である西山遺跡などが分布し、三原平野でも歴史的に特に重要な地域と言える。

上記事業に伴い平成5年度に分布調査、2×4mの試掘調査を行い、柱穴等が確認された。それらの結果にもとづき、進入道路の拡幅部分を含めた計25ヶ所の確認調査を行った。

山路川に近い調査区24・25は山路川の影響を受けた砂礫層・砂層で構成され、調査区22と21の間に段丘が見られる。遺構が確認できたのは調査区3・5・7・16・17・21で、南辺寺山山裾の微高地である。調査区3・5・17からは、平安時代から中世にかけての遺構・遺物が確認された。調査区16からは弥生時代後期の竪穴住居跡の壁溝部分、調査区21からは中世と思われる柱穴が確認された。調査区7からは弥生時代後期と思われる遺構が検出された。

2. まとめ

山路川に近い調査区22～25、北側斜面で日当たりの悪い調査区13～15周辺を除いたほぼ全域が遺跡範囲である。先にも述べたように南辺寺山山裾の微高地で、日当たりも良く三原平野一帯の眺望もすばらしい。調査区3・5・17は本格調査のD地区、調査区16・21は本格調査のA地区と重なるので、遺跡の性格等についてはそちらの頁に譲りたい。(山崎)



調査区位置図

5 円座遺跡 - 1次調査 -

所在地 三原郡三原町市新字円座外～
志知難波字福井外

事業名 農業生産体制強化総合推進対策事業

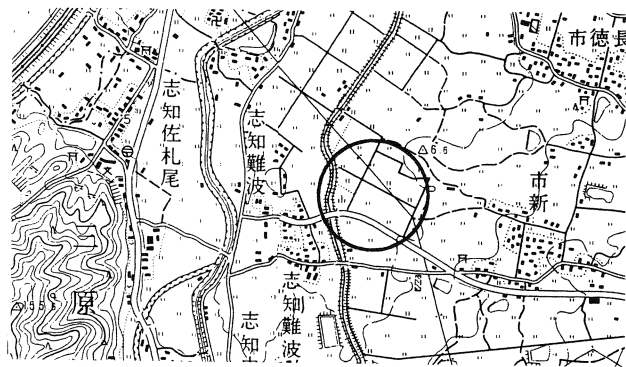
調査主体 三原町教育委員会

担当者 坂口弘貢・中島薫

種別 確認調査

調査期間 平成7年9月11～29日

調査面積 116m² (29ヶ所)



調査の位置

1. 調査内容

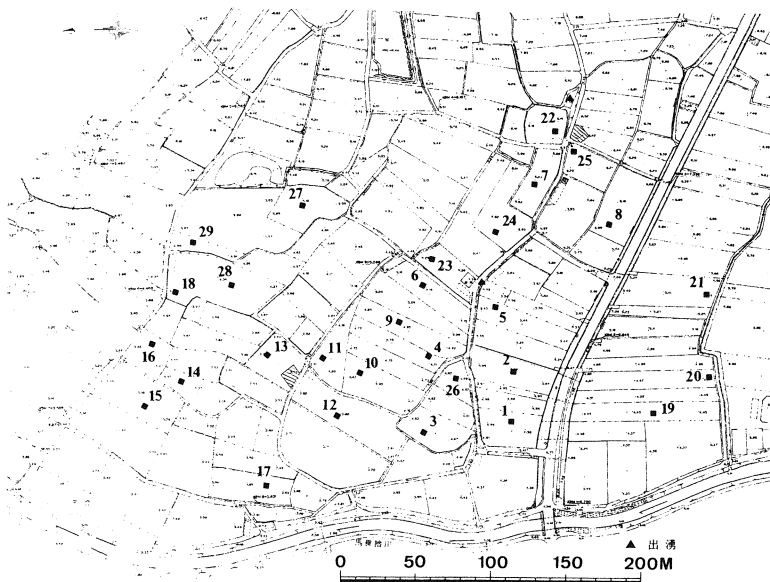
本調査は、三原平野中央やや西部で計画されている上記の圃場整備に伴って行った。調査は2×2mの調査区29ヶ所を設定し、重機・人力併用で進めていった。調査範囲内には扇状地と沖積地の境界付近に認められる出湧と呼ばれる湧き水が2ヶ所存在する（No.22東が円座出湧、No.5北東が福井出湧）。

調査の結果、微高地上で土坑や溝、小穴などの遺構を確認した。その内No.28調査区では南東から北西方向にのびる溝を1条確認した。溝は検出面で幅約70cm、深さ約20cmを測る。遺構内からは、コンテナ1箱分の弥生土器（後期）が出土した。

2. まとめ

本調査により、微高地上にて弥生時代後期を中心とする遺構を確認した。調査面積が狭小なため、遺跡の性格は判断しがたいが、周辺に残る出湧（湧き水）と遺跡立地の関係が特に注意される。

(坂口)



調査区設定図



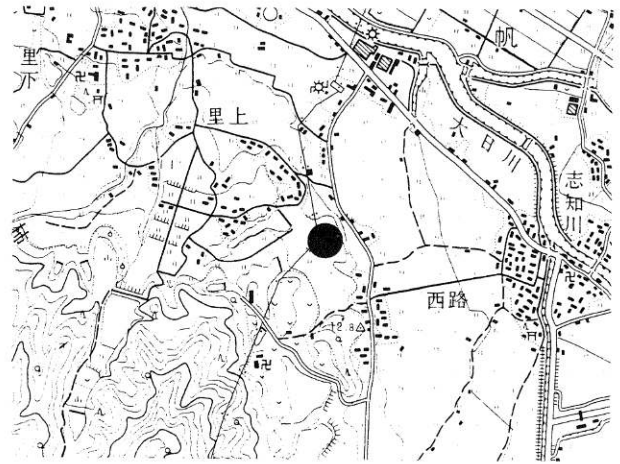
円座出湧（北西より）



No.28 調査区全景（南西より）

6 あとやま 後山遺跡 - 2次調査 -

所在地 三原郡西淡町松帆西路字後山
事業名 県営圃場整備事業
調査主体 西淡町教育委員会
担当者 定松佳重・山崎裕司
種別 本格調査
調査期間 平成7年9月18日～
平成7年11月6日
平成7年12月4日～
平成8年2月6日
調査面積 1,500㎡



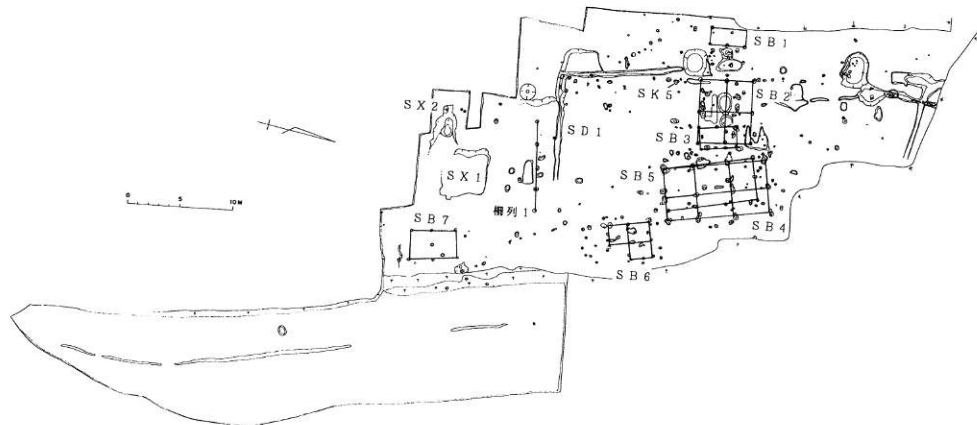
調査の位置

1. 調査の概要

上記の事業に伴い、分布調査・遺跡範囲確認調査を行った結果、約1,500㎡に遺跡の埋蔵が確認された。その成果をもとに関係組織と協議を行い、事業実施によって遺跡が破壊されることから、本格調査を行い記録による保存をすることとなった。

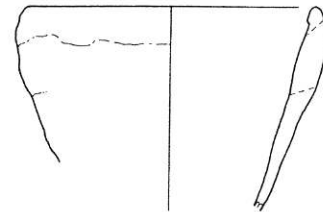
検出した遺構は掘立柱建物、柵列、土坑、溝、不明土坑などである。

掘立柱建物は大きく1・2・7、3・4・5・6に分かれる。前者はSD1を伴い、SD1より白磁皿IV類(12C後～13C前)が出土していることから12～13世紀頃となる。SB2・3の切り合い関係は、遺構内出土遺物では時代判別不可能であるが、遺物包含層より15～16C前半の美濃天目茶碗片や備前焼片、龍泉窯系青磁無文椀E類が出土しており、土坑との立地関係を考慮するとSB2が先行することが判明した。よって後者の掘立柱建物群は15～16世紀頃と思われる。



遺構平面図

SX1 約4.3×4.5m、深さ10cmの浅いくぼみから多数の製塩土器（丸底Ⅳ式）が出土した。器壁内面はほとんどが縦方向のナデ調整であるが、布目痕のものも多く出土した。丸底Ⅳ式は胎土に1mm前後の砂粒を多く含むが、砂粒のかわりに粉やわらを混入する場合もあり、ここでも数点粉やわら痕のある土器片を確認している。これらの製塩土器とともに8C後半～9C前半の須恵器杯が出土した。また、付け庇が炊口を全周するタイプと思われる竈形土器片も出土した。この遺構の南側に隣接して90×50cmの範囲で焼土を確認した。



SX1 出土製塩土器 (S=1/4)

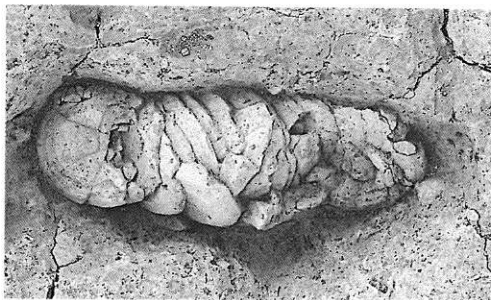
SK5 土師器皿が17枚うつ伏せで重なって出土した。上から

11枚目と12枚目の間から元豊通寶（1078年初鑄）

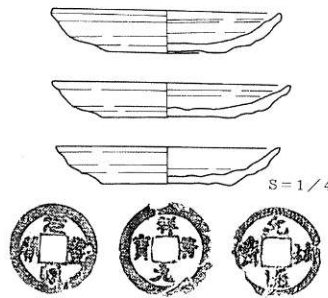
12枚目と13枚目の間から破片

13枚目と14枚目の間から祥符元寶（1009年初鑄）

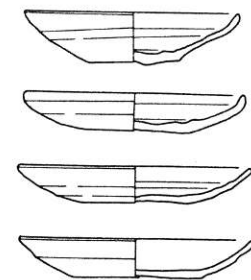
16枚目と17枚目の間から元祐通寶（1086年初鑄）が出土し、すべて北宋時代のものである。地鎮遺構と思われる。この土師器皿は三原町安国寺跡出土土師器皿との類似が指摘されている。



SK5 遺物出土状態（東より）



SK5 出土遺物（古銭 S=1/2
土器 S=1/4）



安国寺跡出土 (S=1/4)

2. まとめ

本遺跡は①平安時代初期（8C後半～9C前半）、②平安時代末～鎌倉時代中期（12～13C）、③室町時代中期（15～16C）と3時期に活動していたことが判明した。遺構を活動時期別に観ると、

① SX1・2

② SB1・2・7 SD1 柵列1

③ SB3・4・5・6

となる。

今回の調査の成果で注目されるのは多量の製塩土器（丸底Ⅳ式）の出土である。現在西淡町内において丸底Ⅳ式が確認された遺跡は谷町筋遺跡・雨流遺跡・鈿田遺跡、淡路島内では船頭ヶ内遺跡（東浦町）・貴船神社遺跡（北淡町）・三ツ川遺跡・里池遺跡・下内膳遺跡（洲本市）・岩谷遺跡（南淡町）であり、それらは表面採集によるものや、少量の出土量であったが、本遺跡では1つの遺構の中からコンテナ1箱分の製塩土器が出土した。この丸底Ⅳ式は焼き塩用とされており、それらが多量に出土したことはなんらかの分業が行われていたのではないかと推測される。

また、輸入青磁も多く出土し、三足香炉や花器等一般集落からの出土とは異なる器種構成であり、類似する遺物を持つ安国寺跡との関連を考慮しなければならない。

（定松）

7 えんご 円座遺跡 - 2次調査 -

所在地 三原郡三原町市新字高田外～
志知難波字福井上外

事業名 農業生産体制強化総合推進対策事業

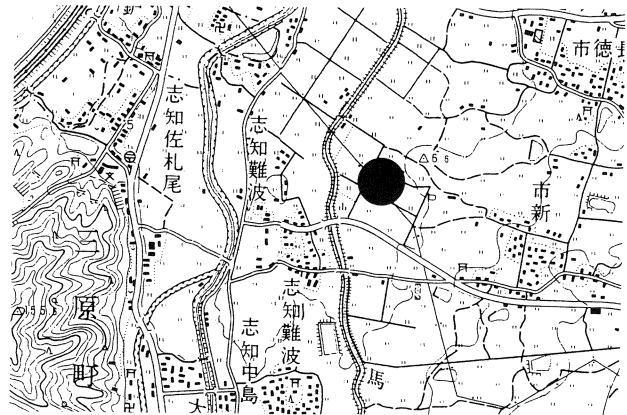
調査主体 三原町教育委員会

担当者 坂口弘貢・中島薫

種別 本格調査

調査期間 平成7年10月4日～
平成8年1月26日

調査面積 約400㎡



調査の位置

1. 調査内容

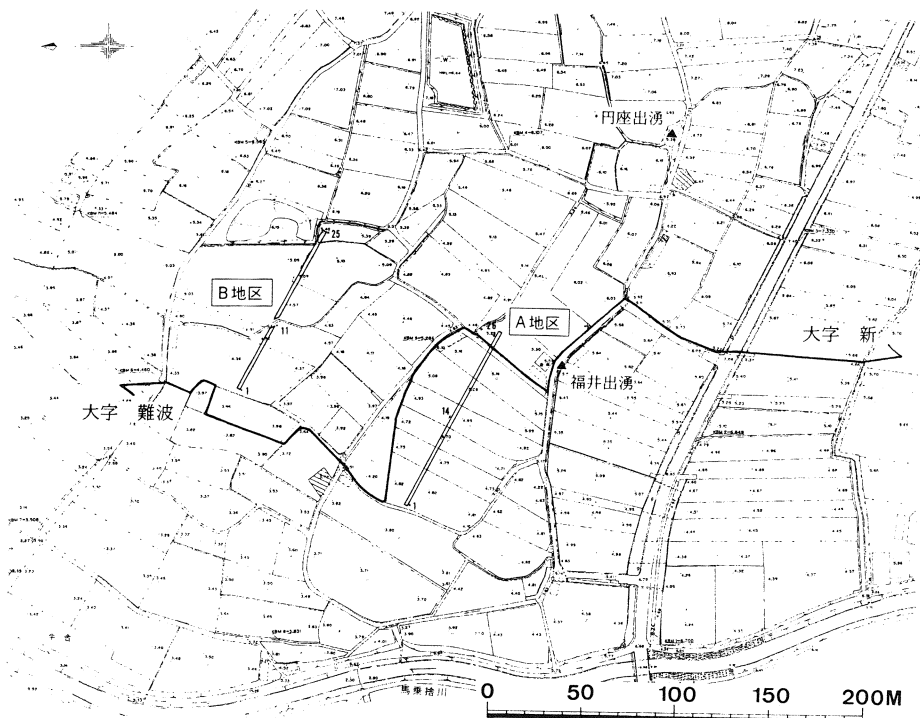
本調査は、三原平野中央やや西部で計画されている上記の事業に伴い行った。調査は、先の確認調査結果を受けて、工事により地下に掘削がおよぶ排水路部分に幅2m×長さ約100mの調査区を2ヶ（A地区とB地区）設定して重機・人力併用で進めていった。

調査により確認した遺構には、明確ではないが、建物を構成すると思われる柱穴や土坑、溝などがあつた。出土遺物はコンテナにして約8箱あり、弥生土器、土師質土器、偏平片刃石斧、石鏃などが出土している。

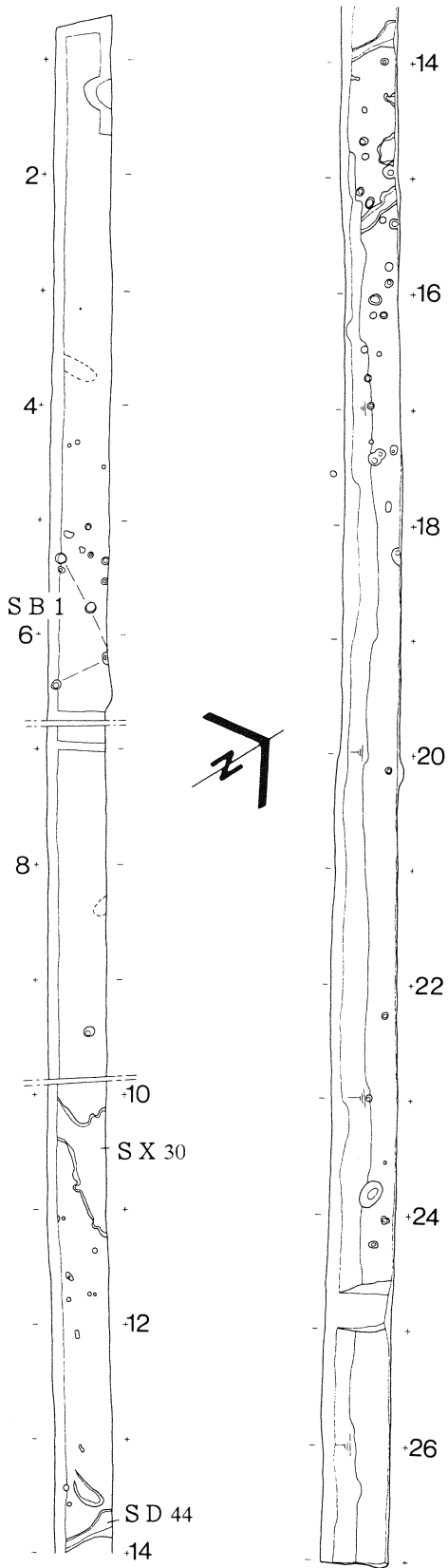
2. まとめ

本調査によって、本遺跡の時代は弥生時代後期と中世の2時期であることがわかった。さらに中世の遺構がB地区の東部に限定されることや出土遺物の9割以上が弥生時代後期のもので占められることから、中心は弥生時代後期と考えられる。

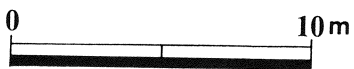
(坂口)



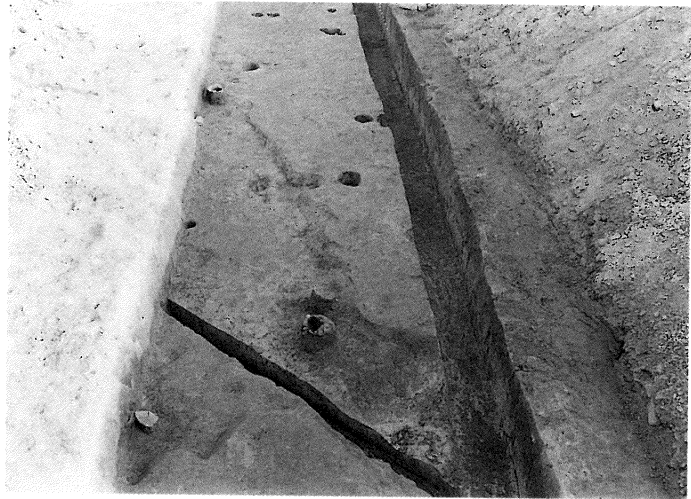
調査区設定図



A地区平面図



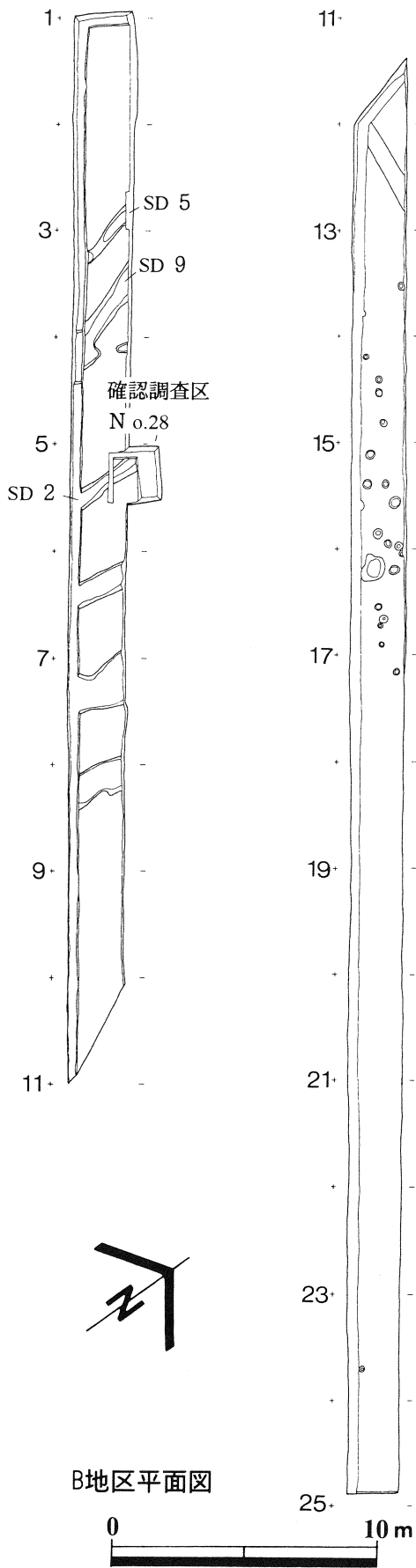
A地区 10~26区 全景 (北西より)



A地区 S X 30 (北西より)



A地区 S D 44 (南より)



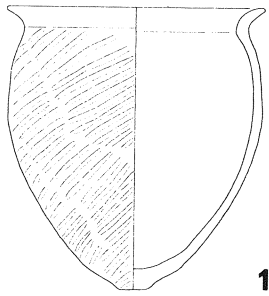
B地区 1~10区 全景 (南東より)



B地区 14~16区 全景 (南東より)



B地区 SD 2 (南東より)



1



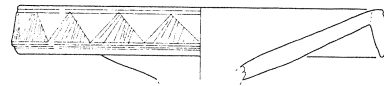
2



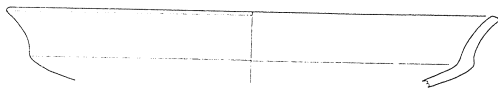
3



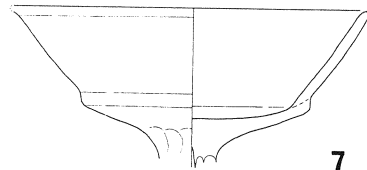
4



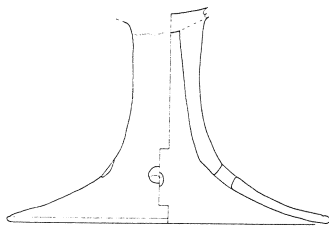
5



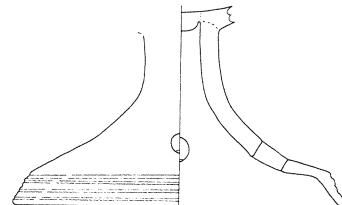
6



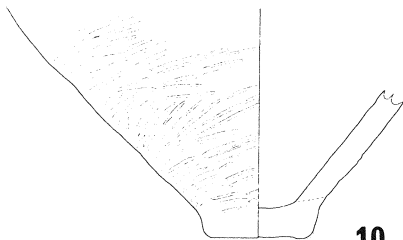
7



8



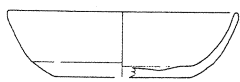
9



10



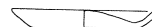
11



12



13



14



15



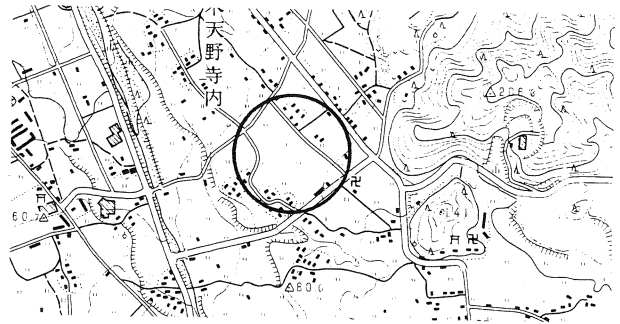
円座遺跡出土土器

確認調査 (1、4、7、11、12、13、14、15)

本格調査 (2、3、5、6、8、9、10)

8 ^{そと}外かち遺跡 - 1次調査-

所在地 三原郡三原町八木寺内字前ノ土井外
事業名 県営集約農業地域再編総合整備事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 中島薫・坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成7年10月18～24日
調査面積 56㎡ (14ヶ所)



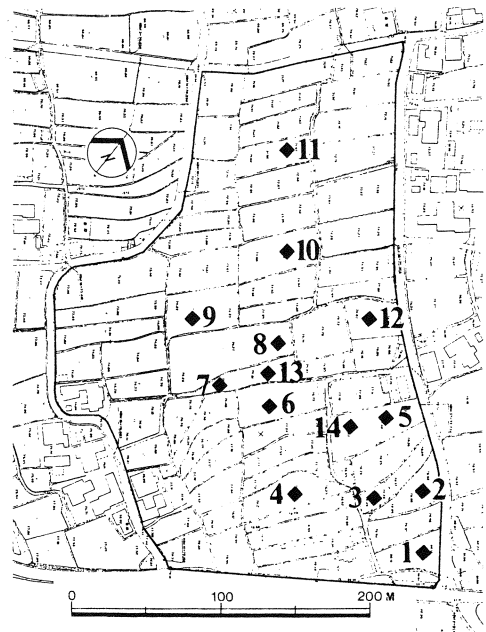
調査の位置

1. 調査の概要

本調査は県営集約農業地域再編総合整備事業に伴い、平成6年度に分布調査を実施した結果、凹基無茎式石鏃を含む近世以前の遺物を採集したため、埋蔵文化財確認調査を行った。

調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野の南東端に位置し、明瞭な河岸段丘がみられる三原川の右岸段丘上にあたる。標高75m前後の当地からは、北西方向に播磨灘が望める。

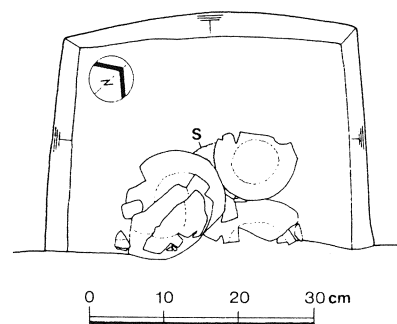
調査は追加調査も併せて14ヶ所行い、微高地上に設定したNo.5の北西壁面の遺構から土師皿の集積を確認した。部分的に拡張した結果、土師皿は3枚・2枚・1枚と伏せた状態で3つの山に分かれ、土師皿の間からは古銭がバラバラに5枚出土した。銭種は祥符元寶1枚(初鑄1009年)・元符通寶1枚(初鑄1098年)・永楽通寶2枚(初鑄1408年)・無文銭1枚であり、かなり腐食している。土師皿は全て口径が11cm余りで、糸切り底を呈する。この調査区以外では、No.12から近世の溝を検出し、No.5と同じ田面に追加したNo.14では、谷状の落ちを確認した。



調査区配置図

2. まとめ

今回の調査で、微高地の南西部に位置するNo.5で地鎮遺構を確認した。出土した古銭の中で、最新銭にあたる永楽通寶の初鑄年が1408年であることからそれ以前に遡ることはなく、大凡15世紀中葉以後の室町時代の遺構と思われる。微高地は今回の調査対象地外である東方向に頂部をもつため、No.5は遺跡の縁辺部にあたり、その中心は東方向に広がっているものと推測する。

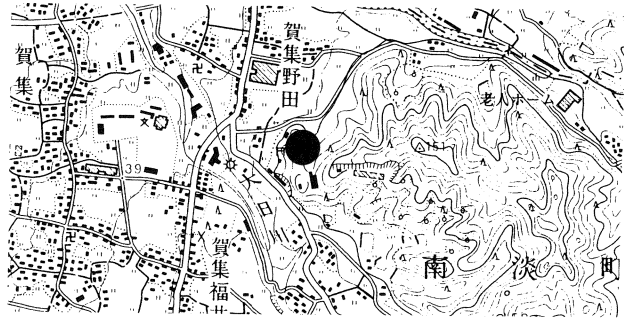


No.5 遺物出土状況

(中島)

9 ^{のたやま}野田山古墳

所在地 三原郡南淡町賀集野田
事業名 町道賀集野田牛内線道路改良事業
調査主体 南淡町教育委員会
担当者 坂口弘貢・定松佳重
種別 確認調査・測量調査
調査期間 平成7年11月20～25日
調査面積 6 m² (1ヶ所)



調査の位置

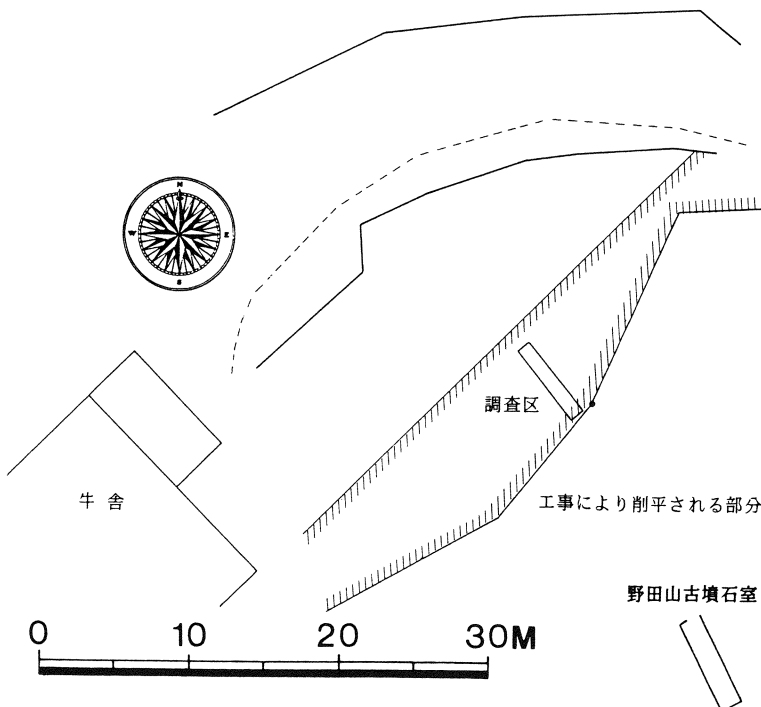
1. 調査内容

本調査は、三原平野南部の南淡町賀集野田で計画されている道路改良事業に付随する牛の放牧場拡張に伴い実施した。調査は、工事計画が古墳の石室に直接かかるものでないため、1×6 mの調査区を石室の開口方向に合わせて事業対象地内に1ヶ所設定し、人力で進めていった。調査の結果、5 cmあまりの厚さではほぼ均一で堆積している表土の下は、岩盤または粘土層となり、遺構・遺物の発見はなかった。

以上の通り、事業対象地内には文化財が確認できなかったが、地権者の許しを得て、石室の実測図作成と写真撮影を行った。測量調査により、野田山古墳は北方向に開口する横穴式石室墳で、石室の規模が内法で最大幅1.7m、長さ4.15mの規模を測ることが分かった。

2. まとめ

確認・測量調査や現地表面の観察から、本古墳は直径12m前後の円墳が想定される。 (坂口)



調査区設定図



石室全景 (北西より)

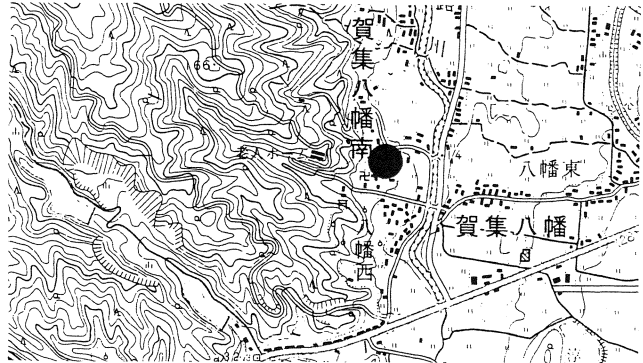


石室全景 (南東より)

2) 平成8(1996)年度

10 護国寺東遺跡^{ごこくじひがし} - 2次調査 -

所在地 三原郡南淡町賀集八幡南字琴土居外
事業名 町営住宅建設事業
調査主体 南淡町教育委員会
担当者 山崎裕司・中島薫
種別 本格調査
調査期間 平成8年2月21日～
平成8年9月13日
調査面積 2,710²



調査の位置

1. 調査の概要

調査地は三原平野の南西端、南辺寺山山裾の微高地で、三原平野一帯の眺望がひらける。調査地に隣接する護国寺は、淡路島でも多くの中世文書を所蔵することで有名である。

上記事業に伴い平成5年度に分布調査、平成7年度に確認調査を行った。それらの結果に基づき、建物部分を中心に発掘調査を行った。

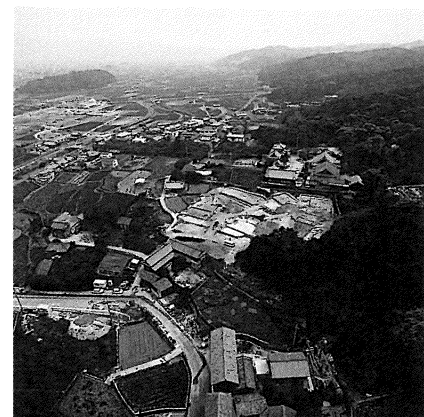
調査の結果、弥生時代後期、平安時代～近世にかけての遺構が検出された。

弥生時代後期の遺構としては、A・E・F地区で計3棟の竪穴住居跡を検出した。平面形はすべて円形で、復元径はSH02が約5m、SH03は約6mの大きさとなる。SH01は住居の拡張が行われており、拡張後の復元径が約7.3m、拡張前の復元径は約6mとなる。SH03の周囲には、住居内への水の進入を防ぐために掘られたと思われる溝が検出された。

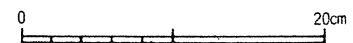
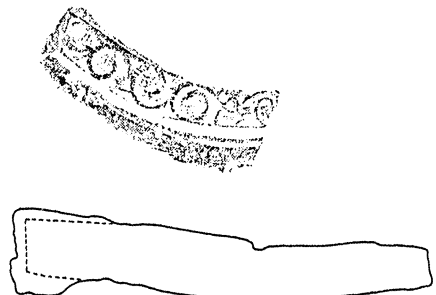
護国寺と隣接するD地区では、律令期の瓦が多く出土している。淡路国分寺出土軒平瓦25型式(『淡路国分寺』三原町教育委員会1993)と同文のものが一点出土しており、およそ10世紀代のものと考えられる。

A地区では鎌倉時代の掘立柱建物が5棟検出できた。最大のSB04は梁間2間・桁行3間の身舎の周囲に半間の庇が付く。SB05はこれより一回り規模が小さいが、同じ様な構造をもつ。C地区のSB02は鎌倉時代末から室町時代頃の掘立柱建物で、梁間1ないし2間・桁行4間、東側に1間分の張り出しを持つ。E地区では梁間2間・桁行4間のSB03が検出できた。平安時代末頃の建物と思われる。

石列はすべてD地区で検出されており、およそ室町時代頃の遺構と考えられる。石列01・02・03ともに東側に面をあわせる。



調査地遠景(北から)



D地区出土軒平瓦

2. まとめ

弥生時代後期後半頃の限定された期間に小規模な集落が営まれ、廃絶していることが特徴的である。眺望の良い場所に立地しており、高地性集落的な性格を持つと考えられる。

護国寺は寺伝では貞観年間（859～877年）に創建されたということになっているが、これまでは11世紀後半～12世紀頃の製作と考えられている仏像が寺の歴史を示す最古のものであった。今回、先述の軒平瓦が出土したことにより、寺の歴史が少なくとも10世紀にまで遡ることがほぼ明らかになった。

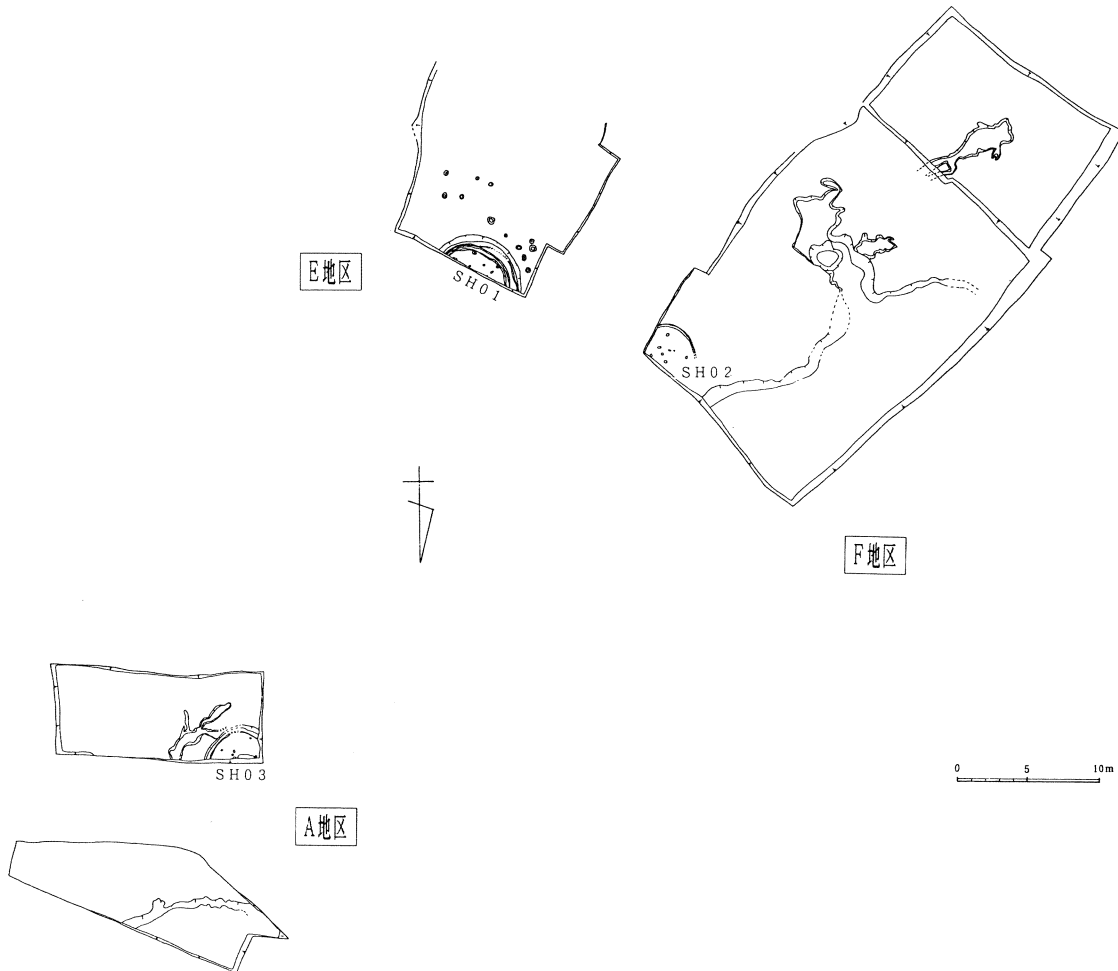
「護国寺文書」や絵図等から、護国寺は室町時代には多くの坊があり、栄えていたことがうかがえる。C地区、D地区は、絵図では坊が建てられていた場所にあたり、石列は坊の施設の一部であろう。SB02やSB03はこれより時代的に遡るようであるが、これも坊の建物の可能性が考えられる。（山崎）



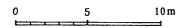
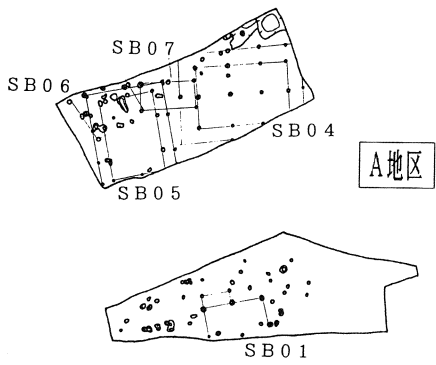
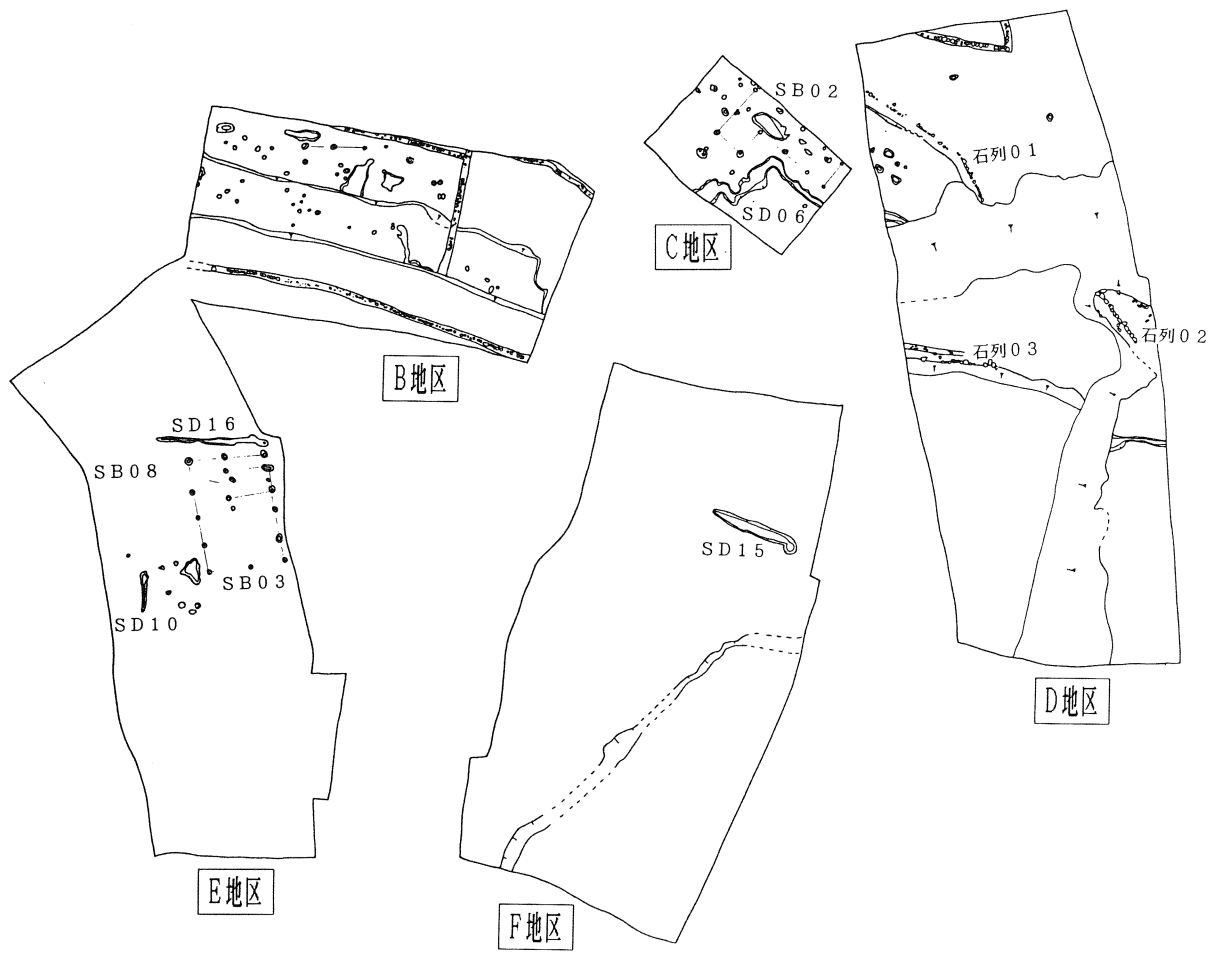
SH01（南から）



石列01（北から）



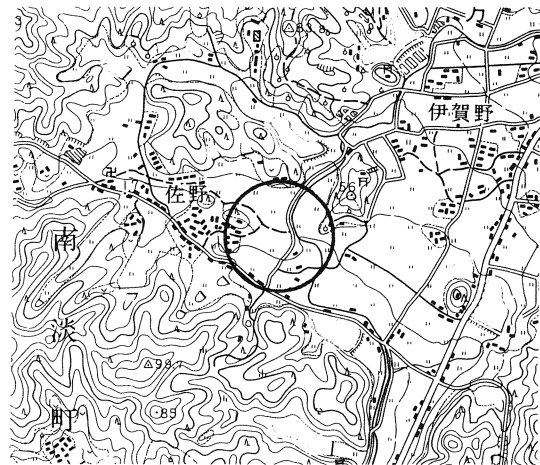
弥生時代遺構平面図



平安時代～近世遺構平面図

11 ^{きたさの}北佐野遺跡 - 1次・2次調査 -

所在地	三原郡南淡町阿万上町字北佐野外
事業名	土地改良総合整備事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	中島薫・山崎裕司・定松佳重・坂口弘貢
種別	確認調査
調査期間	平成7年11月24・27日・ 平成8年6月3日(1次) 平成8年10月21~24日(2次)
調査面積	44m ² (1次・11ヶ所) 56m ² (2次・14ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

土地改良総合整備事業施工に際して、平成6年度に分布調査を行った結果、サヌカイト・土師質土器・須恵器・陶磁器などが採集された。これを基にして埋蔵文化財確認調査を行うこととなったが、農作物の関係上2回に分かれることになった。

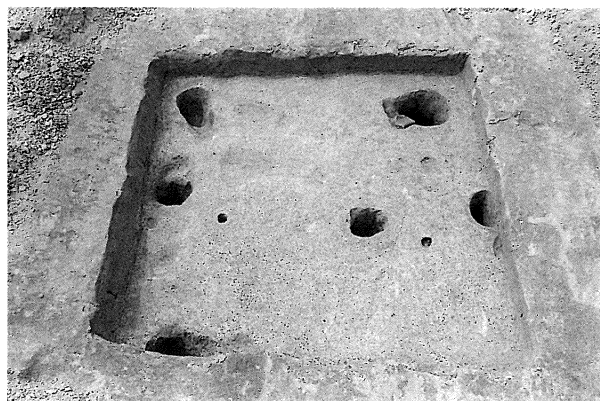
調査地は、論鶴羽山系から阿万の平野部へと蛇行しながら南流する塩屋川の両岸にあたり、三方を山で囲まれた北から南への緩斜面上に位置する。

2×2mの調査区を1次・2次あわせて25ヶ所調査した。塩屋川の両岸では土壌の様相が大きく異なっていた。内湾する左岸域では不安定な砂層の堆積がみられ、生活には適していなかったようだが、安定した黄色系粘質土をもつ右岸域の微高地からは遺構または包含層を確認した。しかし微高地上に設けた調査区は、後世における田圃の造成によって削平を受けているところが多く、その削平は遺構面にまで及んでいる所もあった。微高地上の柱穴や土坑などの遺構からは、土師質の土鍋・皿・捏鉢、瓦器、瓦質土器、須恵器、鉄製品などが出土している。また、微高地～谷部に設けた調査区の中で、粘土採掘坑と思われる楕円形を呈する土坑や落ち状の遺構を検出した。

2. まとめ

今回の調査で、調査区25ヶ所の内6ヶ所で遺構か包含層を確認し、事業対象地に遺跡が包蔵されていることが明らかになった。北佐野遺跡は南北にのびた微高地上に営まれた集落跡であり、その時代は出土した遺物より13世紀後半～14世紀頃と思われる。

(中島)



遺構完掘状況

12 ^{おおはた}大畑遺跡・^{かたやま}片山遺跡 - 1次調査-

所在地 三原郡西淡町松帆西路字大畑
三原郡西淡町松帆西路字片山

事業名 県営圃場整備事業

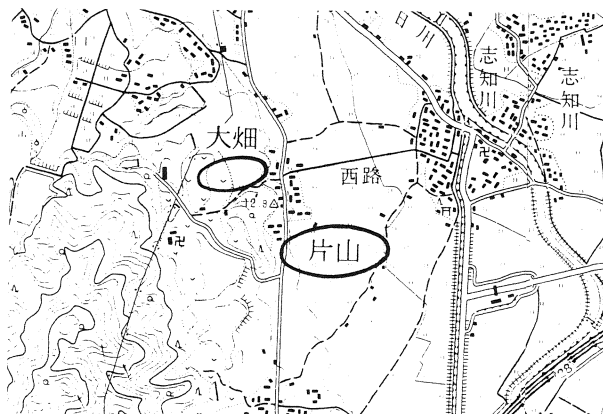
調査主体 西淡町教育委員会

担当者 定松佳重・中島薫

種別 確認調査

調査期間 平成8年6月12日～
平成8年7月27日

調査面積 224㎡ (56ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

三原平野が狭くなり播磨灘を望む開口部、南辺寺山塊西麓から派生する丘陵部とその前面に広がる緩斜面に位置する。谷を挟んで北には中世集落跡である後山遺跡、西には三昧^{さんま}（両墓制の埋葬）の敷地内に県指定重要文化財である貞治三（1364）年六面石幢^{せきどう}がある。

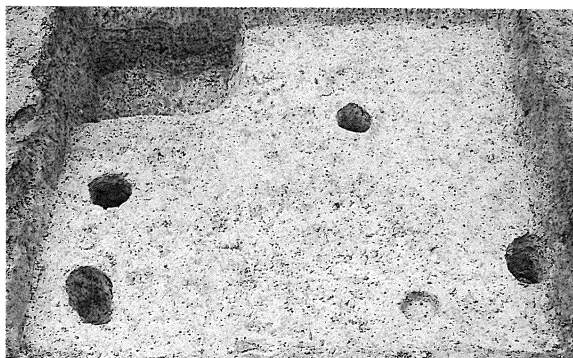
【大畑】 調査区のほとんどで耕作土直下が黄色粘土の遺構面となり、柱穴と土坑を確認した。遺物包含層がないため出土遺物は少ないが、中世の範疇にはいる遺物である。

【片山】 舌状台地の上で遺構を確認した。特に町道片田・湊線に近い調査区では柱穴や規模の大きな溝を検出した。

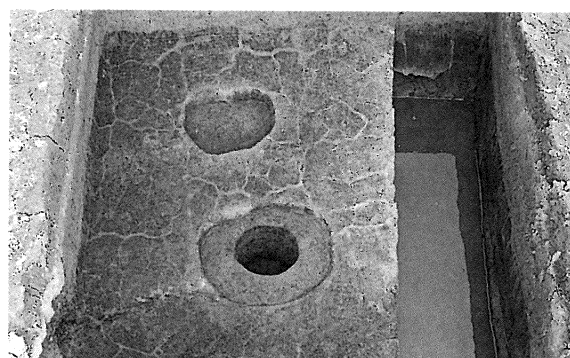
2. まとめ

大畑地区では中世遺跡の埋蔵が確認できた。北側に中世集落遺跡である後山遺跡が立地することから、関連性のある遺跡と思われる。

片山地区は古墳時代末期と平安時代初期の遺構の埋蔵が確認できた。遺跡の立地する台地状の高まりは今回の調査対象地よりまだ南に続いており、分布調査でも遺物を多く採集していることから、遺跡は南に続くと思われる。また台地より東側は常に水の影響を受けており、水田に適した湿地であったようである。 (定松)



大畑遺跡 遺構完掘状況



片山遺跡 遺構完掘状況

13 ^{そと}外かち遺跡 - 2次調査 - ・ ^{えびすぞえ}戎添遺跡 - 1次調査 -

所在地 三原郡三原町八木
寺内421-1外字戎添外

事業名 県営土地改良総合整備事業

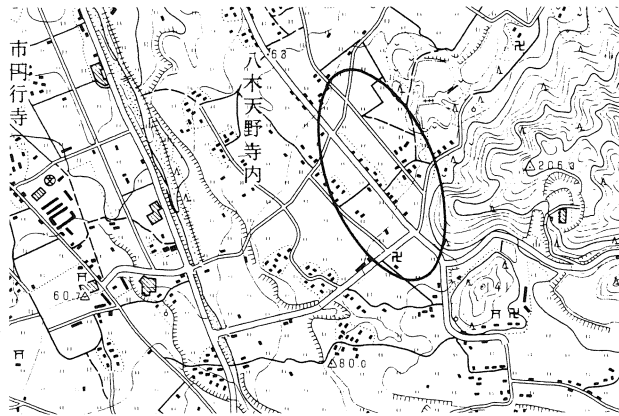
調査主体 三原町教育委員会

担当者 坂口弘貢・定松佳重

種別 確認調査

調査期間 平成8年6月17日～
平成8年7月10日

調査面積 200m² (50ヶ所)



調査の位置

1. 調査内容

本調査地は、三原平野南東部三原川中流右岸域の八木寺内に位置する。三原川中流から上流にかけての地域は河岸段丘が明瞭に発達しており、調査地も河岸段丘が明瞭に認められる。

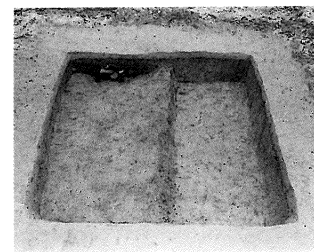
調査は2×2mの調査区を50ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。調査の結果、大きく2つの地区 (No.26・31・48(外かち遺跡)、No.9・12・22・23(戎添遺跡)) で遺構を確認した。確認した遺構には弥生時代後期と中世のものがある。弥生時代後期の遺構は、No.22・23の土坑のみで中心は中世である。出土遺物は弥生土器(後期)や中世の底部外面糸切の土師質皿や羽釜、丸瓦等がある。

2. まとめ

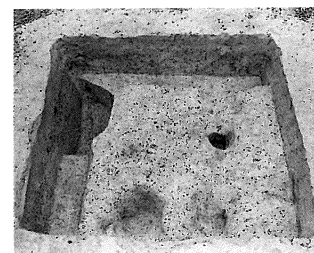
本調査により、弥生時代後期と中世の遺構を確認した。調査面積が狭小なため、各遺構の性格は判別しがたいが、中世の集落跡が中心と考えられる。(坂口)



調査区設定図



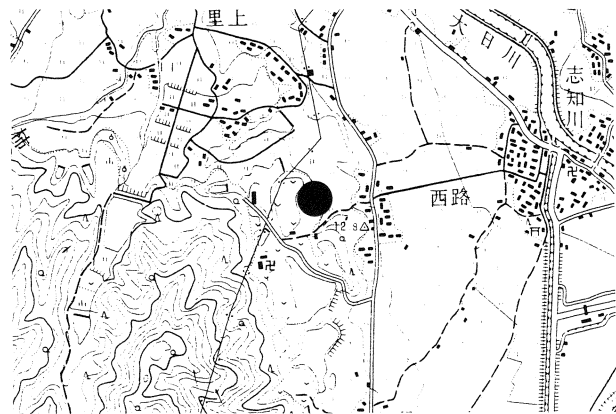
No.22 調査区全景 (西より)



No.26 調査区全景 (南西より)

14 ^{おおはた}大畑遺跡 - 2次調査 -

所在地 三原郡西淡町松帆西路字大畑
 事業名 県営圃場整備事業
 調査主体 西淡町教育委員会
 担当者 定松佳重・坂口弘貢・
 中島薫・山崎裕司
 種別 本格調査
 調査期間 平成8年7月15日～
 平成8年12月6日
 調査面積 2,350m²



調査の位置

1. 調査の概要

本調査対象地は三原平野北西部、南辺寺山塊西麓から派生し標高14.5mを測る丘陵部に位置する。

掘立柱建物6棟、溝2条、土坑を検出した。溝は調査区西南隅より北流し、調査区中央で東流する。幅約1.2m、深さ20～30cmを測り、SB1を囲むように流れている。SB6は東西3×2間の庇付総柱建物である。SK441は直径約2.5m、深さ約58cmで、火を受けた石が多数入っていたが焼土・炭化物の混入はない。SK75は墓の可能性はある。



遺構平面図

2. まとめ

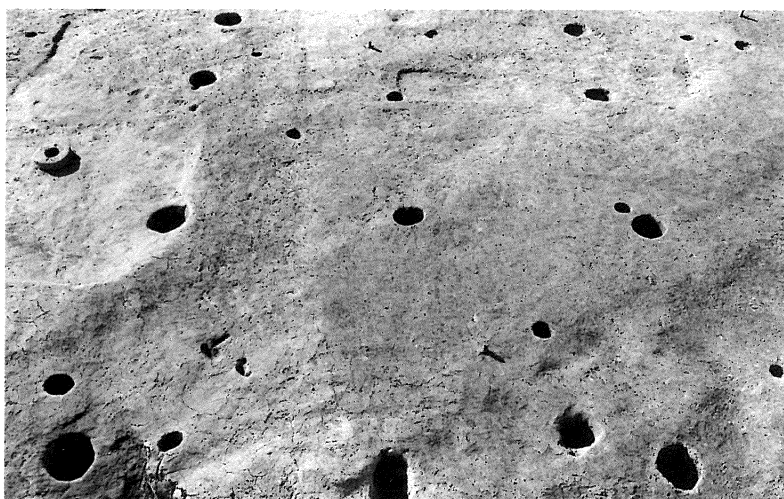
大畑遺跡は北に立地する後山遺跡と同時期、13～14世紀と15世紀の遺跡であることが判明した。遺構を活動時期別にみると

① SB 2・3・5 SK75

② SB 1・6 SD 1・294 SK441

となり、①が13～14世紀、②が15世紀に活動している。

遺物は後山遺跡でもそうであったが、一般集落から出土するような輸入青磁の器種構成ではなく、武家階級の居館を推測させる。また、生活雑器が後山遺跡と比べると多く、焼土を多く検出したことから、私的性格が強い遺跡といえる。 (定松)



SB 6 (東より)



SK 4 4 1 (北より)

えびすぞえ
15 戎添遺跡 — 2次調査 —

所在地 三原郡三原町八木
寺内392外字戎添外

事業名 県営土地改良総合整備事業

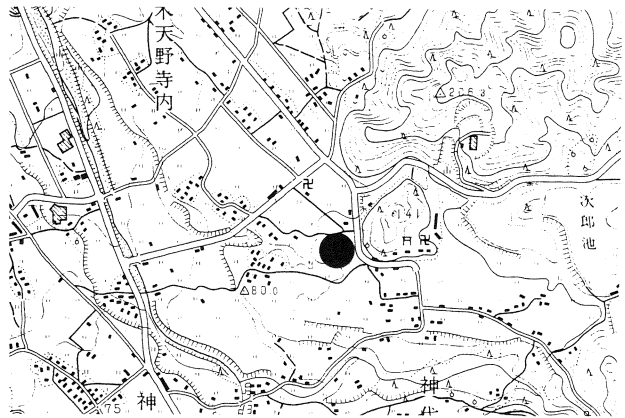
調査主体 三原町教育委員会

担当者 坂口弘貢・山崎裕司

種別 本格調査

調査期間 平成8年10月7日～
平成8年11月29日

調査面積 約330㎡



調査の位置

1. 調査内容

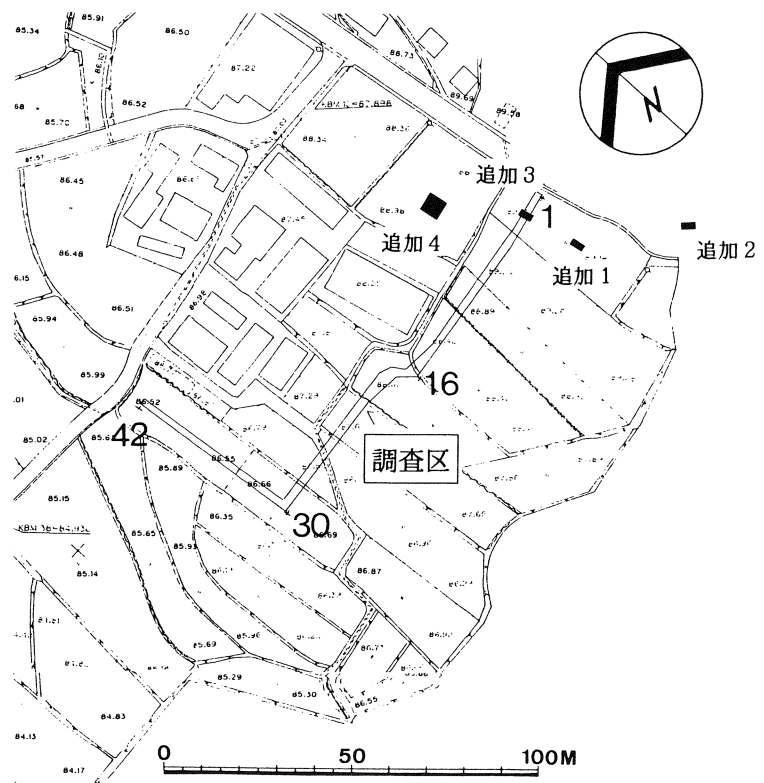
本調査は上記の事業に先立ち、地下の遺跡が破壊される排水路部分の調査を実施した。調査は先の確認調査を補ったうえで、幅約2m、長さ約160mの「逆L字」型の調査区を設定し、重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、弥生時代の遺構（SK1・3）や中世の遺構（SK26・37等）、近世の遺構（SD71等）を確認した。SK1・3からは細片下した弥生時代後期の遺物が出土している。中世の遺構からは土師質皿、須恵器、瓦器等が出土している。土師質皿はいずれも底部外面が回転糸切り技法である。また7～8区の検出作業中に羽口状の遺物に伴って鉄滓や炭・焼土が出土しており、周辺で小規模な鍛冶的作業が行われていた可能性が高い。SD71は埋土が土というよりむしろ直径約10cmの礫で構成されており、周辺の水田化に伴う排水的機能（暗渠）を有していたと考えられる。遺構内からは近世の土師質の焙烙等が出土している。

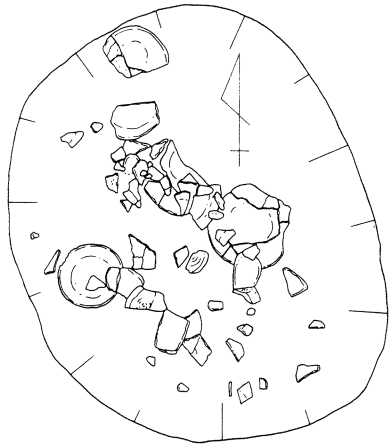
2. まとめ

本調査により、弥生時代（後期）・中世・近世の遺構を確認した。出土遺物量や遺構数から中世が中心の集落跡と考えられる。

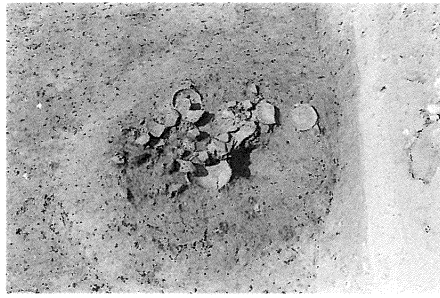
（坂口）



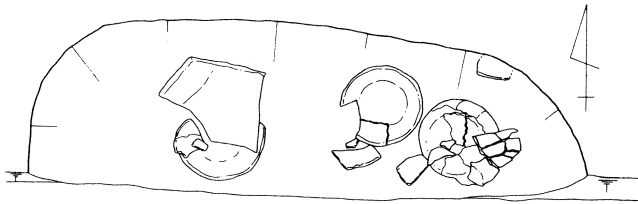
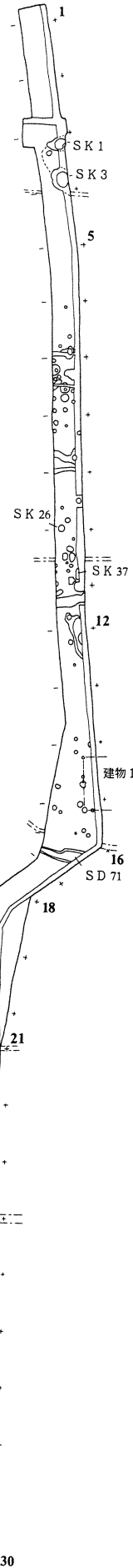
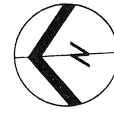
調査区設定図



S K 26



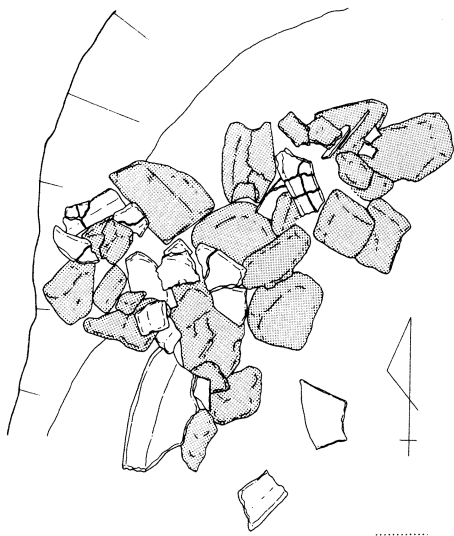
SK 26 遺物出土状況 (東より)



S K 37



SK 37 遺物出土状況 (北より)



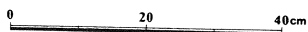
SD 71



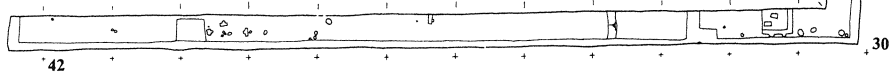
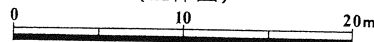
SD 71 遺物出土状況 (北東より)



(遺構図)

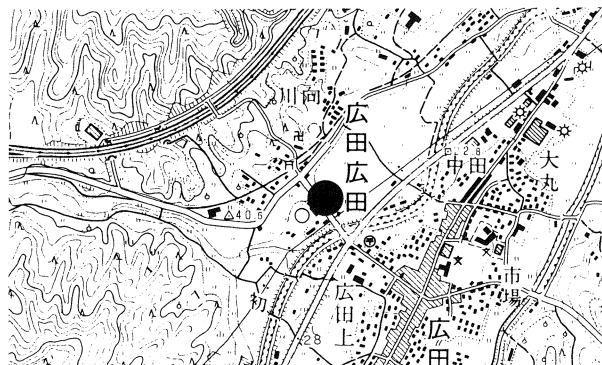


(全体図)



16 ^{みやした}宮ノ下遺跡

所在地 三原郡緑町広田広田字宮ノ下
 事業名 民間宅地建設事業
 調査主体 緑町教育委員会
 担当者 山崎裕司
 種別 確認調査
 調査期間 平成8年10月28日
 調査面積 16m² (4ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

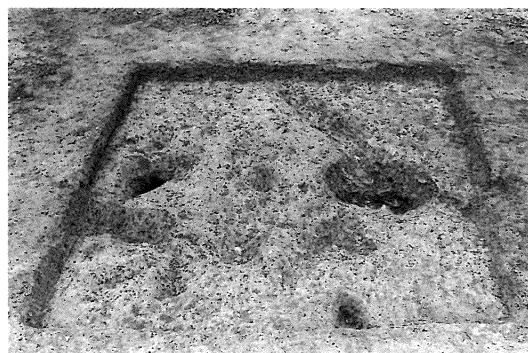
調査地は洲本川上流、初尾川左岸の小規模な平野部に立地する。北東の感応寺山山裾には、宮の脇遺跡(弥生時代後期)、成福寺原遺跡(弥生・奈良・平安時代)、成福寺原東遺跡(古墳時代・中世)など、各時代にわたる遺跡が見られる。当遺跡は遺物散布地として周知の遺跡であるが、発掘調査は今回がはじめてとなる。

調査区1・2において遺物包含層・遺構が確認できた。調査区1からは土師器・須恵器の小片が多く出土しており、丸底Ⅳ式の製塩土器も含まれる。調査区3・4では遺構・包含層は検出されていない。調査区4では厚い粘質の堆積土がみられ、北側へ傾斜する谷地形であったと考えられる。

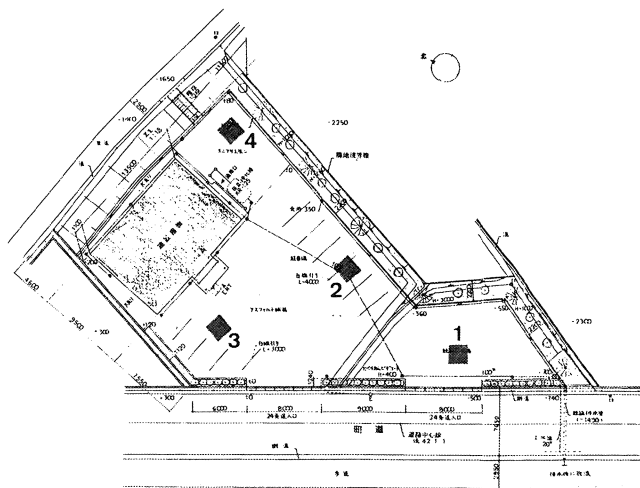
2. まとめ

台地状の地形となっている調査区1周辺から南側の緑町役場にかけて遺跡がひろがっていると推定される。奈良～平安時代前半頃の遺跡と考えられるが、周辺の遺跡分布から複合遺跡である可能性も考えられる。

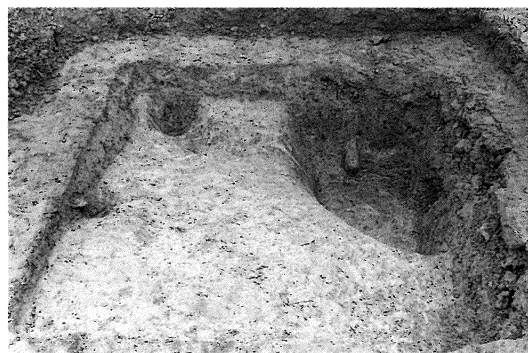
(山崎)



調査区1 完掘状況(東から)



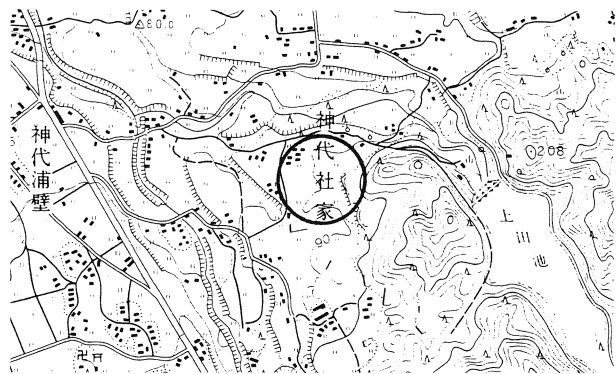
調査区位置図



調査区2 完掘状況(南から)

うえなかはら
17 上中原遺跡

所在地 三原郡三原町神代社家字上中原
事業名 農業生産体制強化総合推進対策事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 中島薫・山崎裕司
種別 確認調査
調査期間 平成8年10月28日～
平成8年11月7・22日
調査面積 107m² (24ヶ所)



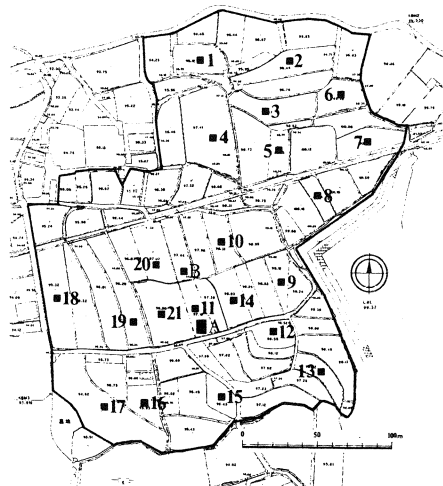
調査の位置

1. 調査の概要

農業生産体制強化総合推進対策事業に伴って、平成7年度に分布調査を行い、石鏃・サヌカイト片・土師質土器・須恵器・陶磁器を僅かに採集した。これを基に、埋蔵文化財確認調査を実施した。

本調査地は諭鶴羽山の北麓、西流する上田川が北流する諭鶴羽川と合流する間に位置し、標高95～101mを測る。

調査は、当初2×2mの調査区22ヶ所を設定していたが、微高地上の調査区No.11で遺構を確認したため2ヶ所の追加調査を行った。No.11からは、柱穴3基と土坑1基を検出し、土師質土器皿片が出土した。また、同じ田面に追加した3×5mの調査区Aからも多くの遺構を検出した。基本層序は主にⅠ～Ⅳ層で構成し、中でも遺構面の上層にあたるⅢ層が淡褐灰色粘質土(Ⅲa層)と黒褐色粘質土(Ⅲb層)の2つに細分される。調査区AではⅢa層とⅢb層の境界に位置し、Ⅲa層の下には遺構が存在することが判明した。Ⅲa層はこの2つの調査区のみ確認でき、周辺ではⅢb層が堆積されていた。



調査区配置図

2. まとめ

調査地には、分布調査であまり遺物を採集していないにもかかわらず、No.11と調査区AのⅢa層を包蔵する狭い範囲において遺跡が立地していることが今回の調査で判った。遺跡の時代は、土師質土器が僅かに出土しているだけなので詳しい年代は不明だが、恐らく中世頃と考えられる。

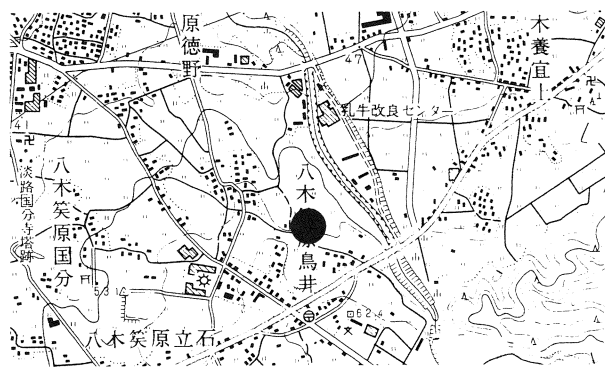


No.11 遺構完掘状況

(中島)

18 ^{うちみどうた}内御堂田遺跡 - 1次・2次調査 -

所在地 三原郡三原町八木鳥井字内御堂田
事業名 団体営土地改良総合整備事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 山崎裕司・中島薫
種別 確認調査
調査期間 平成8年11月11～19日
平成9年6月2～6日・16～20日
調査面積 228㎡ (57ヶ所)



調査の位置

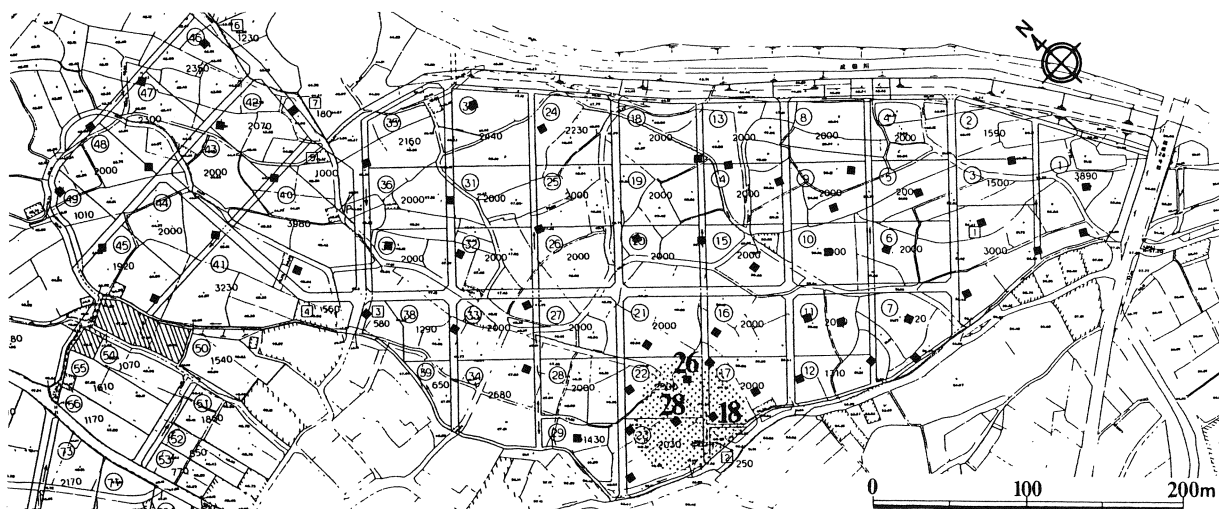
1. 調査の概要

上記事業に伴い平成7年度に分布調査を行い、その結果を受けて確認調査を行うことになった。

調査対象地は三原平野の東部、成相川と河岸段丘に挟まれた自然堤防および後背地である。南東から北西方向に流れる成相川に沿って緩やかな傾斜をもつ地形である。

調査区のほとんどは、耕土層のすぐ下が氾濫原の砂礫層となる。遺構が検出された調査区18・26・28周辺は、礫を含まない砂層が堆積しており、成相川の直接的な影響を受けにくい場所であったと推定される。

調査区18の土坑からは、律令期の煮炊具と思われる厚手の土師質土器片が出土している。調査区28からも土坑状の遺構が検出されており、調査区26では壁面で遺構を確認した。包含層からの出土遺物も少量で小片ばかりであるが、須恵器・土師器・黒色土器片が含まれる。



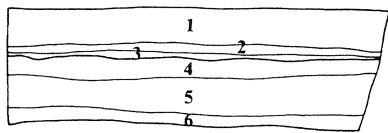
調査区位置図

2. まとめ

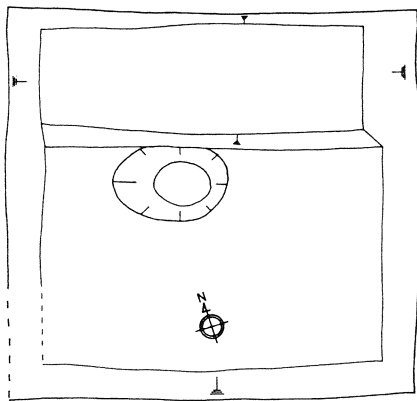
出土遺物が少なく遺跡の時期がやや不明瞭であるが、黒色土器片が含まれることから、平安時代でもおそらく中頃以降の遺跡と思われる。遺跡は調査区18・26・28を含む幅70m程の小さな範囲に収まる。ただし段丘直下に位置するので、より条件の良い段丘上に遺跡の中心がある可能性も大きい。これは三太畑遺跡・藪田道遺跡・南原遺跡など、対岸の段丘上に平安時代の遺跡がひろがっていることから類推される。

(山崎)

49.60

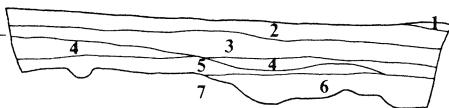


調査区 18

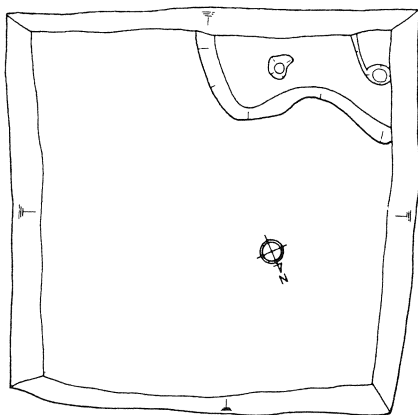


- 1 灰色粘微砂質土
- 2 淡青灰色粘微砂質土
- 3 橙色粘微砂質土 (Fe、Mn 沈着する)
- 4 黄土褐色微砂 (上面に遺構面、地山)
- 5 黄土色微砂 (地山)
- 6 灰褐色砂礫土 (地山)

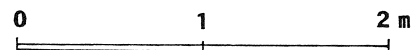
49.00



調査区 28

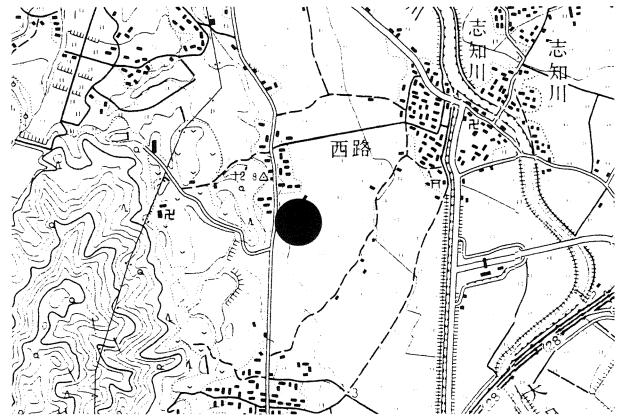


- 1 耕土
- 2 橙色粘微砂質土 (床土)
- 3 橙灰褐色微砂質土 (Fe 沈着する)
- 4 灰褐色微砂質土 (遺物含む)
- 5 淡黄灰褐色微砂質土 (遺物含む)
- 6 黄灰褐色微砂質土 (遺構埋土)
- 7 黄灰色細砂 (上面に遺構面、地山)



19 ^{かたやま}片山遺跡 - 2次調査 -

所在地 三原郡西淡町松帆西路字片山
事業名 県営圃場整備事業
調査主体 西淡町教育委員会
担当者 定松佳重・坂口弘貢・
中島薫・山崎裕司
種別 本格調査
調査期間 平成9年1月13日～
平成9年3月14日
調査面積 1,180㎡



調査の位置

1. 調査の概要

標高3.0～5.4mを測る緩斜面上に位置する。

【A地区】

標高4.9～5.4mを測る、調査地内では最も高い調査区である。

掘立柱建物5棟、柵列を検出した。SB1・3は東流するSD1が数回におよぶ急激な水流によって埋没した後に建てられている。

【B地区】

掘立柱建物3棟、溝2条確認した。うちSD6は幅約10m、深さ1m以上となり、埋没後小規模の溝が流れる。

土師器・須恵器類が完形で出土し、用途不明の金銅製品（一部金残存）も出土した。

舌状台地の下に堆積した遺物包含層より、硯模倣品と思われる須恵器製品が出土した。最大幅8.6cm、高さ3.9cm、坏身の上面を塞いだ形をした中空円面硯であるが、すった墨を溜める海がまったくなく、未使用品である。

【C地区】

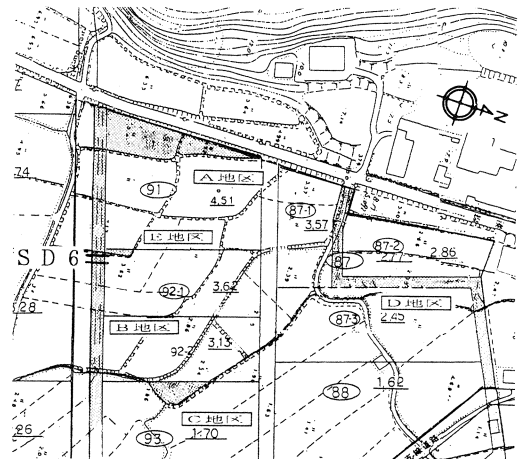
掘立柱建物1棟確認した。この地区が遺跡東端になる。

【D地区】

掘立柱建物1棟確認した。遺存状態は悪いが柱根が残存しており、丸木ではなく角材である。

【E地区】

溝1条と柱根の残る柱穴を検出した。この柱穴は溝が埋没してからのものである。

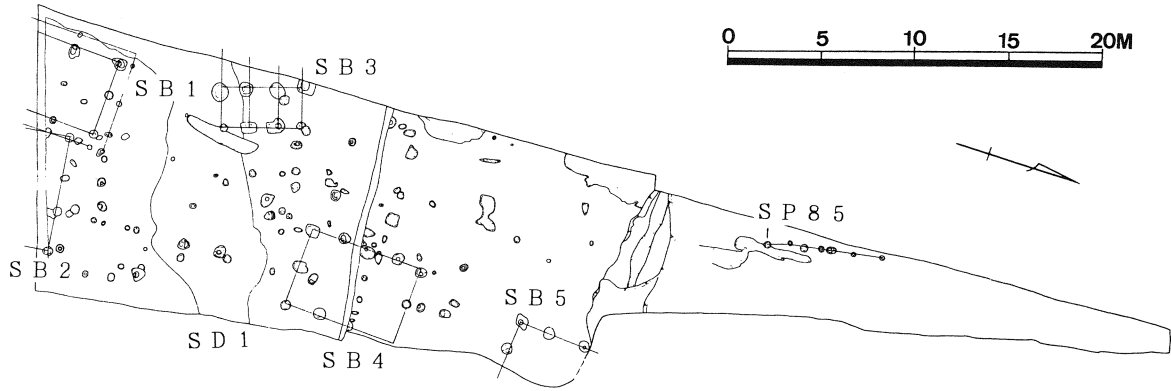


調査区設定図

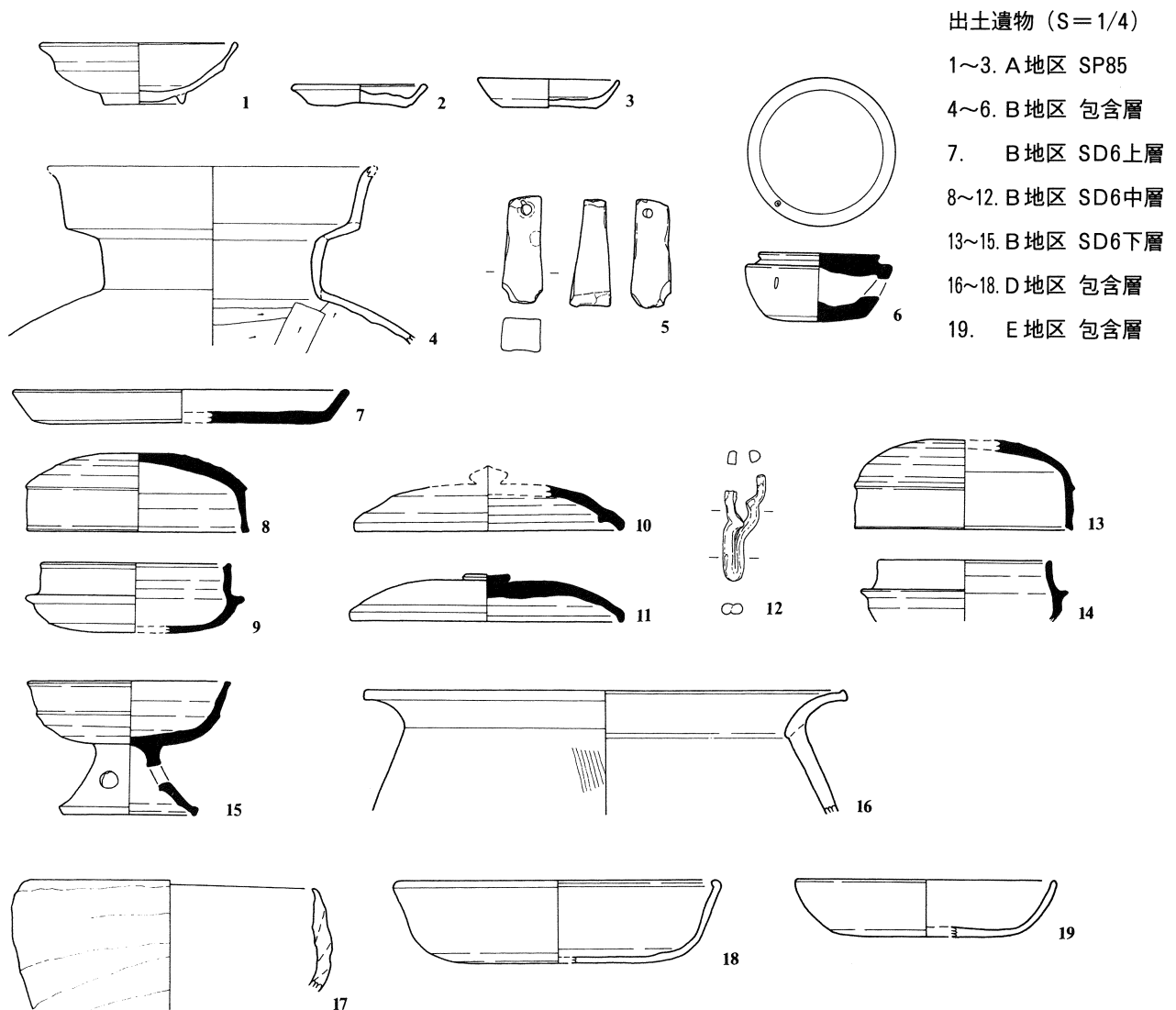
2. まとめ

本遺跡は5世紀末期・7世紀前期・7世紀後期～8世紀初期・中世の4時期に活動していたことが判明した。

5世紀末期の遺構は確認できておらず、SD 6出土遺物のみであるが、遺物出土量を考えると周辺に同時代の遺構が埋没しているのは確実である。出土遺物を観ると、約1.5km東に立地する雨流遺跡と同様の様相を呈しており両遺跡はなんらかの関連があり、三原平野における地形的立地状況や掘立柱建物の規模や出土遺物より、一般集落ではなく公的性格を帯びるものと思われる。(定松)



A地区 遺構平面図



出土遺物 (S=1/4)

1~3. A地区 SP85

4~6. B地区 包含層

7. B地区 SD6上層

8~12. B地区 SD6中層

13~15. B地区 SD6下層

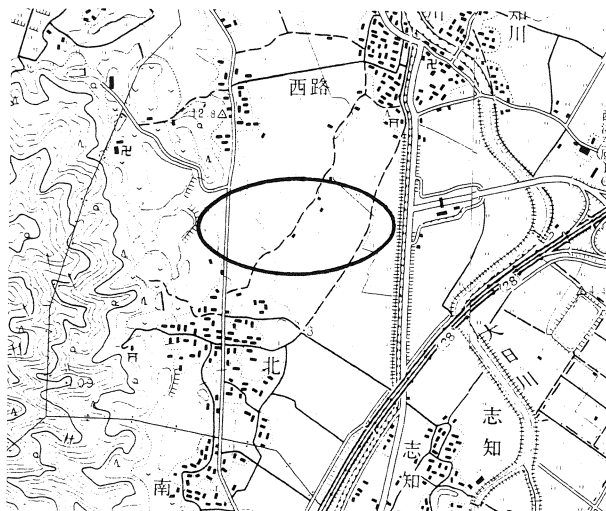
16~18. D地区 包含層

19. E地区 包含層

3) 平成9 (1997) 年度

20 ^{かたやま}片山遺跡 - 3次調査 -

所在地 三原郡西淡町松帆西路字片山外
事業名 県営圃場整備事業
調査主体 西淡町教育委員会
担当者 定松佳重・中島薫・坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成9年5月12日～
平成9年5月20日
平成9年7月23日
平成9年10月14～22日
調査面積 204m² (51ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

標高0.5～12mを測る東面する斜面であり、寒所を嫌うレタス栽培が盛んに行われている。

検出遺構は溝1条のみである。この溝は平成7年度に今回の調査対象地内で淡路未活断層発掘調査に伴って確認された溝と近く、埋土もよく似ていることから同一遺構の可能性はある。

遺物は出土数が少なく、全体的に摩耗している。遺物包含層からは7世紀後半～8世紀末期の須恵器が出土する。また、粃殻痕のある丸底Ⅲ式やⅣ式の製塩土器が確認された。

2. まとめ

平成8年度に調査を行った片山遺跡が続いていると思われていたが、幅約2mの農道で南限となるようである。地形的にはまだ南に続いていくように思われていたが、山側斜面にある西路大池と片田大池は谷筋が向かい合った形をしており、それらが合流し東下するのが片山遺跡と接する部分であるため遺跡の立地は難しかったのであろう。しかし、分布調査で遺物を多数採取していることから、2つの谷筋の影響を受けない調査対象地南側の緩斜面に遺跡が埋蔵されている可能性が高い。

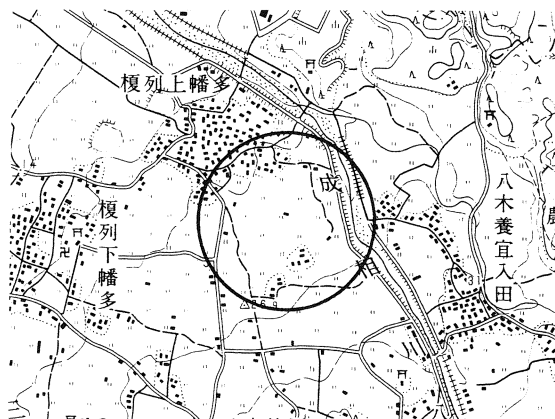
(定松)



溝検出状況

21 幡多遺跡 若宮地区 - 1次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字若宮外
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 中島薫・坂口弘貢・定松佳重・山崎裕司
 種別 確認調査
 調査期間 平成9年5月26日～平成9年6月13日・
 平成9年6月30日～平成9年7月29日・
 平成9年8月20日
 調査面積 340㎡ (85ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

幡多地区では、土地改良総合整備事業が計画・実施されるのに際し、平成7・8年度に分布調査を行った結果、広範囲で大量の弥生土器・土師質土器・須恵器・陶磁器などを採集した。地形や小字名などからも埋蔵文化財が包蔵されている可能性が非常に高いと考え、今回の確認調査に至った。

調査対象地は三原平野の北東端、北西に流れる成相川中流の左岸域に位置し、標高20～27mの緩やかな田園地帯である。

2×2mの調査区85ヶ所を調査し、基本的には遺跡が形成される安定した土壌と成相川の氾濫を受けた砂礫層に大別できる。遺構は32ヶ所の調査区で主に黒褐色粘質土上に平安時代～鎌倉時代、黄色粘質土上に弥生時代後期～古墳時代が確認できた。前者の遺構は調査地のほぼ全域に広がり、後者は緩やかな微高地上で認められた。主な遺構は、弥生時代後期～末の住居跡・溝・土坑、古墳時代の柱穴、平安時代の柱穴、鎌倉時代の柱穴・土坑などである。

遺構や遺物が顕著であった調査区をあげると、No.12では鎌倉時代の遺構がわずか4㎡の調査区で16基検出し、土師質土器・須恵器・瓦器・瓦・白磁・鉄滓など多くの遺物が出土した。遺構面である黒褐色粘質土には黒色土器や東阿波型系土器広口壺など弥生時代後期～平安時代の遺物が含まれていた。No.20・66・74では弥生時代後期～終末の竪穴住居跡を



調査区配置図

確認し、No.32・40の包含層、No.64・73の溝または土坑からは大量の弥生時代後期～終末の土器が出土し、ほぼ完形に復元できるものもある。

2. まとめ

今回の調査で、幡多地区に弥生時代後期～終末と鎌倉時代の2時期を中心とした大規模な遺跡が包蔵されていたことが判明した。中でも弥生時代の遺構や包含層からは遺物が大量に出土していることや、地方からの搬入品である東阿波型系土器がNo.12をはじめとした幾つかの調査区で出土している点は、他地域との交流を考える上でも重要な遺跡であると思われる。そして幡多遺跡の範囲は、調査対象地の南や西に更に広がっているものと考えられ、周辺の開発には注意を要する。

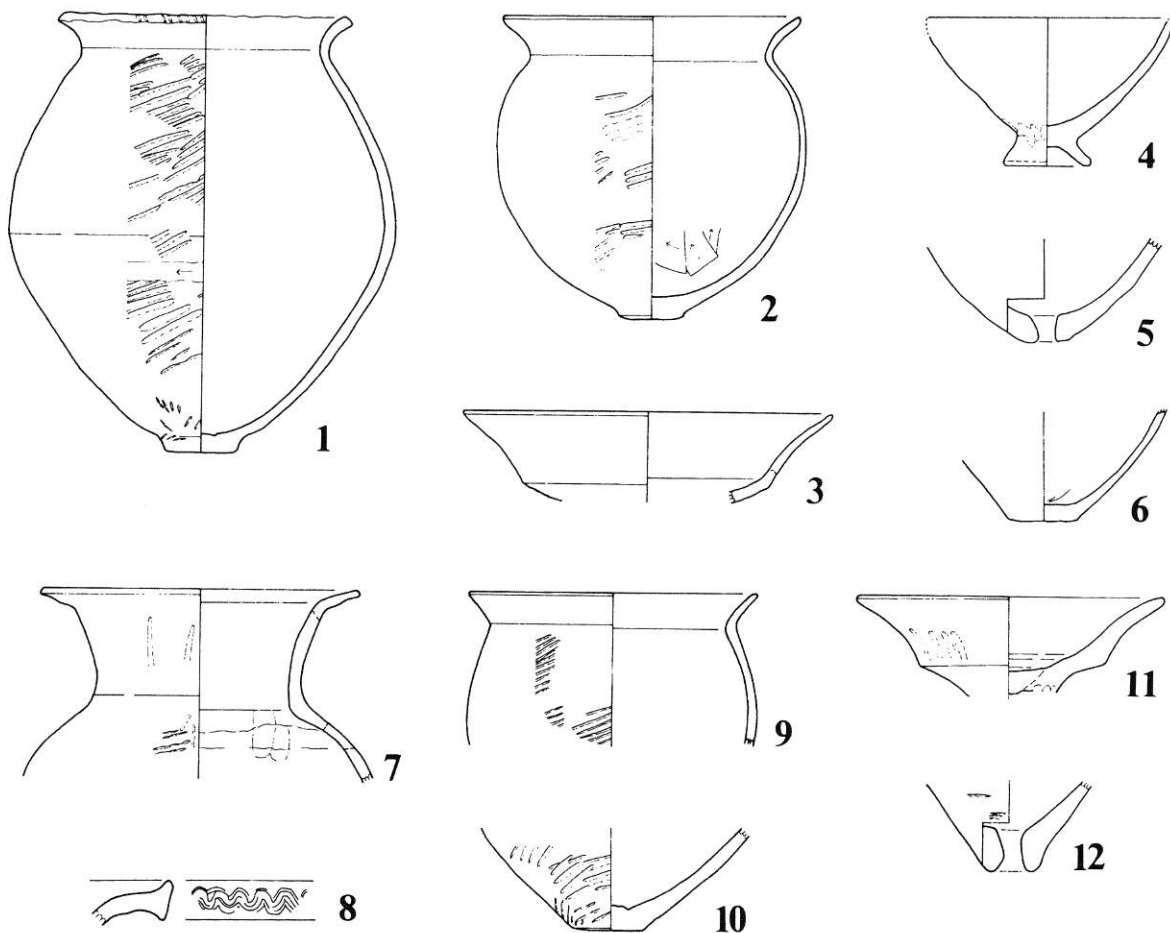


No.12 遺構完掘状況



No.74 遺構完掘状況

(中島)



出土遺物実測図

1～6 No.64 7～12 No.73

S = 1/4

22 ^{みやち}宮地遺跡

所在地 三原郡三原町八木
寺内1101-1外字宮地外

事業名 県営土地改良総合整備事業

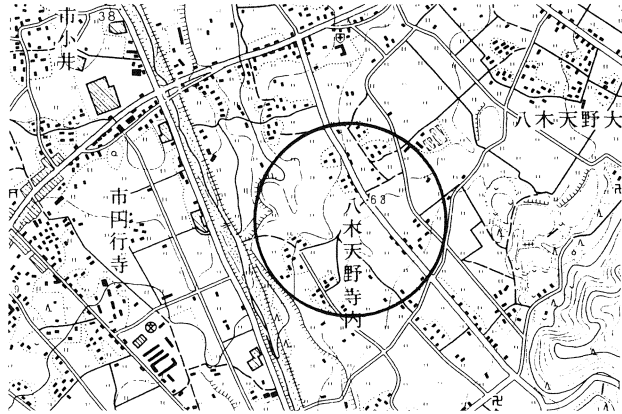
調査主体 三原町教育委員会

担当者 坂口弘貢

種別 確認調査

調査期間 平成9年6月16日～
平成9年7月16日

調査面積 220㎡ (55ヶ所)



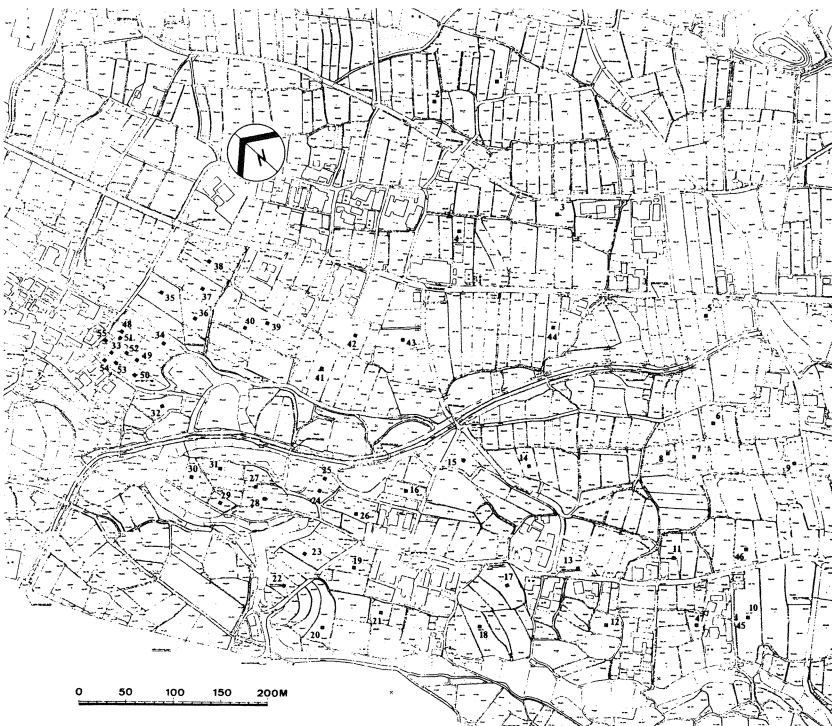
調査の位置

1. 調査内容

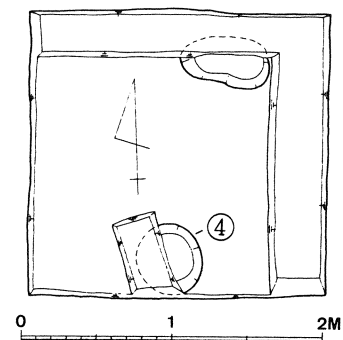
本調査は三原平野東部の八木寺内地区で計画されている上記の事業に伴い実施した。調査は2×2mの調査区44ヶ所を設定し(11ヶ追加)、重機・人力併用で進めていった。調査の結果、No.33調査区において柱穴状の遺構を確認した(④)。柱穴状の遺構は直径40cmの円形をなし、深さ36cmを測る。遺構内からは土師質の土器片が極少量出土している。

2. まとめ

本調査により、柱穴状の遺構を確認したものの、調査面積が狭小なため、正確は判別しがたいが、小規模な中世頃の集落が想定される。(坂口)



調査区設定図



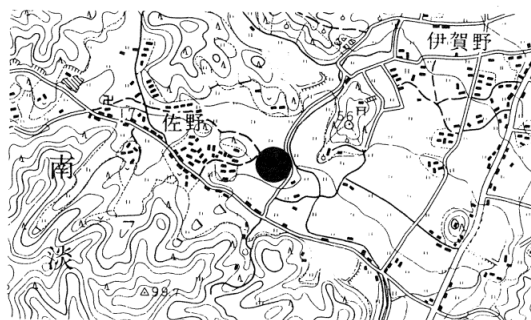
No.33 調査区平面図



No.33 完掘状況(南より)

23 ^{きたさの}北佐野遺跡 - 4次調査 -

所在地 三原郡南淡町阿万上町字南佐野
事業名 土地改良総合整備事業
調査主体 南淡町教育委員会
担当者 中島薫・定松佳重
種別 本格調査
調査期間 平成9年6月17～27日
調査面積 76m²



調査の位置

1. 調査の概要

本調査は、事業に先立って行われた1～3次の確認調査成果をもとに、遺跡範囲内で掘削の行われる排水路部分の本格調査を行ったものである。調査区は現況の田圃2筆を横切る形で、幅2m×長さ38mである。畦畔を境にして東区と西区に大別する。

東区は微高地上に位置し、包含層だけでなく遺構面まで後世の田圃の造成時に削平されているため、床土直下に地山である安定した明黄褐色粘土の遺構面が広がる。この面で遺構の切り合いがみられたため、2時期の遺構で構成されていることが判った。上部の遺構は浅い溝が2条あり、土師質の土鍋片が出土している。下部の遺構には柱穴・土坑・幅約3mの溝状の遺構があり、土師質土器・須恵器・製塩土器片などが出土した。

西区は、徐々に谷部の湿地層へと変化していく場所にあたり、遺構面も粘質の強い粘土へと変化して

いく。そのために暗渠が5条も敷設していた。遺構は1時期であり、柱穴・溝・土坑を確認した。土坑は直径1～2mの大きさをした不定形なものが4基あり、埋土の堆積などからみて粘土採掘坑である可能性が高い。東区にも同じ様な土坑を西区寄りに1基検出している。遺物は土坑から土師質土器片が出土している。



調査区全景

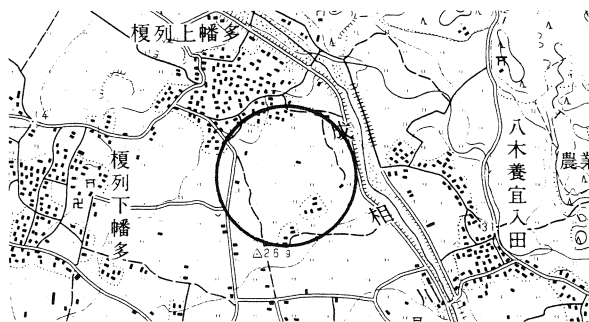
2. まとめ

今回行った調査で年代を判別できる遺物がほとんど出土していないため、明確な時代を示すのは困難である。東区においてみられた遺構の切り合いについても大幅な時期差はないと考えるが時代を押しえられなかった。確認調査では13世紀後半～14世紀頃の遺物が出土していることから、概ね同時代であると想定できる。

(中島)

24 はた 幡多遺跡 わかみや 若宮地区 - 2次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字若宮外
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 中島薫・坂口弘貢・定松佳重・山崎裕司
 種別 本格調査
 調査期間 平成9年8月25日～平成10年5月6日
 調査面積 約3,400㎡



調査の位置

1. 調査の概要

土地改良総合整備事業実施に際して、埋蔵文化財確認調査を行った結果、広範囲にわたって弥生時代後期～鎌倉時代の遺構が確認された。この調査結果から判った遺跡範囲内で、圃場面や排水路・道路のパイプ管設置などによって遺跡に影響が及ぶ場所のみ本格調査を行うこととなった。調査区はA～U地区に大別している。その中でF・H・J・N・O・S地区において主な遺構を検出した。

【F地区】

F地区からは表土直下に、廃棄されたと思われる弥生時代終末の土器が大量に出土した。この土器溜まりの中には石錘の他、阿波や讃岐地方から運ばれてきた土器が数点含まれる。

【H地区】

H地区は後世の削平を受けているため、表土直下に中世の遺構と弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡 (SH02) が広がる。そしてその下層の弥生時代終末期～後期後半の間で4面遺構面があり、結果6時期を数える。SH02は中央に浅い土坑をもつ歪んだ方形プランで、推定規模は短辺3.7m×長辺4.7m、支柱穴は4～5本である。2面目の弥生時代終末期の溝 (SD00) は幅1.0～1.6m、深さ40cmの南北に走る溝で、中には礫に混じって大量の土器が廃棄されていた。5面目には弥生時代後期後半の一辺約10m



調査区配置図



H地区 SD00 遺物出土状況

を測る竪穴住居跡と思われる遺構を確認した。

【J地区】

この地区は微高地の頂部にあたるため、後世の削平が遺構面まで到達し、耕作土直下に確認できた遺構もかなり削平を受けている。遺構は直径60~70cm大の柱穴が1間3.8m~4.0m間隔で1×2間以上の規模で並ぶ大型建物（SB01）である。周辺の柱穴もSB01に平行していることから同時期に隣接して存在した可能性がある。遺物は少ないが、12~13世紀の瓦器や土師質土器が出土している。

【N地区】

N地区では2面調査を行い、4時期の生活面を確認した。中世の建物跡は同一面で検出し、遺構埋土や遺物から13世紀後半頃の建物跡（SB03・04）と14世紀頃の建物跡（SB01・02）があり、建て替えが行われたものと思われる。SB01は2×3間、SB02は2×3間の南部に庇が付く建物である。またSB03は1×2間以上、SB04は2×3間の建物である。東端からも1×2間の庇付建物（SB05）を検出したが詳細な年代は不明である。

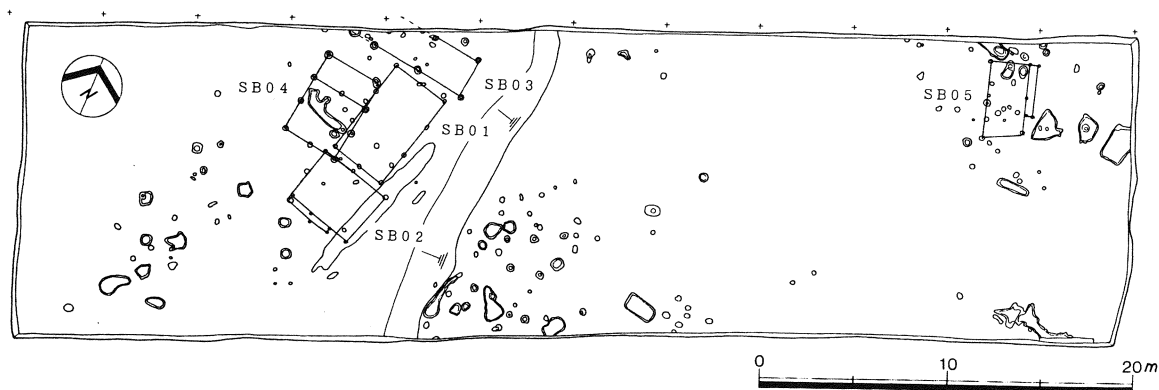
第2遺構面では7世紀初頭の井戸と溝を検出した。井戸は上部が2.7mの方形、下部が直径1.3~1.5mの楕円形を呈する二段掘りになっており、一度埋没したが人為的に掘り直しを行っていることが断面観察から確認できた。遺物は須恵器（坏蓋・甕・高坏・隼）・土師器（甕・長胴甕・椀）が出土し、7世紀初頭頃である。土師器の中には韓式土器を模倣して作られたと思われる甕や内面に須恵器製作の成形技法に用いられる同心円文を施している甕も見られた。またこの面では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡周溝が井戸を囲む形で検出した。6×7mの方形プランである。

【O地区】

ここでは、遺構面が4枚存在するが、時代が明確にわかるのは第2遺構面のみである。この面では、幅7m・深さ1.2mの南北に流れる大溝が確認され、上・中層から弥生時代後期後半の壺・甕・高坏・鉢などが廃棄された状態で大量に出土した。下層からは遺物は出土しなかった。

【S地区】

S地区は道路のパイプ管設置による調査であったため幅80cm×長さ112mという限られた調査範囲であったが、まとまった遺構が第2・第5遺構面でみられた。第2遺構面は、調査区のほぼ全域で黒褐色系粘質土をベースにして柱穴や溝・土坑を検出した。黒色土器などから10世紀頃と思われる。第5遺構面もほぼ全域に遺構の広がりを見せ、柱穴と多くの溝が横切る形でみられた。SD79からはほぼ完形に復元できる弥生時代後期初頭の広口壺・高坏・把手付甕が廃棄された状態で出土した。



N地区 第1遺構面平面図

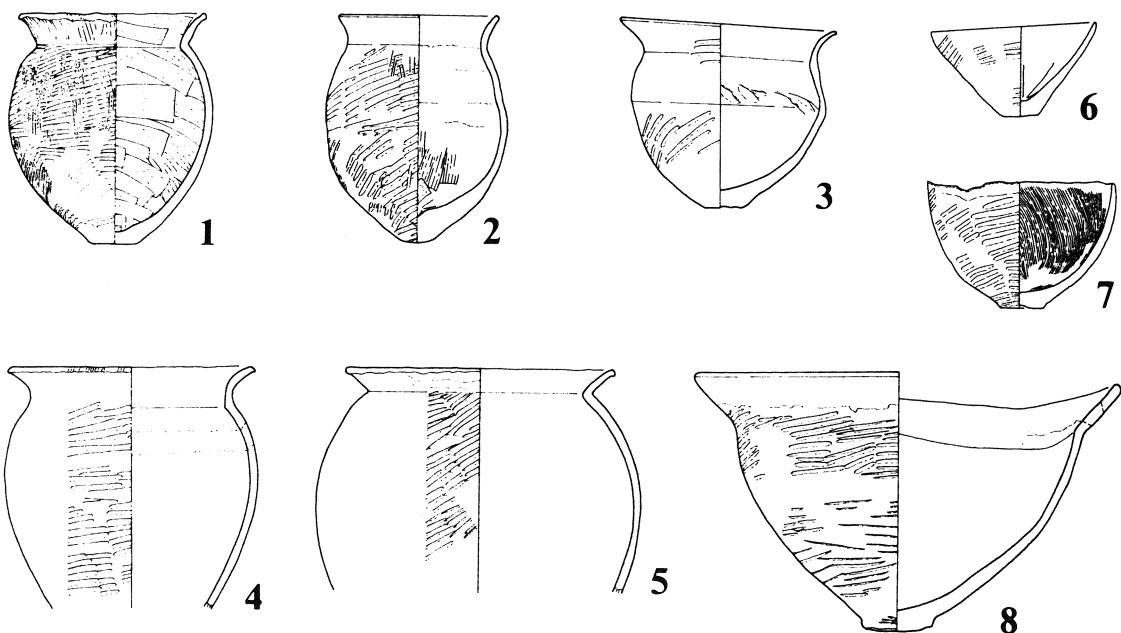
【その他の地区】

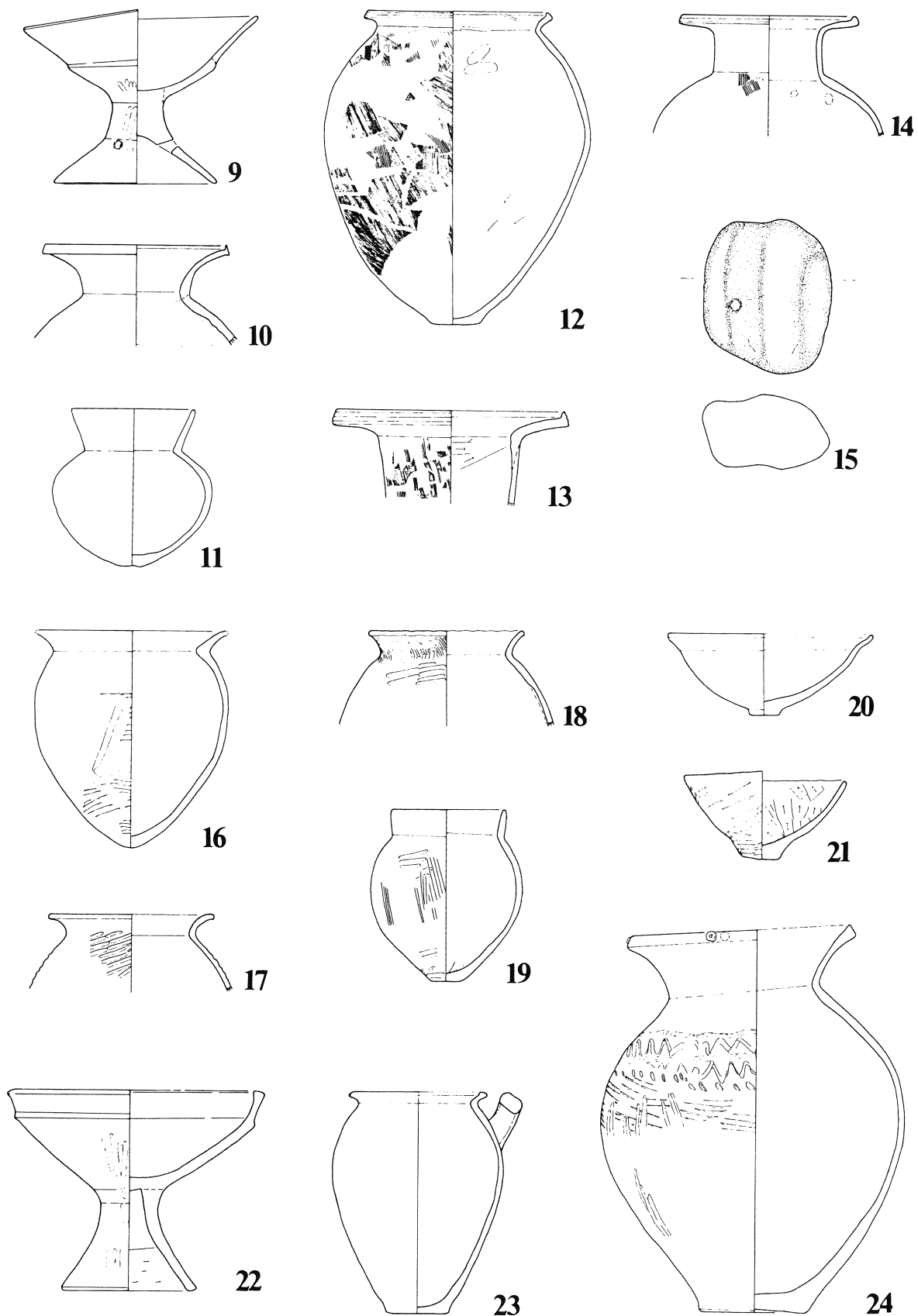
A地区では近世の溝とそれ以前の柱穴、B地区は中世の遺構面が2面あり、柱穴・土坑・溝を確認した。C地区では南部で13世紀頃の鎬蓮弁文青磁碗を含む土坑や柱穴が、北部では11～12世紀の遺物を含む柱穴や土坑がみられた。D地区は遺構からの遺物が少ないが、C地区北部に続く調査区なので11～12世紀と思われる。E地区では13世紀頃の瓦器などを含んだ柱穴や土坑を確認した。G地区では、中世の遺物を含む柱穴や近世の溝がみられた。I地区は遺構面が4面あるが、12～13世紀の面以外は遺物が少ないため不明である。K地区は13～14世紀の柱穴や土坑、L地区では2面の遺構面を確認したが、ほとんど時期差がなく12世紀代である。ここでは土師質土器皿を集積した地鎮遺構や鞠の羽口が出土した。P地区は弥生時代後期と古墳時代の遺構面を検出した。R地区では3時期の遺構面の存在を確認したが、平面で検出できたのは弥生時代後期初頭頃の遺構面だけである。M・Q・T・U地区では、包含層のみの確認や後世に削平が行われたため遺構は確認できなかった。

2. まとめ

幡多遺跡若宮地区は、確認調査で考えられていた弥生時代後期～鎌倉時代の遺跡ではなく弥生時代後期初頭～室町時代にかけての複合集落遺跡であることが判った。また流れ込みとみられる縄文土器が出土していることから周辺に縄文時代の遺跡が存在している可能性がある。本遺跡では弥生時代後期～終末頃には南の方の微高地上に居住していたが、古墳時代に入ると少し北へ移動したと思われる。平安～室町時代には遺跡全域に居住していたと考えられる。この地区には、殿ノ内・殿ノ門・庵ノ土井・城家院など中世居館を示す小字が多く残っている。中でも城家院は、郷土誌『味地草』に記されている細川氏の家臣である安田氏の居館であった浄均土居が変化したものと推測される。この城家院はちょうどN地区にあたるが、SB01～04は時代が古くこれに該当しなかった。今後、周辺の調査が行われたときに史実を立証できる遺物や遺構の確認を期待する。

(中島)





出土遺物実測図

1～15 F地区 土器溜まり (12～14は東阿波型系土器)

16～21 H地区 SD00 22～24 S地区 SD79

S = 1/5

25 ^{くすだに}楠谷遺跡

所在地 三原郡南淡町賀集
野田705-1外字楠谷外

事業名 町道賀集野田牛内線道路改良事業

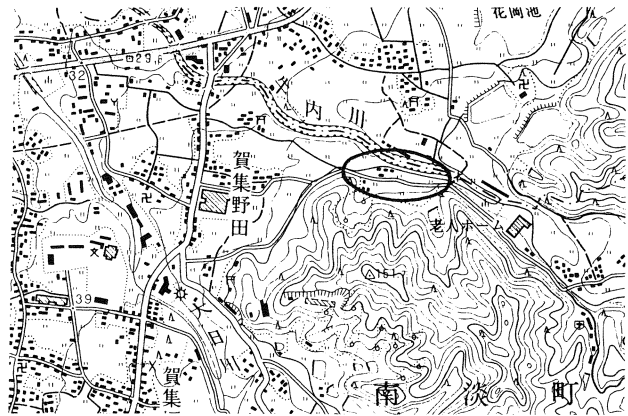
調査主体 南淡町教育委員会

担当者 坂口弘貢・山崎裕司

種別 確認調査・測量調査

調査期間 平成9年10月22日～
平成9年11月4日

調査面積 42m² (11ヶ所)



調査の位置

1. 調査内容

本調査は三原平野南部の賀集野田で計画されている上記の事業に伴い実施した。

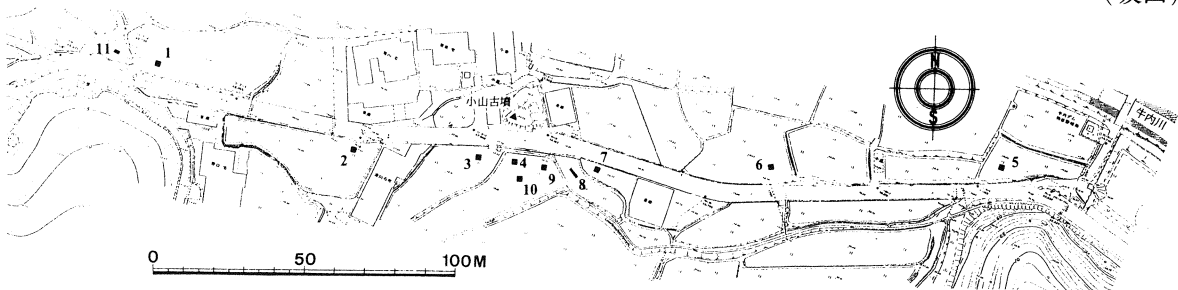
調査は道路拡幅部分に追加も含めて2×2mの調査区を基本に11ヶ所設定し重機・人力併用で行った。調査の結果、明確な歴史的遺構は確認できなかったが、No.4調査区の礫混黄土色粘質土（5層）から有舌尖頭器が出土した。有舌尖頭器はサヌカイト製で長さ8.2cm、幅2.4cm、重さ15gを測る。

さらに地権者の許しを得て、調査地に隣接する小山古墳の石室の実測図作成と写真撮影を行った。測量調査により、古墳は西方向に開口する右片袖式の横穴式石室墳と推定され、内法で幅1.55m、長さ2.85mの規模を測ることが分かった。

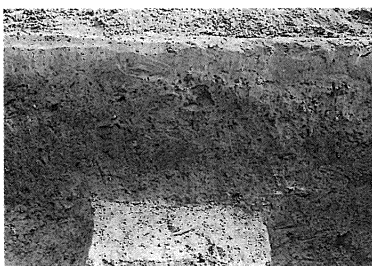
2. まとめ

本調査により、これまで三原郡内の発掘調査で弥生時代以降の遺構を確認してきたベースと考えられる土層から有舌尖頭器が出土したことは、三原郡内の遺跡立地を再考させる貴重な資料といえよう。

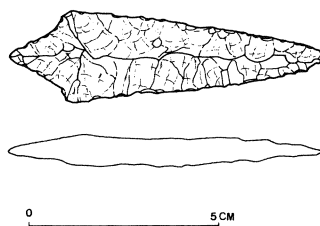
(坂口)



調査区設定図



No.4調査区有舌尖頭器出土状況(西より)



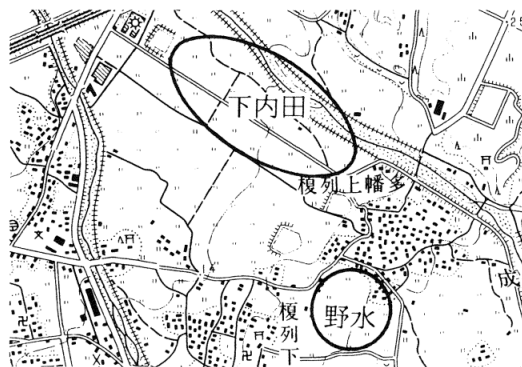
No.4調査区出土有舌尖頭器



小山古墳全景(東より)

26 幡多遺跡 下内田・野水地区 — 1次調査—

所在地 三原郡三原町複列上幡多字下内田・野水
事業名 県営土地改良総合整備事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 定松佳重・坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成9年10月27日～
平成9年11月10日
調査面積 192㎡（48ヶ所）



調査の位置

1. 調査の概要

本調査対象地は淡路島内最大の平野である三原平野北東辺に位置し、北流する成相川と三原川にはさまれた緩斜面に野水地区が、成相川左岸に下内田地区が立地する。

周辺の歴史的環境は、北部に条里型地割に基づいた水田区画が現在も踏襲されている。また、西には『続日本紀』にある南海道の駅家の1つである“みわもと神本じんほんじ駅”と推定される神本寺が鎮座する。

野水地区は今回は排水路部分のみの調査である。町道を挟んだ東側には弥生時代後期～中世の集落跡（幡多遺跡若宮地区）が確認されている。

耕作土直下が三原平野特有の礫層の調査区と遺構面や遺物包含層（黒褐色土）のある調査区が複雑に入り交じっている。遺構は溝・土坑・柱穴を確認した。

下内田地区は条里型地割が明瞭に残っており、方向は北より30～40° 東に振れる。この方向の条里型地割は三原平野内では中世の地割りと考えられている。

成相川がすぐ東を流れているため、調査区のほとんどが氾濫原もしくはその影響を受けた土壌堆積であったが一部で柱穴を確認した。

2. まとめ

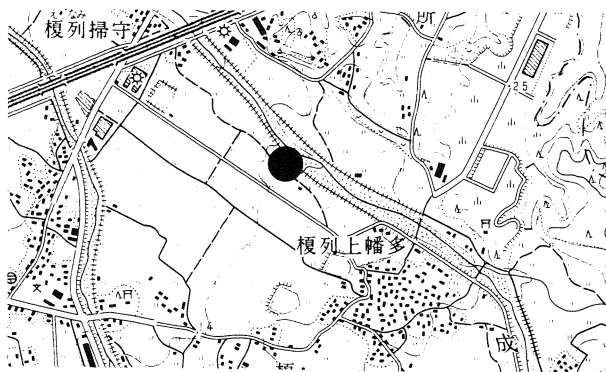
野水地区ではほぼ全域に遺跡が埋蔵されていることが判った。弥生時代後期～中世の集落跡である若宮地区の続きと思われる。

下内田地区は成相川氾濫原とその後背湿地であるが、遺構を検出した黄色系粘土は中州状の微高地となっている。また、集落周辺調査区から土師器（平安時代中期頃）や高坏（布留式土器）の出土から、現在人家の密集地帯には古墳時代～平安時代の遺跡が埋蔵されている可能性がある。

（定松）

27 幡多遺跡 下内田地区 - 2次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字下内田
事業名 特定環境保全公共下水道
(八木榎列処理区)処理施設建設事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 定松佳重・坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成9年11月11日
調査面積 20m²(5ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

本調査対象地は三原平野北東部を北流する成相川左岸に立地する。

ほとんどが成相川の氾濫原もしくは影響を受けた土壤堆積であったが、1ヶ所で柱穴を確認した。弥生時代中期の土器が出土した。

2. まとめ

調査区のほとんどが成相川の氾濫原であるが、一部に埋没微高地があった。これは圃場整備事業に伴い南西に隣接する田で実施した遺跡範囲確認調査で確認した埋没微高地の続きである。遺物は弥生土器IV様式が出土し、圃場整備事業に伴う確認調査結果と一致する。

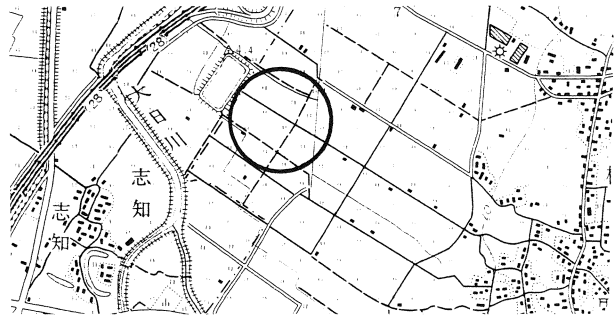
(定松)



柱穴検出状況

28 志知川沖田南遺跡

所在地 三原郡三原町榎列小榎列字床ノ子外
事業名 小榎列農道3路線改良事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 定松佳重・坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成9年12月9日
調査面積 36㎡（9ヶ所）



調査の位置

1. 調査の概要

淡路島内最大の平野である三原平野北西に位置し、北流する大日川右岸に立地する。

周辺の歴史的環境は、中世の条里型地割（N30° E方向）に基づいた水田区画が現在も踏襲されており、本調査地もこの地割内に位置する。また、北には雨流遺跡（弥生時代前期～江戸時代）や志知川沖田南遺跡（弥生時代後期～古墳時代前期）等の水田遺跡が立地する。

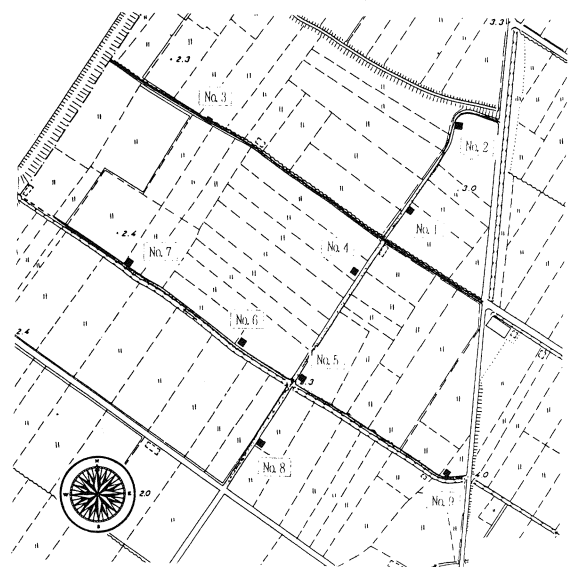
ほとんどが大日川の氾濫原であり、遺構の立地する土壤ではない。No. 2では下層の濃灰色粘土が急に落ち込んでいるのを確認した。落差約30cmで上部は幅30cm以上平坦である。これは北に立地する志知川沖田南遺跡でも確認されている大畦畔の続きと思われる。

2. まとめ

本調査対象地内は生活遺構はなく、水田と思われる土壤を確認した。黒灰色系シルト～細砂の水田面で氾濫堆積物の黄色系細砂に覆われているのは志知川沖田南遺跡と同様であることから、志知川沖田南遺跡は本調査地まで続いていると思われる。また、志知川沖田南遺跡の大畦畔は東西方向を検出しているが、本調査では南北方向であり、これは現在の地割りに踏襲されている。

現在、調査対象地周辺は人家がなく、後背湿地であったと微地形分類されている（高橋学 1987）ことから、生産域である水田がどこまで広がるか今後周辺の開発には注意を要する。

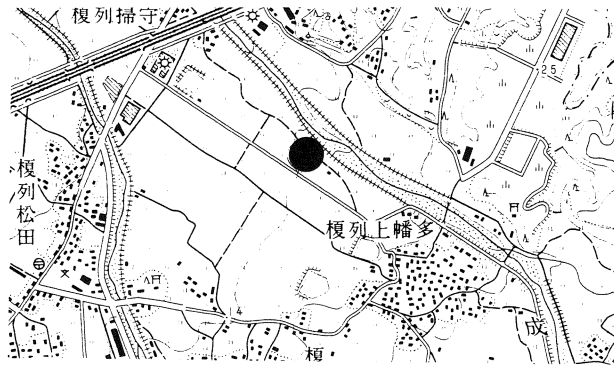
（定松）



調査区設定図（S=1/5,000）

29 ^{はた}幡多遺跡 ^{しもうちだ}下内田地区 - 3次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字下内田
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 定松佳重・坂口弘貢・山崎裕司
 種別 本格調査
 調査期間 平成10年1月12日～
 平成10年3月13日
 調査面積 656m²



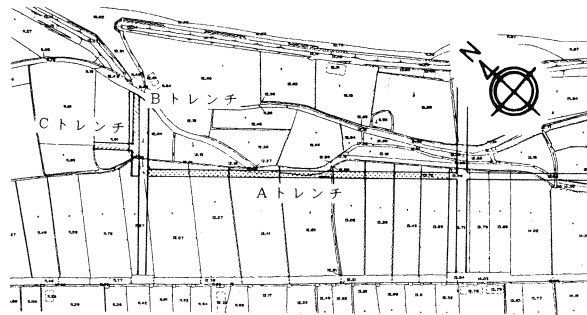
調査の位置

1. 調査の概要

本調査対象地は淡路島内最大の平野である三原平野北東辺に位置し、北流する成相川左岸に立地する。

周辺の歴史的環境は、北部に条里型地割に基づいた水田区画が現在も踏襲されている。

遺跡範囲確認調査を行った結果、事業予定地内に遺跡が埋蔵されていることが判明した。調査成果をもとに関係組織と協議を行い、盛土と設計変更による地下保存することとなったが、工法的に地下保存が不可能な水路部分のみ記録保存することとなった。



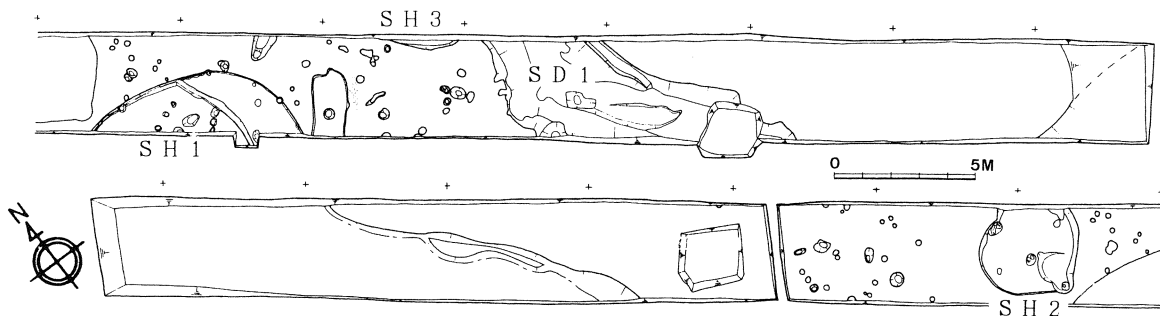
調査区設定図 (S=1/4,000)

【Aトレンチ】

南端部は成相川洪水による砂礫層が基本であるが、その砂礫層の上層に黒灰色系シルトが堆積し、布留式前半の土器を多く含む。それらは形態が容易に判るほど大きな破片であったり完形にちかく、川によって運ばれたのではなく、沼地状になったところに廃棄されたものと思われる。遺物は小型丸底壺が完形・破片を含め50点、高坏も多く観られ、生活雑器は見あたらない。

幅4m、深さ約0.7mのSD1からは管玉1点が出土し、この溝より北に遺構は展開する。

竪穴住居が3棟確認できた。SH1からは完形のIV様式の直口壺が横倒し状態で出土した。SH2より北は小土坑群があり、微高地は終わる。北端部は後背湿地で、黒色シルトにIV様式の土器や板状、赤



Aトレンチ 遺構平面図

色顔料が塗られた櫛の歯状のものなど木製品や植物遺体を多く含む。

【Bトレンチ】

わずかであるが微高地の続きを確認した。しかし、これらの微高地は洪水砂礫に覆われており、成相川の影響を強く受けていたようである。

【Cトレンチ】

Bトレンチと直交する水路である。ここもBトレンチと同じ状況で、わずかな微高地が洪水砂礫に覆われている。

2. まとめ

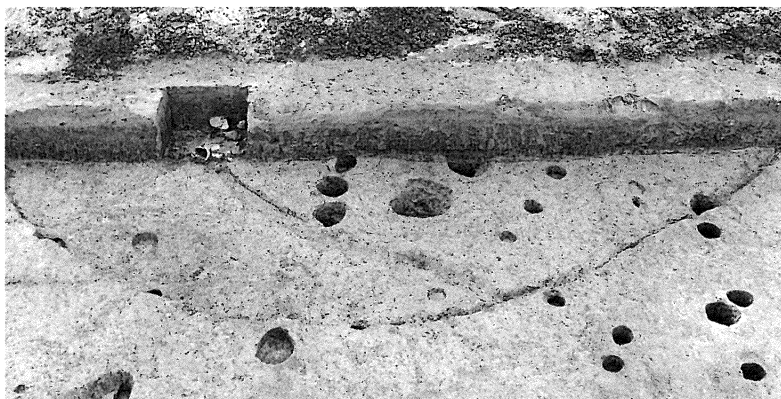
本調査地は成相川氾濫原とその後背湿地、埋没微高地であることが判った。

調査地南端部には古墳時代初頭、中央の微高地から北端部にかけては弥生時代中期の遺物・遺構が埋没していた。

竪穴住居は本調査で3棟、すぐ東隣の下水道処理場建設事業に伴う遺跡範囲確認調査で1棟確認しているため、少なくとも4棟は存在する。微高地の範囲は小さいため、規模の小さな集落であろう。

国分寺や養宜館を代表とする奈良時代～中世の遺跡は三原町内でも多々確認されているが、弥生～古墳時代の遺跡、特に三原平野を形成する重要河川の1つである成相川と遺跡の立地関係はほとんど不明であったことから、今回の発見は遺跡立地状況を知る上で重要な資料となった。

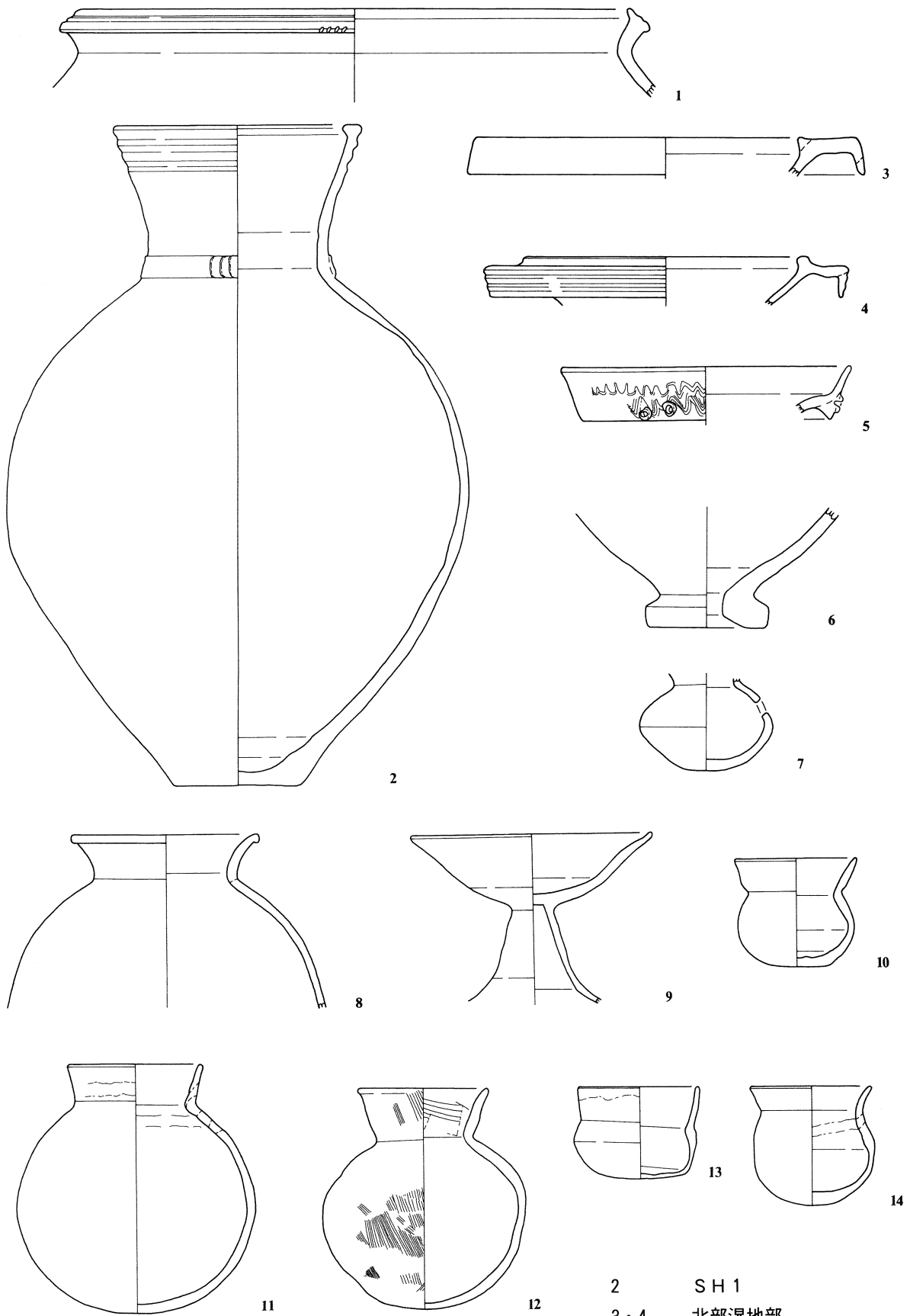
また、三原平野を形成する三原川・成相川周辺にはまだ未確認の埋没微高地が多く存在すると思われる、今後周辺の開発には十分な注意を要する。 (定松)



SH1 (北東より)



土器溜出土状況 (北東より)



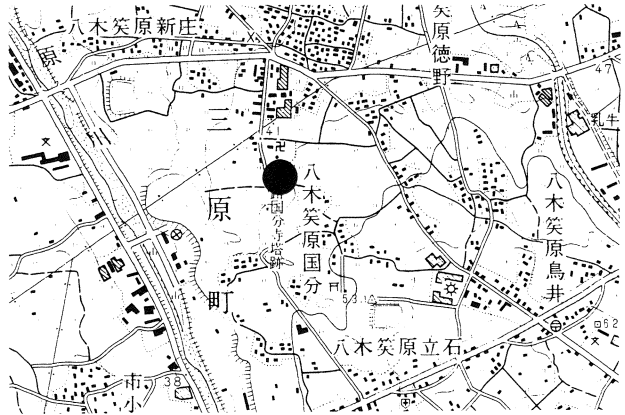
2 SH 1
 3·4 北部湿地部
 1·5~14 土器溜

出土遺物 (S=1/4)

4) 平成10(1998)年度

30 ^{あわじこくぶんじあと}淡路国分寺跡 -11次調査-

所在地 三原郡三原町八木国分321-4 字屋敷
 事業名 町道八木73号線道路改良
 (排水路設置) 事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 坂口弘貢
 種別 本格調査
 調査期間 平成10年5月20日～
 平成10年6月3日
 調査面積 27m²

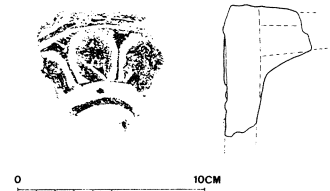


調査の位置

1. 調査内容

本調査は、三原平野中央部の三原町八木国分で計画されている上記の事業に伴い行った。調査によって、ベース上面の断面形が台形や蒲鉾状に変化するのを確認したが、いずれもその上には、近世～現代の遺物が混ざることから、創建当初のものとは考えにくい。

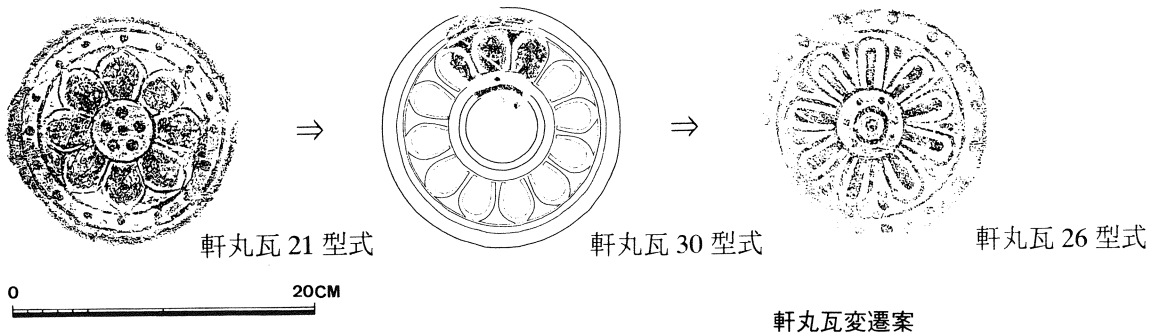
出土遺物は、コンテナにして22箱あり、古代に位置付けできる平・丸瓦が大半を占める。出土遺物の中で特に注目されるものに軒丸瓦1点がある(軒丸瓦30型式)。軒丸瓦は平安時代中期頃の瓦当部を中心とする資料である。瓦当全体から見た残存率は約1/5。花卉は復元すれば、12弁の単弁で、周囲がわずかに窪む。花卉同士はお互いに接して凸線によって区画され、中房は一段低くなることによって、花卉と区別し、さらに内部を凸線によって、内外を区画し、蓮子を配置する。瓦当面の復元直径は約16cm、厚さ1.9cmを測り、瓦当面の凹凸は非常に少ない。色調は灰色で須恵質をなし、胎土に直径5mm以下の礫の混入が目立つ。



出土軒丸瓦(30型式)

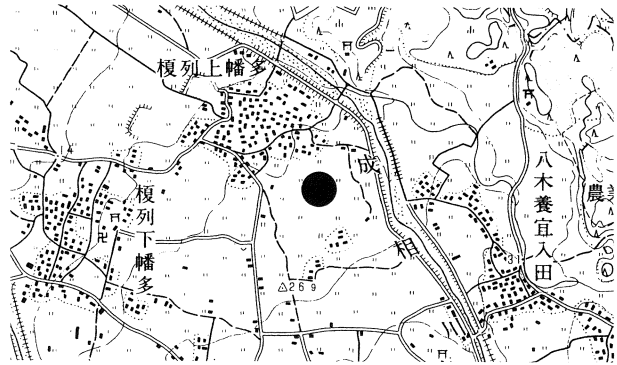
2. まとめ

本調査により、中門をはじめとする創建期の歴史的遺構は確認できなかったが、古代に位置付けできる瓦が多量に出土したことは、周辺に瓦葺きの建物が存在するものと想定される。(坂口)



31 ^{はた}幡多遺跡 ^{わかみや}若宮地区 - 3次調査-

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字若宮外
 事業名 町道入田おのころ線道路改良事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 山崎裕司・坂口弘貢
 種別 本格調査
 調査期間 平成10年5月30日～
 平成10年12月20日
 調査面積 1,170m²



調査の位置

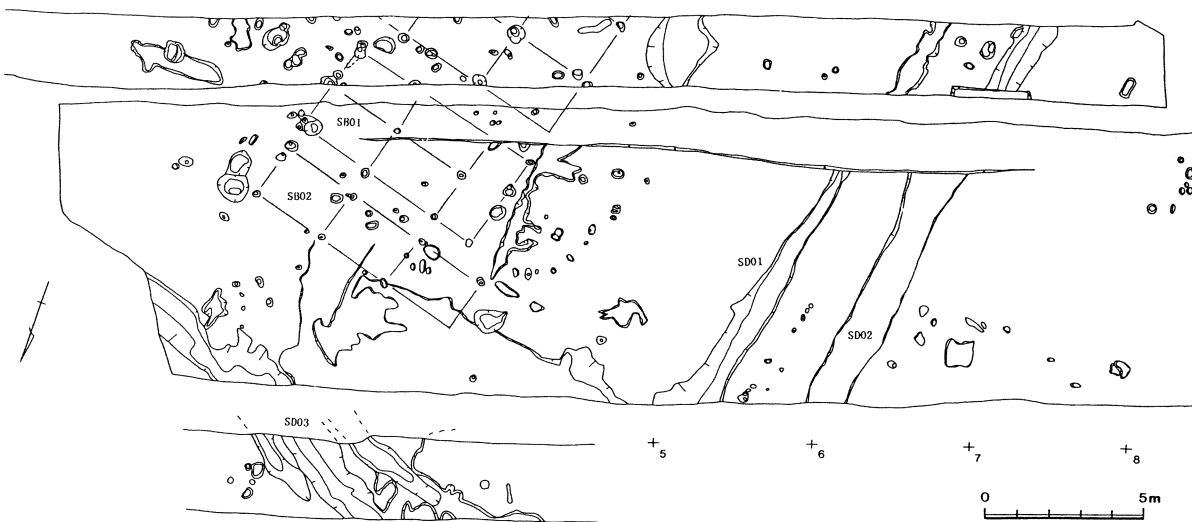
1. 調査の概要

調査地は三原平野の北東部、成相川左岸の段丘化した扇状地上に立地する。すでに県営土地改良総合整備事業に伴い、平成7年度に分布調査、平成9～10年度に確認・本格調査が行われており、その事業範囲内の町道部分について今回調査を行うことになった。

調査区は東区と西区に分かれる。調査の結果、縄文時代後期、弥生時代後期後半から古墳時代初頭、中世の遺構が検出された。

【西区】

第1遺構面は近世、第2遺構面は中世の遺構面である。SD01～03で方形に区画された敷地内に、3棟の掘立柱建物が検出された。SD01と02は2m程の間隔をあけて平行し、間部分は道路であったことも考えられる。建物群は柱筋をあわせて建てられており、同時期に存在したと思われる。建物群の南北方向の柱筋は約N15°E、SD01・02は約N10°Eと、若干方向の違いを見せる。良好な出土遺物に恵まれず遺構の時期は明らかでないが、SB02東側の土坑から高台の退化した瓦器碗片が出土しており、13世紀後半以降と思われる。

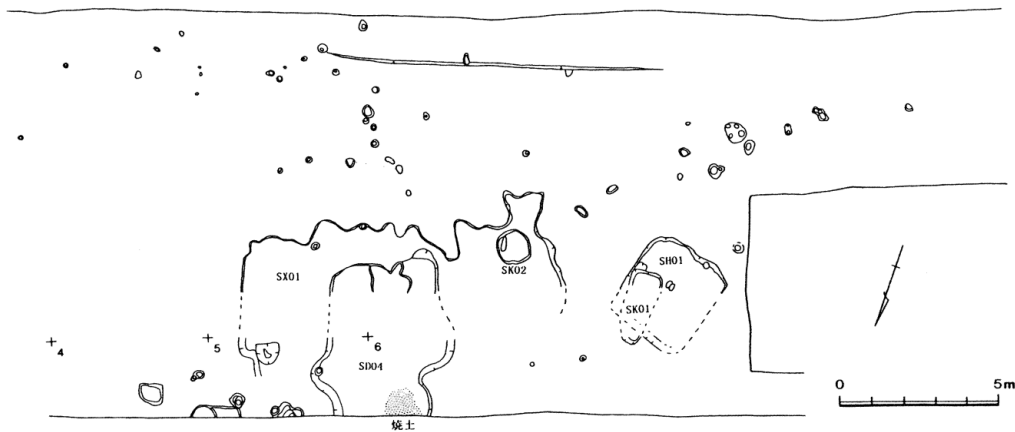


西区 第2遺構面 平面図

第3遺構面は弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構面であるが、S K02のみ縄文時代の遺構である。S K02は植物遺体層などは確認できなかったが、底がひろがる形態から貯蔵穴と思われる。台石および縄文に沈線を施した土器片が出土しており、中期末～後期前葉に収まるであろう。S H01は約3.2×2.7mの隅丸方形の堅穴住居跡で、庄内式併行期頃の土器が数点出土した。S X01はS D04の周囲を平坦に削ってつくられたようで、庄内式併行期の土器が多量に出土している。焼土部分が見られ、S H01に比べ土器が集中していることから、住居に付随する作業的な場所であったことも考えられる。



S K02 完掘状況 (南より)



西区 第3遺構面 平面図

【東区】

第1遺構面は近世および中世の遺構面である。調査区東側からは、建て替えの行われた2×2間の掘立柱建物2棟と、1×2ないし3間の掘立柱建物1棟が検出されている。柱穴から瓦器碗片が出土しており、13～14世紀頃の遺構と思われる。第2遺構面からは平安時代と思われる柱穴状の遺構がいくつか検出された。

第3遺構面は弥生時代終末期～古墳時代初頭、第4遺構面は弥生時代後期後半頃の遺構面と思われる。第3遺構面からは3棟の方形の堅穴住居跡が検出された。S H03、S H04、S D06は、埋土が黒色の同色同質の土であるため切り合いが確認できず、遺物も一部混在して取り上げざるを得なかった。S H03は幅約5.6mの堅穴住居跡で、4本の柱穴、中央と南東壁際の土坑を内部施設とする。中央の土坑は浅く掘り窪めてあり、火を受けた痕跡から炉跡と考えられる。この南西側に床面に据え置いたと思われる台石が出土している。南東壁際の土坑は一部を柱穴状に深く掘り窪め、東方向に浅い溝が伸びる。S H03からは庄内式の新しい段階から布留式前後頃の土器が多く出土し、その中には脚台付Ⅲ式の製塩土器が含まれる。またウメ等の核の炭化物が数個体出土している。S H04は南北幅約4.8mの隅丸方形の堅



S H03・04 完掘状況 (西より)

穴住居跡と思われる。内部は浅い窪みが見られるだけで、明確な柱穴・土坑等は確認できなかった。S H03と比べてS H04は出土遺物が少ない。この東側のS X02からは、庄内式併行期の土器が多く出土している。数カ所の焼土部分が見られ、火を受けて割れた台石等も出土しているため、西区のS X01と同様、作業場的な遺構と思われる。



東区 第3遺構面 平面図

2. まとめ

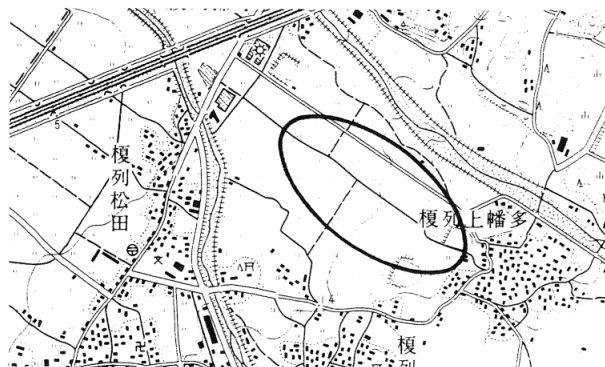
縄文時代の遺構の検出は、郡内では谷町筋遺跡に次いでおそらく2例目となる。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居跡については、方形もしくは隅丸方形の平面形をもつものばかりであることが注目される。郡内で当遺跡以外では、谷町筋遺跡で方形の竪穴住居跡が比較的まともって検出されており、庄内式から布留式併行期に位置づけられている。郡内の他遺跡の弥生時代後期の竪穴住居跡はすべて円形であり、おそらく弥生時代後期後半から終末期にかけて竪穴住居の方形化が進んでいったものと思われる。またS H03や平成9年度調査で検出されたS H02は、四本柱で中央に炉と思われる浅い土坑をもち、島外でも見られる定型化した方形竪穴住居と言えるだろう。『玉津田中遺跡』（兵庫県教育委員会 1996）では、浅い中央焼土坑の出現を甕の丸底化と関連づけているが、三原郡においても遅れて進行しつつある土器の変化と対応するように、このような方形竪穴住居が成立すると考えておきたい。この時期に関して、四国系の土器に加え、吉備系の土器が散見することも付け加えておく。またS H04や西区のS H01は、住居跡内からの出土遺物が少ないが、庄内式併行期でもおそらくS H03より古い段階に位置づけられる。近辺に焼土面をもつ平坦面があり、遺物出土量も多いため、住居近くに煮炊等の作業を行う場所をつくっていたことも考えうる。

中世の建物等の方向が、圃場整備前の土地区画の方向と良く一致することから、おそらく現在の土地区画の原型は中世に遡ると考えられる。出土遺物が少ないのが残念であるが、大規模な土地開発が行われたのは13～15世紀に収まるであろう。1223年の「淡路国大田文」には、「八太村」は公領と記されているので、13世紀後半以降、おそらく荘園化などの要因を背景に開発が進んだものと思われる。これと併せて西区周辺は中世居館の伝承地であり、西区の小字名は「敷地」、西区北側には「城家院」、「殿ノ内」、「殿ノ門」、「庵の土井」、「伊介土井」等の小字名が残る。今回検出した建物群は規模も小さく、居館の中心となるような建物ではないが、平成9年度に西区の北60m程の場所で検出された建物群も同じような方向を示しており、周辺で計画的な開発が行われた可能性を示唆している。 (山崎)

32 はた幡多遺跡 ぎょうとうち行當地地区 - 1次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字行當地外
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 定松佳重・坂口弘貢
 種別 確認調査
 調査期間 平成10年6月11～29日
 調査面積 220㎡（55ヶ所）



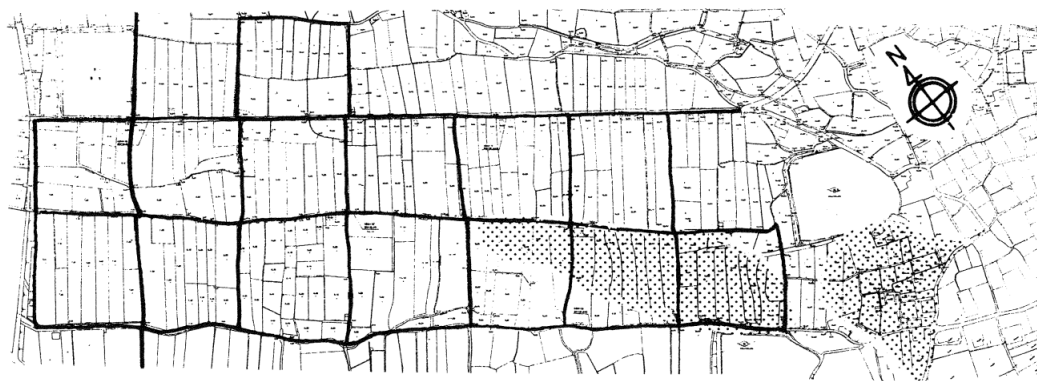
調査の位置

1. 調査の概要

周辺の歴史的環境は、本調査対象地には条里型地割に基づいた水田区画が現在も踏襲されており、N30°E方向のそれは12世紀代の施行といわれている。三原平野には正方位の条里型地割もあり、淡路国分寺の遺構と同一方向であることから律令期のものといわれている。

遺構は上幡多集落寄りで黄色系粘土を遺構面とする柱穴や溝を確認した。また、西ノ池のすぐ西の調査区ではシルトの堆積で上層に遺物が多く含まれる。最下層では水生植物遺体が残存していた。西ノ池東側は表土直下が遺構面となる。遺構は大きな溝状で、西ノ池に向かっている。幅1.6m以上・深さ64cmとなる。最初に速い水流によって砂礫が堆積し、半分の深さまで水流によって埋まると溝としての機能は終わり、埋没したようである。埋土中すべての遺物がほぼ7C後半～8C前半の範疇に入ることから、溝が機能し始めてから完全に埋没するまでの時間差はあまりないと思われる。

一部の調査区は坪境の状況を知るため畔を断ち切る形に1×4mのトレンチを設定し、幅1m・高さ6cmの高まりを確認した。この畔は現在は細いが、近年まで“馬道”^{うまみち}と呼ばれて馬による農作物の搬出に使用された。微高地を外れた北西部の調査区では湿地状を呈する土壌堆積である。表土下約1.2mで水流の影響を受けた砂層になるが、この砂層と上層の黒色シルトの境付近には流木が多く、木製容器（32×19.5cmの楕円形）が弥生時代中期の土器とともに出土した。



条里型地割と遺構の分布 (S=1/4,000)

2. まとめ

全体的には成相川の氾濫による砂礫層と条里型地割施行以前と思われる旧耕作土、その混合の土壤堆積であった。しかし、成相川からは200mほど離れていたためか影響を受けつつも水田化は早かったようである。西ノ池の北西には池による湿地帯が形成され、西ノ池と下幡多池の狭い間をぬけて北西方向に遺構の立地する土壤が舌状に延びる。遺構は主に7C末～8C初頭頃のものであるが、弥生時代中期の遺物も出土しており、上幡多集落の周辺に幡多遺跡下内田地区とは別の弥生時代中期の遺跡が埋蔵されている可能性がある。

本調査対象地には現在もN30°E方向の条里型地割が明瞭に残っており、地籍図との比較で1町が100～110mであることが判った。ほとんどが長地型と半折型であり、長地型の場合田7筆で1町となっている。坪境と思われる畔を断ち割った結果、わずかながらの高まりがあり、幅もあったことが判った。また、坪境と思われる他の畔はコンクリート畦畔のため調査区設定はしなかったが、やや大きめの水路が走っており地籍図の坪境をほぼ踏襲している。

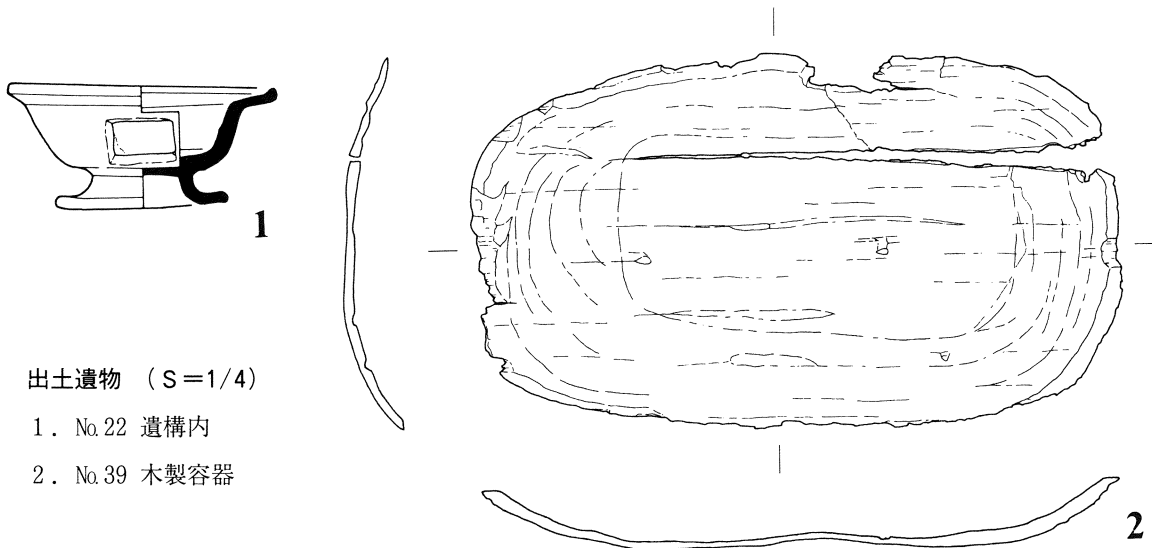
このN30°Eの地割りは12世紀代のものといわれている（『雨流遺跡』 兵庫県教育委員会 1990）が、今回の確認調査では12世紀代の明確な遺物は確認できなかった。

10C前半以降の水田は現存条里型地割とまったく同一の形態を呈するといわれている。下層には7C末～8C初頭の遺物が出土する黒色系粘質土の旧耕作土と思われる土壤堆積があり、また、大畦畔は検出したが条里型地割に基づく小畦畔は確認できなかったことから、律令期の水田が成相川の氾濫を受けて現存条里型地割になったと推測される。

本地区名の“行當地”は『味地草』に“行當寺廢寺 上八太村の西南隅、自凝島に近き畝号”とあり、“行當寺”が転化して“行當地”になったと思われる。しかし、字行當地内では寺院遺構はおろか瓦すら出土しなかった。

町道を挟んで北東に立地する幡多遺跡下内田地区では成相川の氾濫原であったが、わずかな微高地に弥生時代中期の小規模な集落が営まれており、本遺跡も同様に成相川の影響を受けつつも微高地で生活を営んでいた。西には同じような緩斜面が広がり、分布調査でも多量の遺物を採集していることから、遺跡の立地する小規模な埋没微高地が点在すると思われる。

(定松)



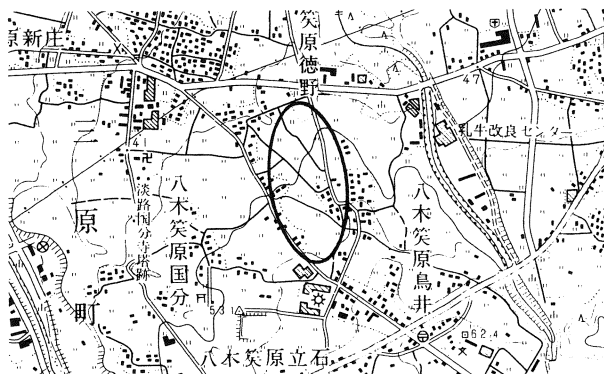
出土遺物 (S=1/4)

1. No.22 遺構内
2. No.39 木製容器

木製容器実測図

33 うとの^{くち}遺跡 - 1次調査 -

所在地 三原郡三原町八木鳥井字程原外
 事業名 集約農業地域再編総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 中島薫・定松佳重
 種別 確認調査
 調査期間 平成10年6月15～29日・
 平成10年7月15日
 調査面積 144m² (36ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

八木鳥井地区で計画・実施されている集約農業地域再編総合整備事業において、平成8・9年度に引き続き確認調査を行ったものである。

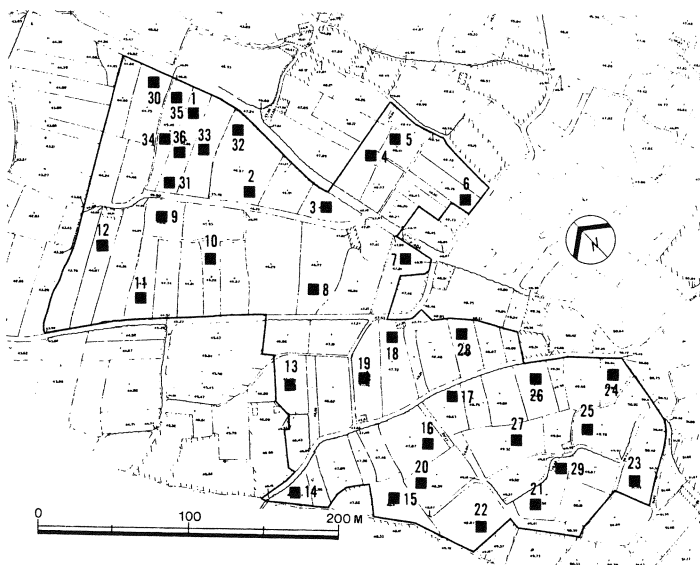
調査地は三原平野中央部東寄りに位置し、標高約43～50mの北西に向かって緩やかに傾斜する田園地帯である。平成8・9年度に行った確認調査では約450m南東で平安時代の遺構を確認している内御堂田遺跡や成相川を挟んだ対岸には平安時代の遺物散布地が密集している。また、約500m西には淡路国分寺が鎮座する。

2×2mの調査区を27ヶ所設定したが、明確な遺跡範囲を捉えるために追加調査を行ったため、最終的に36ヶ所となった。遺構や包含層は調査地の北部にあるNo.1・31・33～36で確認し、遺構は地山である黄色系粘土～礫混黄土褐色系粘質土に掘り込まれている。後世の削平を受けているため、耕作土直下に遺構を検出する調査区もあった。主な遺構は土坑と柱穴で、9～10世紀頃の黒色土器や土師質高台皿などが出土した。

2. まとめ

今回行った調査の結果、調査区36ヶ所中6ヶ所で遺構か包含層を確認し、9～10世紀頃にこの周辺で集落が営まれていたことが判明した。調査対象地内での遺跡範囲は田圃3筆、約1700m²ほどにあたると思われるが、今回対象地外であった東にも広がっている可能性が高い。

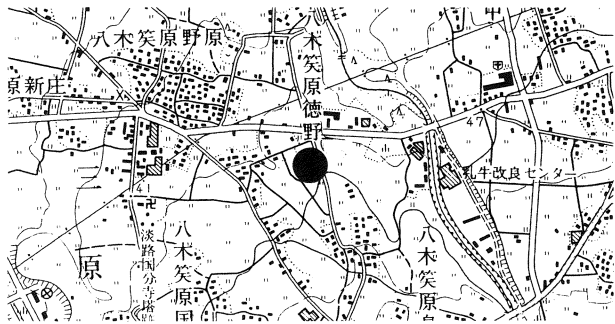
(中島)



調査区配置図

34 うとの^{くち}口遺跡 - 2次調査-

所在地 三原郡三原町八木鳥井字稗原
事業名 集約農業地域再編総合整備事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 中島薫・定松佳重
種別 本格調査
調査期間 平成10年8月17～27日
調査面積 192m²



調査の位置

1. 調査の概要

事業施工に際して埋蔵文化財確認調査を行った結果、狭い範囲ではあるが遺構を確認したため、遺跡内で掘削が行われる幅2.7m×長さ71mの排水路部分を本格調査することとなった。確認調査では平安時代の遺構面のみと思われていたため、地山である暗オリーブ褐色粘粗砂質土で遺構検出を行ったが、上面から中世の遺構が掘込まれていることが判った。

平安時代の遺構は2～11区で柱穴と土坑を検出した。今回の調査では遺物が土師質土器しか出土していないため明確な時代は不明であるが、確認調査では9～10世紀の遺物が出土しているため、同時代と考える。

中世の遺構は7～10区で溝状の遺構と6基の土壙墓があり、土壙墓はいずれも床面がほぼ平坦で壁は垂直に近い形を呈する。大きさは長さ約1.4～1.8m、幅約0.7～1.2m、深さ約0.5～0.8mである。土壙墓からは埋葬品と呼べるものはなく、埋土中に瓦器・土師質土器・黒色土器片が含まれていた。浅い溝状遺構からは瓦質の三足鍋脚部が出土している。この中世の遺構は14世紀より新しいと思われる。

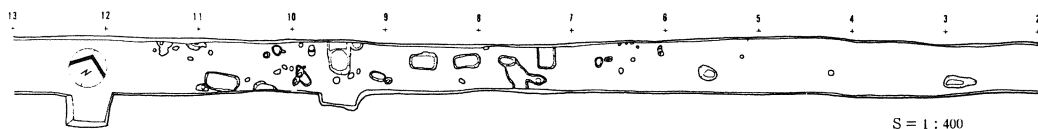
2. まとめ

以上のことから、今回の調査で遺構面が2面存在していたことが判った。調査地は平安時代には居住区域であったものの、中世以降には共同埋葬墓地である墓域へと変化したものと思われる。今後は周辺において中世集落の存在が確認されることを期待する。

(中島)



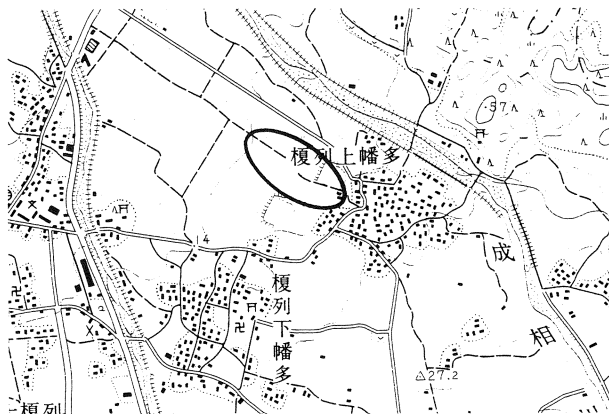
調査区全景



遺構平面図

35 はた ぎょうとうち 幡多遺跡 行當地地区 - 2次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字行當地外
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 定松佳重・坂口弘貢・
 山崎裕司・的崎薫
 種別 本格調査
 調査期間 平成10年8月26日～
 平成11年1月25日
 調査面積 2,450㎡

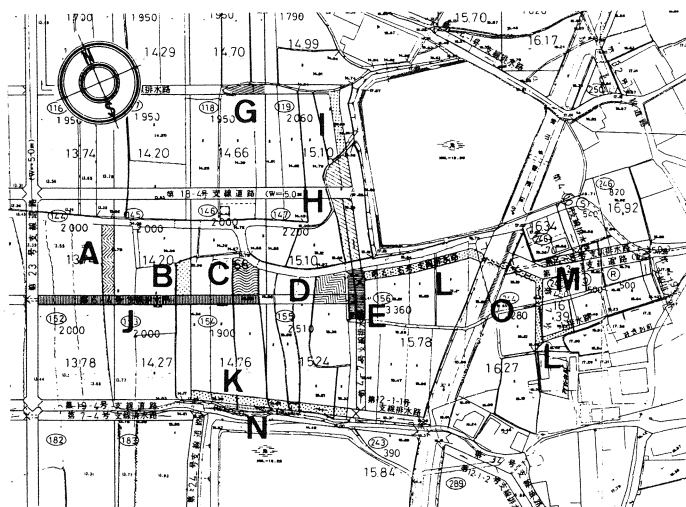


調査の位置

1. 調査の概要

遺跡範囲確認調査を行った結果、事業予定地内に弥生時代中期と奈良時代後半の遺構・遺物を確認したため、その成果をもとに関係組織と協議を行い、基本的に設計変更による地下保存とし、変更が不可能な排水路等については本格調査を行い、記録保存とすることとなった。

調査区をA～O地区に分け、調査を進めていった。全調査区で遺構は検出したが、本遺跡を特徴づける遺構を検出した調査区を述べることとする。



調査区設定図 (S=1/4,000)

【A地区】

調査区内の東部と西部では遺構面の土質が異なり、東部では黄色系粘土、西部は黒褐色系粘質土となる。遺構は土壌の違いによって異なる性質の立地をしている。東部の黄色系粘土では柵列や小土坑など、西部の黒褐色系粘質土では畑の畝を検出した。柵列は5列検出し、そのうち3列は約55cmの間隔で並んでいる。畝は現在の田の区画と同一方向を向き、遺物は奈良時代後半の須恵器・土師器を含む。

【D地区】

掘立柱建物3棟、弥生時代中期の遺物を含む土坑を検出した。

【H地区】

かつて西ノ池の一部であったことを示す黒色シルトが堆積し、その中より弥生時代中期の土器が大量に廃棄された状態で出土した。口径約40cm、復原高約80cm、口縁から頸部にかけて幅・厚さ1cmの大きな凸帯を持つ大型壺が多い。生活雑器は見あたらない。また、サヌカイトの大きい剥片が総量310.3g溝状遺構より出土した。溝からは奈良時代前半の須恵器も出土し、弥生時代中期の間だけで埋没してしまったE地区とは異なる。

【K地区】

遺構は弥生時代中期の竪穴住居跡、土坑、柵列、急激な水流によってできた溝などがある。

竪穴住居跡は2棟確認でき、2棟とも削平のため周壁は残っておらず、建て替えが行われているが切り合いは不明である。SH1周辺の遺構面よりサヌカイトのチップが多く出土する。

長径1.5m短径0.9mの楕円形のSK70より大阪湾型銅戈が破片で出土した。この土坑は埋土が2つに分層でき、上層は粗砂質土、下層はシルト質



K地区 SK70 遺物出土状況（北西より）

土でこの2層の境付近より散らばって出土した。破片点数は約20点を数える。大阪湾型銅戈は文様より最低2個体あり、1個体は全体にきゃしゃで薄い造りであるc類、もう1個体は、本来軸の両側を一段低くし複合鋸歯紋を施すところを凸状の高まりでもって段を省略しているという、今までには観られない文様の造りをしている。

【L地区】

西ノ池に向かって幅約3mの溝7を検出した。この溝からは奈良時代前半の須恵器・土師器が出土し、須恵器蓋を転用した硯2点と須恵器蓋の扁平な宝珠部分に「家」と書かれた墨書土器が見つかった。

2. まとめ

本遺跡は弥生時代中期、奈良時代の遺跡であることが判った。西ノ池を中心に弥生時代中期は池の側に、奈良時代は池よりやや離れた集落よりのところの微高地上に立地する。

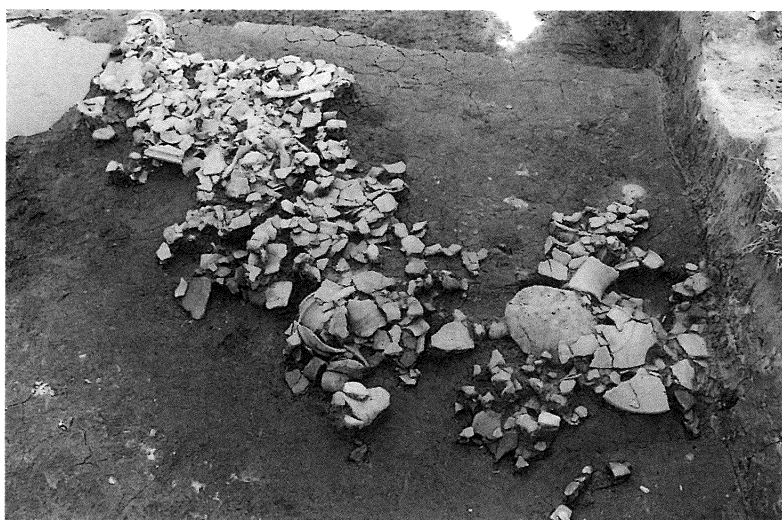
本遺跡が弥生時代中期の拠点集落であったことは、大阪湾型銅戈の出土からいえる。また、H地区出土のような大型の加飾が激しい土器は淡路島島内では出土しておらず、一般集落からの出土とは考えにくい。

大阪湾型銅戈は下層（IV様式-3後～4前）と上層（IV様式-4）にはさまれて出土し、神戸市保久良神社などのc類出現時期に有力な資料となった。また、大阪湾型銅戈は従来3分類されていたが未知のタイプの文様が確認され、4つ目の分類「d類」があることが判った。本来樋部分は側刃より一段低くなるが、d類は段がなくわずかな凸線で表現しており、c類よりさらに省略化が進んでいる。

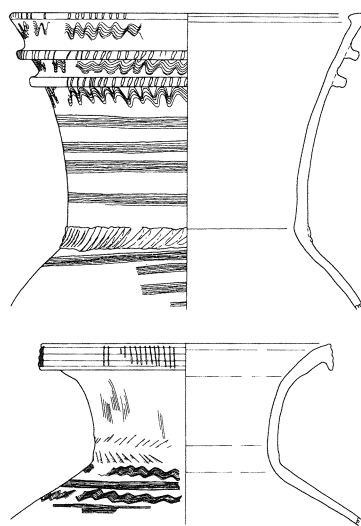
青銅祭器は銅鐸の埋納例が代表するように丁寧かつ重要な扱いを受けてきた。しかし、本遺跡では破片で出土している。本品は铸造時に生じるはみ出し（バリ）がどこにも見当たらないことから成品としての処理を受けていることが判る。よって铸造が原因で破片になったわけではない。破片であることが故意か過失か現段階では判らないが、どちらにしても青銅祭器・青銅祭祀の終わり方、集団祭祀の変化など様々な問題を投げかける重要な資料であるといえる。

奈良時代の遺物がまとまって出土したのはL地区SD7である。奈良時代前半の遺物の中に須恵器蓋の転用硯や「家」の墨書土器があること、幡多地区は新羅系渡来人秦氏がいたと言われていること、幡多郷の設置などから周辺に官衛的性格を持つ遺構が埋没している可能性が非常に高い。

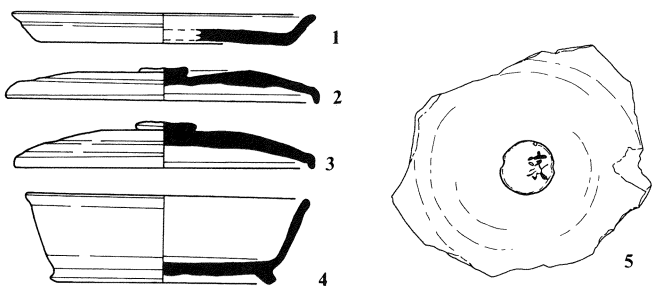
（定松）



H地区 弥生土器出土状況 (北より)

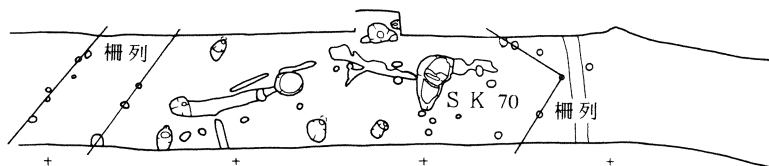
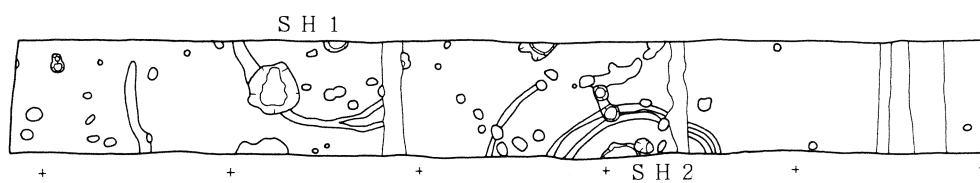


H地区 出土遺物 (S=1/8)

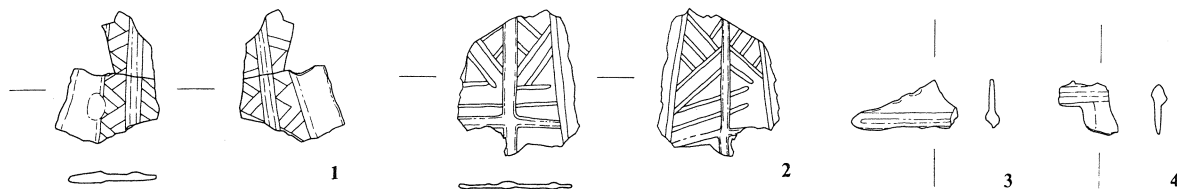


出土遺物 (S=1/4)

- 1. J地区 包含層
- 2. O地区 包含層
- 3. L地区 SD 7 転用硯
- 4・5. L地区 SD 7



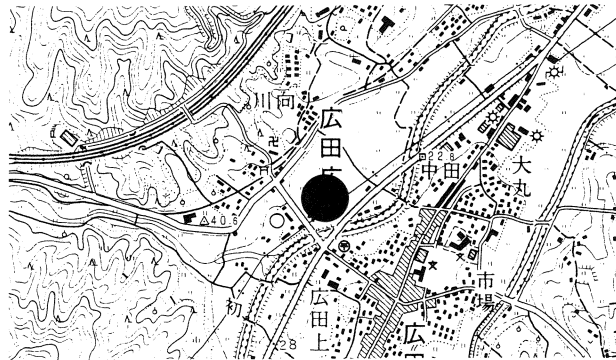
K地区 遺構平面図



K地区 S K 70出土 大阪湾型銅戈 (S=1/4) 1・3・4. c類 2. d類

なかだ
36 中田遺跡

所在地 三原郡緑町広田広田840-1 外字中田外
 事業名 土地区画整理事業（中田地区）
 調査主体 緑町教育委員会
 担当者 坂口弘貢・山崎裕司
 種別 確認調査
 調査期間 平成10年10月19日～
 平成10年11月16日
 調査面積 204㎡（31ヶ所）



調査の位置

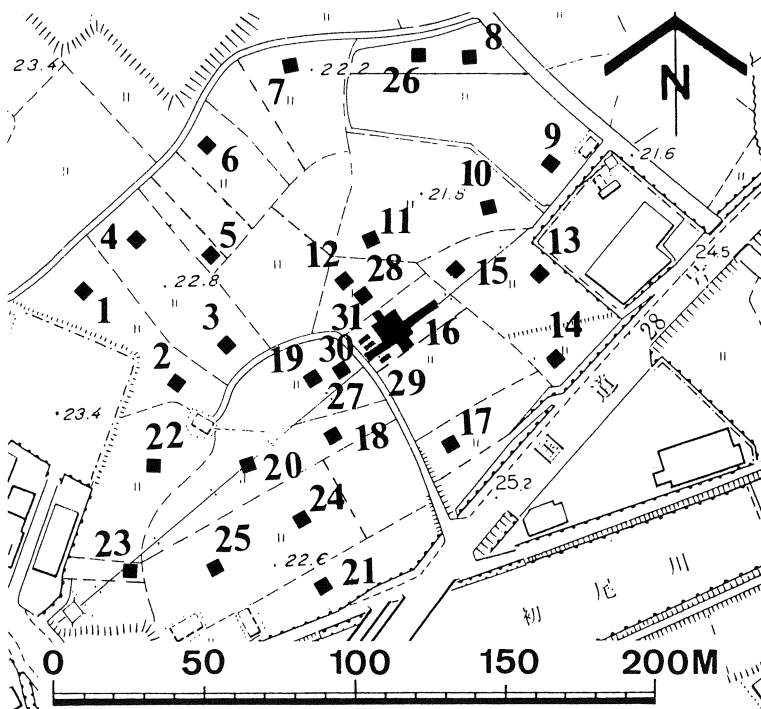
1. 調査内容

本調査は、緑町広田の初尾川中流左岸域で計画されている区画整理事業に伴い実施した。調査は当初2×2mの調査区を26ヶ設定し、重機・人力併用で進めていき、遺構を確認した調査区の拡張や周辺部の調査区追加を行っていった。確認した遺構には、柱穴状の遺構や溝状の遺構などがあった。拡張前は柱穴状の遺構は建物を構成するものと考えられたが、拡張した調査区内では、明確に建物として復元することはできなかった。出土遺物には、土師質土器や瓦器などがあり、時期的には中世が想定される。

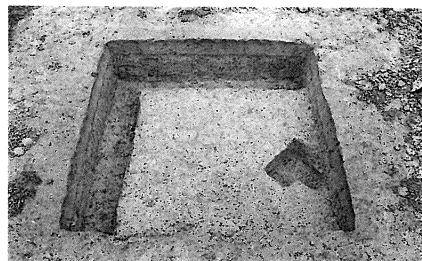
2. まとめ

本調査により、中世の遺跡を確認した。調査面積の関係から遺跡の性格は不明確な部分が多く、詳細は今後の調査課題としたい。

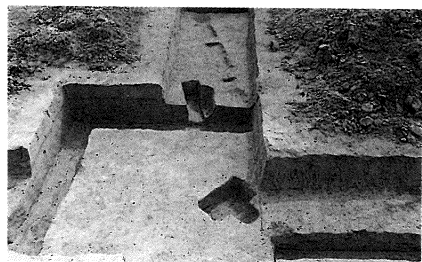
(坂口)



調査区設定図



No.16 調査区全景（拡張前、北西より）



No.16 調査区全景（拡張後、北西より）

37 ^{あわじこくぶんじあと}淡路国分寺跡 -12次調査-

所在地 三原郡三原町八木
 国分326-1外字屋敷

事業名 町道八木73号線道路改良
 (路側コンクリート設置) 事業

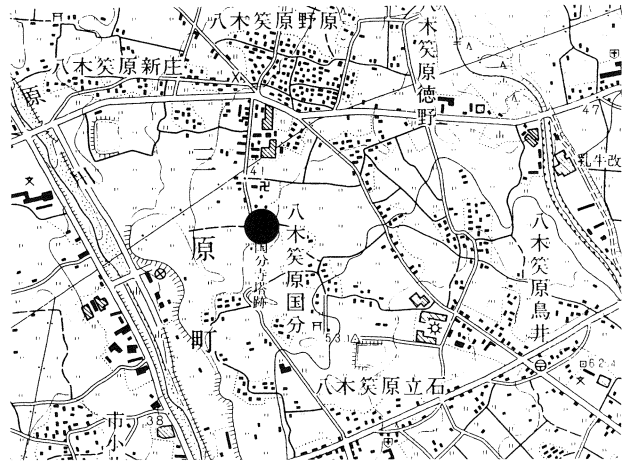
調査主体 三原町教育委員会

担当者 坂口弘貢

種別 本格調査

調査期間 平成11年2月17日～
 平成11年3月1日

調査面積 43m²



調査の位置

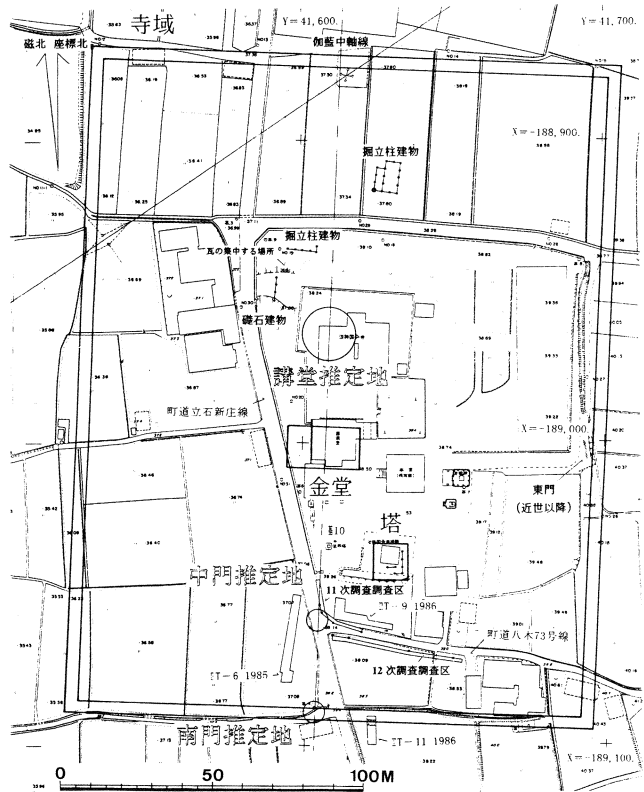
1. 調査内容

本調査は、三原平野中央部の淡路国分寺の寺域内で計画されている上記の事業に伴い行った。工事の掘削幅が狭小なため立会という意見もあったが、事前の発掘調査で対応することでもまとまった。

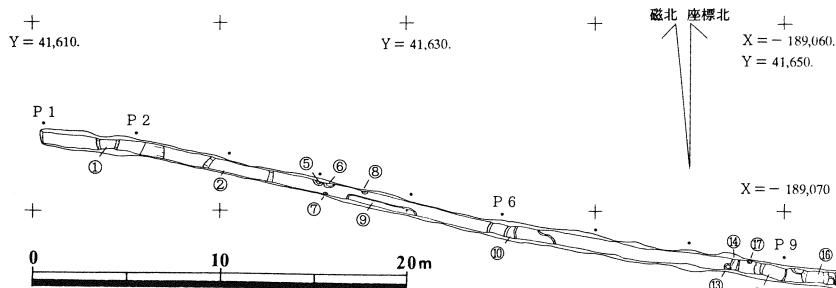
調査は幅1m×長さ43mの調査区を設定し、重機・人力併用で進めていった。調査の結果、近世頃の瓦溜め状の遺構(②)や土取り跡(⑮・⑯)、中世頃の柱穴(⑤・⑥・①・⑧)などを確認したが、明確に創建期に位置付けできる遺構は確認できなかった。

2. まとめ

以上の通り、明確に国分寺創建期の遺構は確認できなかったものの、特に中門推定地に近い調査区西端から古代瓦の出土が顕著であったことが注意される。(坂口)



調査区設定図



調査区平面図

5) 平成11(1999)年度

38 由ヶ谷古墳

所在地 三原郡三原町八木入田字由ヶ谷
事業名 農村型観光施設整備事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 定松佳重・坂口弘貢・山崎裕司
種別 本格調査
調査期間 平成11年5月6日～
平成11年6月10日
調査面積 299m²



調査の位置

1. 調査の概要

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野北東端、成相川の支流である養宜川右岸に位置する。周囲には大池・徳ヶ池・大池尻などため池が多い。由ヶ谷古墳のすぐ南で完形の凸基有茎式石鏃が採集されている。

平成10年度の分布調査で本来1基とされていた由ヶ谷古墳が2基であることが判明した。しかし、両古墳とも後世の破壊を大きく受けており、墳丘はおろか横穴式石室だったと思わせる石材が周辺に散乱しているのみであった。

関係事業課と協議を行い、破壊は受けているが分布調査時に玄室と思われる付近から須恵器片を採集していることから、記録保存と周辺に散乱しているであろう遺物の採取を行うこととなった。

【1号墳】

40cm前後の砂岩が散乱し、石の平坦面を揃えるという規則性が部分的に観られ、これが玄室両壁の基底部石であった。幅約1.1m、残存長約1.4m、主軸は南北で地形から開口部は南に向いていたと思われる。遺存状態の良かった左壁側にはほぼ完形の須恵器坏身・蓋が6点出土した。

【2号墳】

50cm前後の砂岩が散乱し、規則性は観られない。墳丘と思われる土の削除後、地山である黄白色系粘質土には雨水の流れた溝があった。



石室検出前

2. まとめ

由ヶ谷1・2号墳は立地する丘陵を大きく削平されおり、現状では地山が露出して雨水による溝が多く刻まれている。2号墳下の地山にもこの溝があることから、2号墳はもともと古墳があって破壊を受けたのではなく、1号墳の盛土や石材を移動させたものと考えられる。

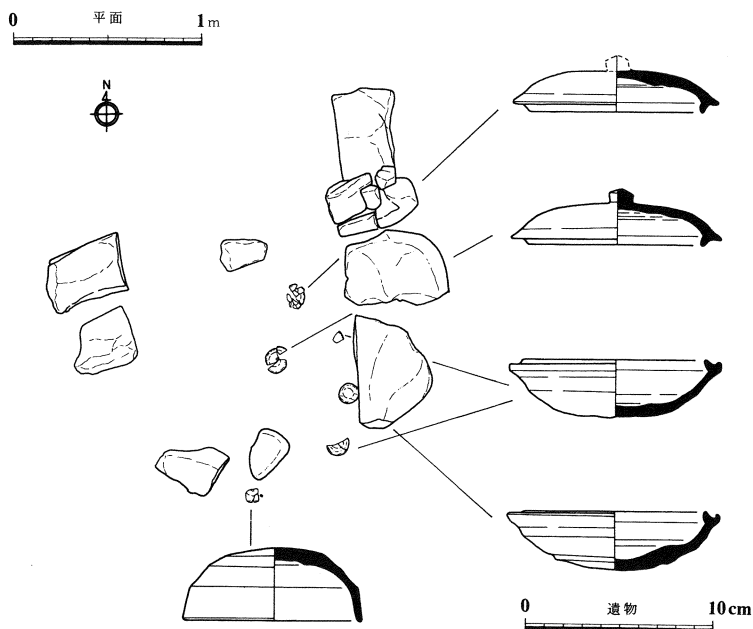
1号墳は三原郡内に多い小型横穴式石室であったと思われる。石材は砂岩であり、石室内に平坦な河原石が計4点確認されていることから、木棺であったと思われる。鉄製品は確認できていない。出土須恵器は7世紀前半である。

本調査地で石鏃2点、サヌカイト片も多く出土している。背後には600m弱の山が連なり、三原平野を一望できる立地から、古墳築造以前には弥生遺跡が存在していた可能性がある。

(定松)



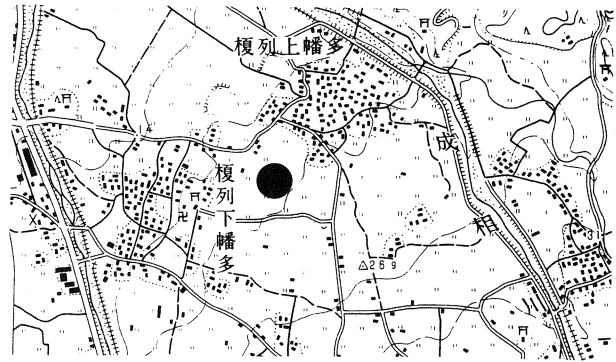
1号墳 石室内遺物出土状況
(南より)



1号墳 石室内出土遺物

39 幡多遺跡 野水地区 - 2次調査 -

所在地 三原郡三原町複列上幡多字野水外
事業名 県営土地改良総合整備事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 山崎裕司
種別 確認調査
調査期間 平成11年6月14日～
平成11年7月15日
調査面積 540㎡ (134ヶ所)



調査の位置

1. 調査の概要

調査地は三原平野の北東部、段丘化した扇状地の末端に位置し、南東から北西にかけて緩やかに傾斜する地形である。調査地の東側は幡多遺跡の若宮地区、北側は幡多遺跡の行當地地区となる。また西側の神本寺は「神本駅家」との関わりが指摘されている。

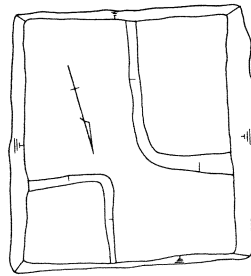
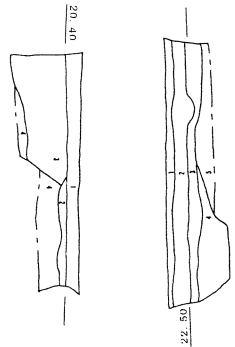
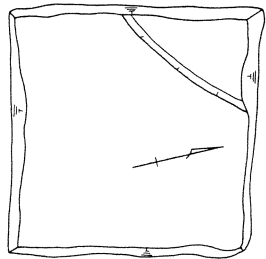
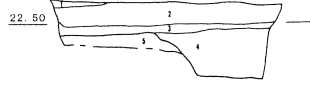
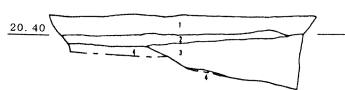
上記事業に伴い平成8年度に分布調査を行い、平成9年度に北半部の確認調査を行った。それらの結果にもとづき、確認調査を実施することになった。

耕作土直下が礫層の場所は遺構・包含層は確認されておらず、南側の調査区に多い。遺構・包含層が見られるのは黒色系の砂質土が堆積している場所である。ただし、この黒色系の砂質土が遺構面となっている場所では、遺構埋土との判別が極めて難しい。

調査の結果、弥生時代中期後半、弥生時代後期、律令期から中世にかけての遺構が検出されている。調査区18からは幅約1.6mの溝が検出されており、本格調査で弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝部分であることがわかった。調査範囲の北東部、調査区48・49・51・53・58からは、弥生時代後期の遺構が検出されており、調査区49・58は竪穴住居跡の一部と思われる。調査区2の溝状の遺構、調査区99・103の柱穴状の遺構など、北西部では律令期と思われる遺構が検出されている。調査区64・67・88・96などで検出された柱穴状の遺構も律令期と思われる。中世の遺構は遺跡範囲の全域で検出されており、黒色系の埋土をもつものの他、黄～灰褐色系の溝状の遺構が東北部で多く見られ、耕地区画の方向と一致するものが多く見られる。

2. まとめ

複合遺跡であり、時代によって場所的な偏りが見られる。弥生時代中期後半については調査区18を中心とした範囲で、本格調査の項で述べるが墓域的な要素が強い。弥生時代後期の遺物は北半部全体で出土するが、遺構の検出は北東部に偏る。律令期は北西部と南東部に見られるが、前者は7～8世紀頃が中心であり、北方向に帯状に分布し、おそらく行當地地区とつながるとされる。後者は9～10世紀頃が中心であり、遺跡範囲南側の突出した範囲周辺である。中世は全域に見られるが北東部については居住域的な性格はうすく、耕地を中心とする生産域と思われる。また神本寺正面の調査区131周辺では、中世でも後半の遺構・包含層が確認されており、南西側の別の地区につながるとされる。(山崎)



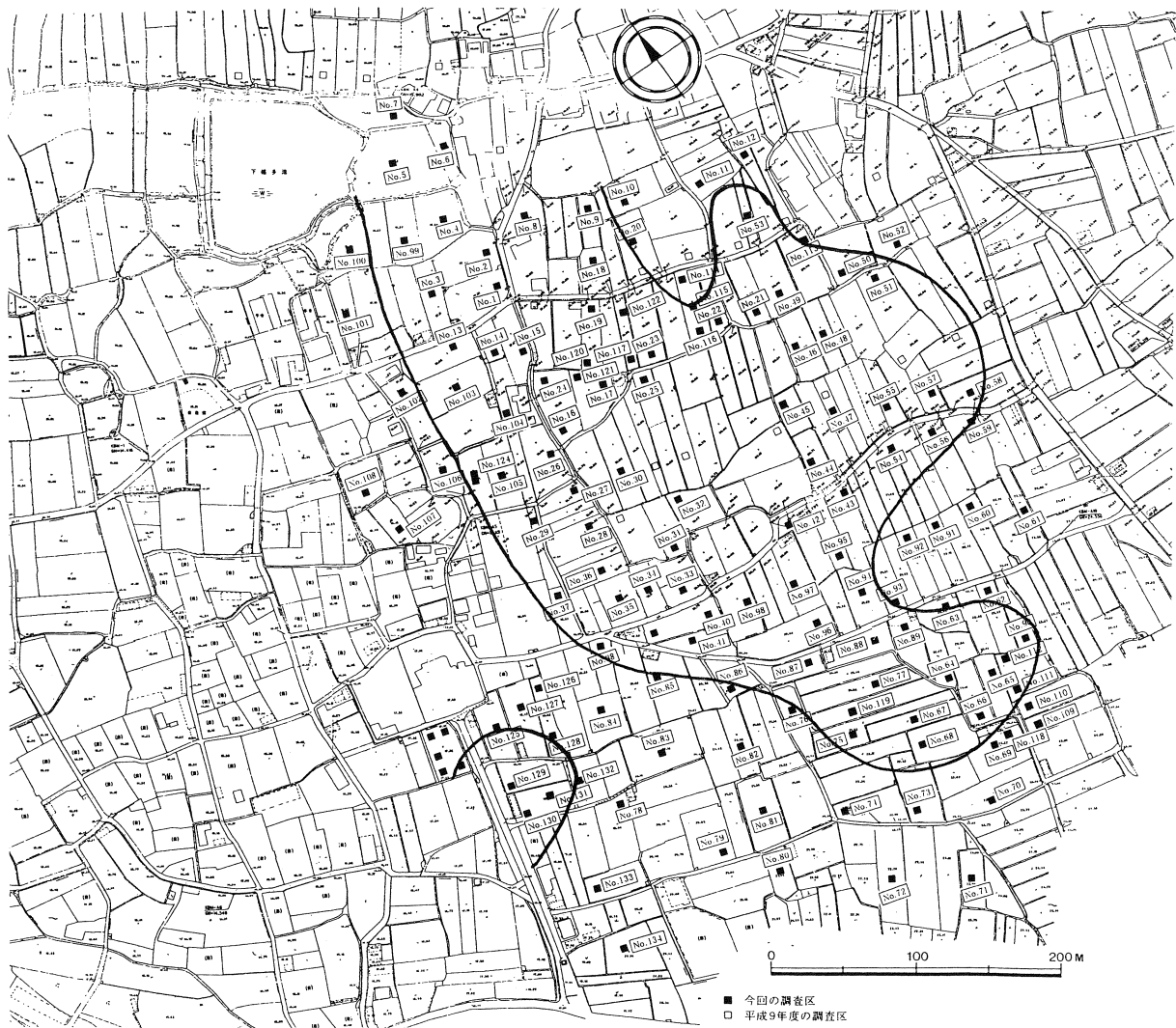
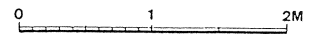
第二遺構面

No. 49

- 1 床土
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土に3が混じる
- 3 10YR3/2黒褐色粘細砂質土(遺構埋土)
- 4 10YR3/3暗褐色細砂質土(上面に遺構面、地山)

No. 58

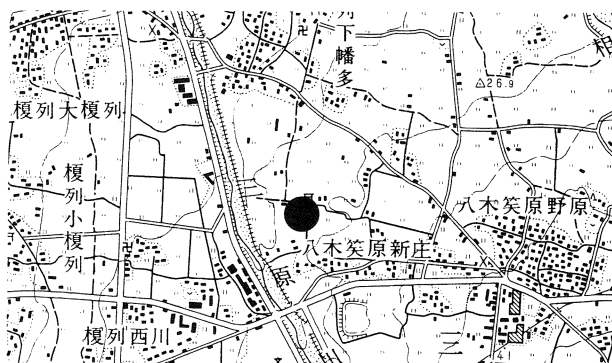
- 1 耕土
- 2 盛土
- 3 10YR3/2黒褐色粘細砂質土
- 4 10YR3/1黒褐色粘細砂質土(遺構埋土)
- 5 10YR3/3暗褐色細砂(上面に遺構面、地山)



調査区位置図

40 あわじこくぶにしあと 淡路国分尼寺跡

所在地 三原郡三原町八木新庄115字尼寺
 事業名 新庄地区公会堂建設事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 坂口弘貢・定松佳重
 種別 試掘調査
 調査期間 平成11年7月26日～
 平成11年8月4日
 調査面積 約20㎡



調査の位置

1. 調査内容

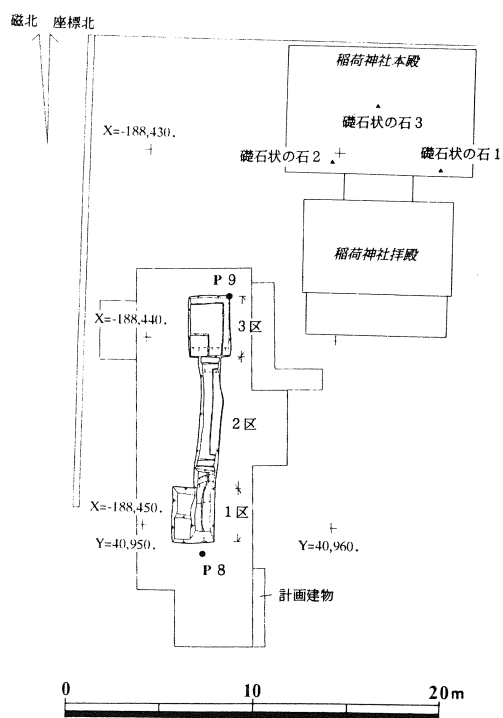
7月21日（水）に八木新庄地区内にある国分尼寺推定地で土木工事を偶然発見した。掘削された土の中には、多量の奈良・平安時代と思しき瓦が含まれており、この状況を県教育委員会に連絡し、関係組織で協議した結果、上記の期間で緊急に調査することになった。

調査の結果、1区で多量の瓦を含む落ち込み、3区で厚さ70cmの版築状の整地層を確認した。

2. まとめ

本調査で確認した版築状の整地層や国分寺跡と同文の軒瓦は、本遺跡が淡路国分尼寺跡と断定するのに十分な客観的資料となろう。さらに国分寺の創建期で使用された軒瓦と同時期の軒瓦が出土したことは、淡路国分尼寺が淡路国分寺と、さほど時間的に時を経ることなく建立された証拠となろう。

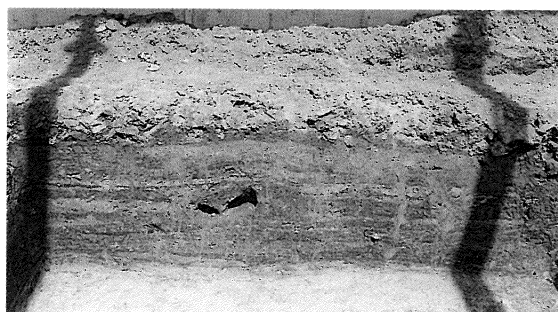
(坂口)



調査区設定図



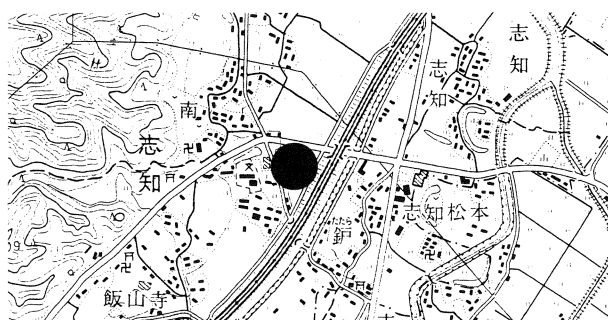
1区東壁層序



3区東壁層序

41 鈿田遺跡

所在地	三原郡西淡町志知南字大塚外
事業名	陸の港建設整備事業
調査主体	西淡町教育委員会
担当者	定松佳重
種別	確認調査
調査期間	平成11年10月4～5日
調査面積	28m ² （7ヶ所）



調査の位置

1. 調査の概要

本事業は明石海峡大橋の完成によって阪神間との交通が容易になり、町内での定住促進とパーク&バスライド方式を目的として計画された。淡路縦貫道建設に伴い昭和58年に兵庫県教育委員会によって発掘調査が行われた鈿田遺跡に隣接するため、遺跡の範囲・種類等を把握し事業の円滑を計るため、遺跡範囲確認調査を行った。

周辺には昭和57年に淡路縦貫道に伴い兵庫県教育委員会によって発掘調査が行われた谷町筋遺跡や三原平野における古墳時代後期の有力首長の墓であるハバ古墳、石斧採集地である志知高所遺跡等が立地する。

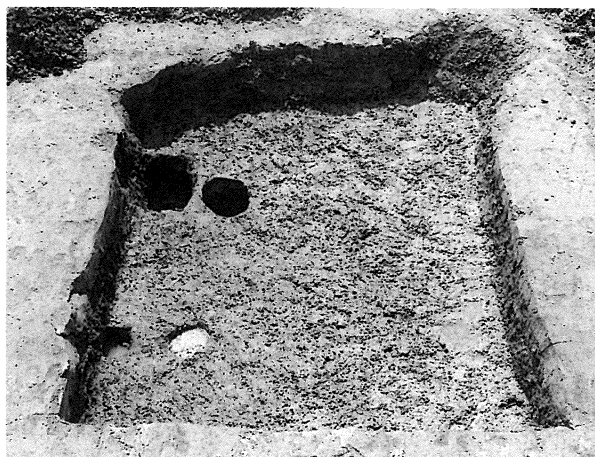
現在既に淡路縦貫道志知バス停駐車場として使用されている東部分は旧耕作土・床土の下層はシルト質であり、すぐ東を北流する新川の影響を受けていたと思われる。南部では黄色の地山の上に黒褐色の遺物包含層が堆積する。遺構は柱穴と壁面で浅い落ち状・小土坑を確認した。遺物は土師器皿・椀などで平安時代のものである。西部調査区では古墳時代に入るとされる土師器壺が出土した。これはハバ古墳との関連が考えられる。北部調査区では水田と思われる灰色有機質土壌が堆積する。

2. まとめ

本調査地内には平安時代の遺跡が埋蔵されていることが判った。それらは兵庫県教育委員会による調査結果と一致する。

遺構は西淡志知小学校を中心とする台地の先端部で検出しており、東限を確認した。谷町筋遺跡の場合でも、台地の先端部分から生活痕が確認され、今回の結果と同様である。

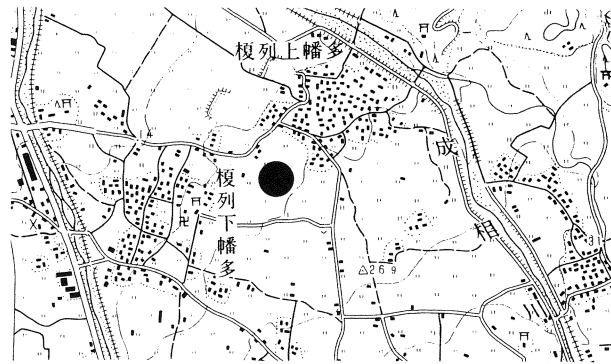
(定松)



遺構完掘状況

42 はたの幡多遺跡 野水地区 - 3次調査 -

所在地 三原郡三原町榎列上幡多字野水外
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 山崎裕司・坂口弘貢
 種別 本格調査
 調査期間 平成11年10月12日～
 平成12年3月1日
 調査面積 3,182m²



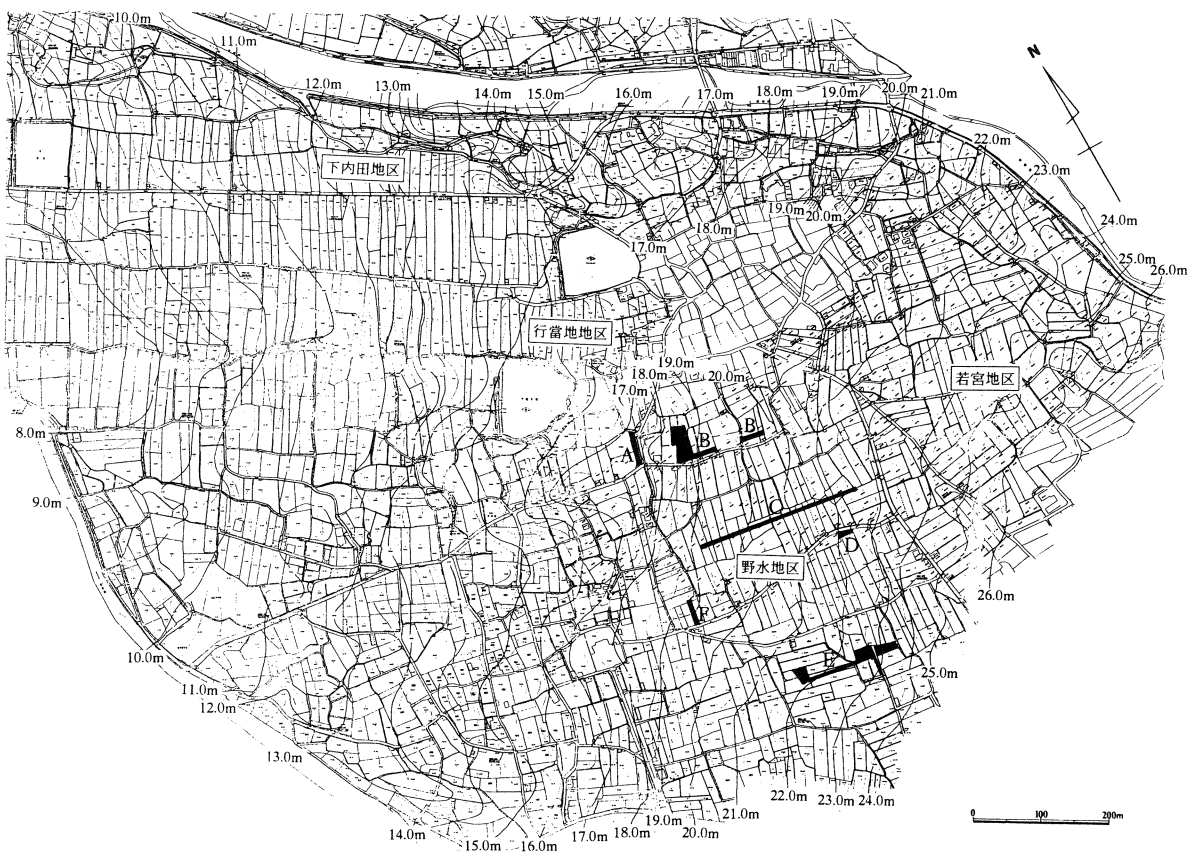
調査の位置

1. 調査の概要

調査地は三原平野の北東部、段丘化した扇状地の末端に位置し、南東から北西にかけて緩やかに傾斜する地形である。A地区から北西側は低平な三角州地形へと変わっていく。

上記事業に伴い平成8年度に分布調査を行い、平成9・11年度に確認調査を行った。それらの結果にもとづき、工事の影響が及ぶと考えられる圃場面・排水路部分において、発掘調査を実施することになった。

調査の結果、弥生時代中期後半、弥生時代後期、律令期から中世にかけての遺構が検出された。



調査区位置図

弥生時代中期後半の遺構としては、B地区の方形周溝墓群があげられる。1,146㎡の調査区から計8基の方形周溝墓が検出された。主体部は検出できなかったが、主体部を含む盛土部が削平を受けたためと考えられる。周溝の残りは比較的良く、基本的には周溝の四隅が切れる平面形態をもつが、周溝の1、2辺が欠落する場合もある。周溝が欠落する場所は堅い礫層が露出しており、掘削が困難なため周溝を省略したか、あるいは極めて浅い溝しか掘らなかったと考えられる。

方形周溝墓1～6は同じような方向を示しており、最大の方形周溝墓1を中心とした一つの群と捉えることができる。方形周溝墓3と5、2と4は長辺の長さが近似しており、同一規模であった可能性も考えられる。そうであれば方形周溝墓1の東側と南側で、さらに小さな群に分かれていたことも考えられよう。

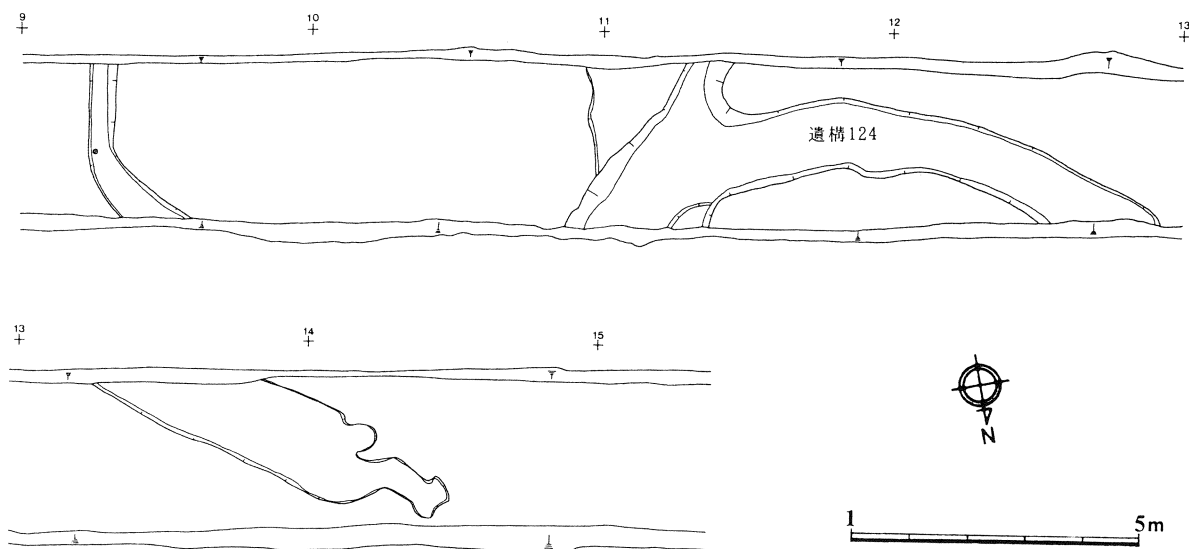
周溝から出土した土器は、底部に穿孔したものがおよそ半数以上を占める。



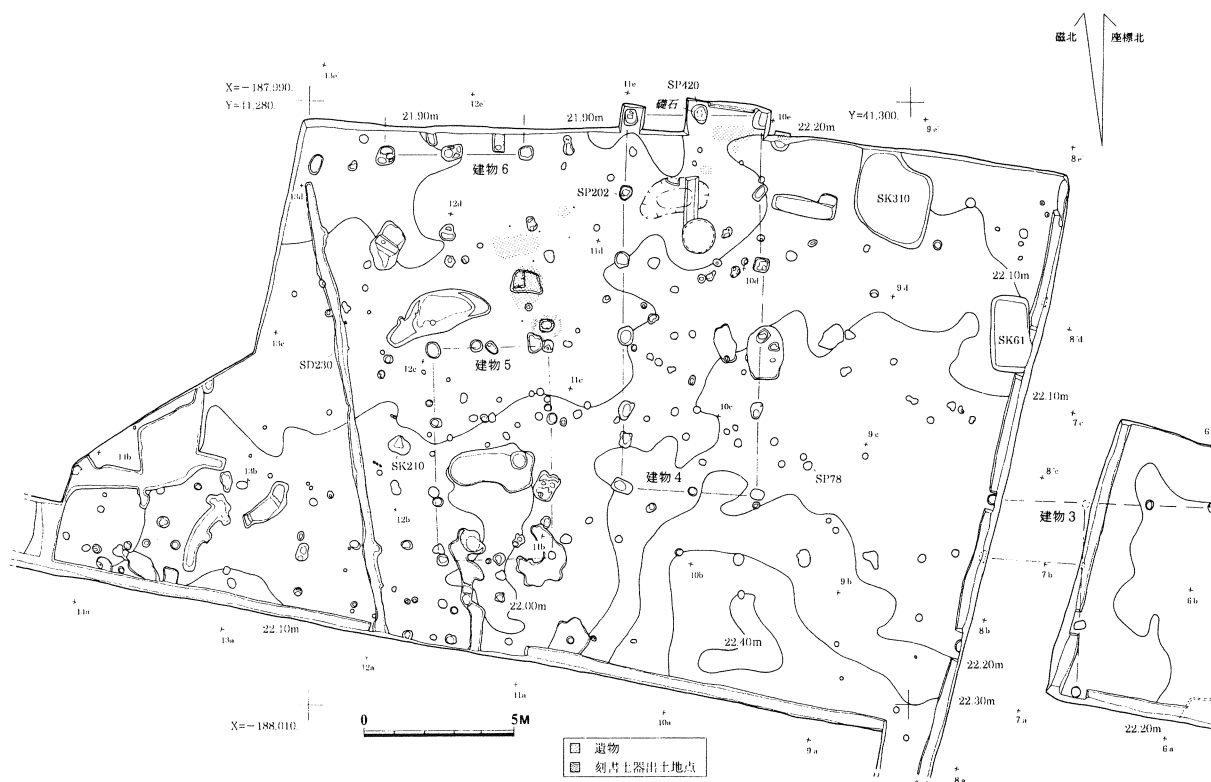
	方形周溝墓 1	2	3	4	5	6	7	8
長 軸	11.9 m	7.6 m	7.0 m	7.8 m	6.8 m?	不明	不明	5.5 m
短 軸	8.6 m	不明	不明	5.4 m	不明	6.2 m	4.9 m	不明
長軸方向	N 15° E	N 20° E	N 13° E	N 13° E	N 12° E	N 13° E	N 20° W	N 52° W

B地区 弥生時代 遺構平面図

弥生時代後期の遺構としては、C地区とD地区の周溝墓群があげられる。C地区は排水路に伴う幅約3mの調査区のため部分的な検出であるが、円形周溝墓の周溝と、その西側から方形周溝墓の周溝の一部と思われる直線的な溝が検出された。円形周溝墓（遺構124）の復元外径は約15mとなる。周溝内からは四国系の土器（東阿波型土器）が出土している。D地区は円形周溝墓の周溝の約半分を検出しており、復元外径は約6.1m、周溝の最深で約30cmを測る。この西側にも溝の一部が検出されている。



C地区 弥生時代 遺構平面図



E地区 主要部分平面図

平安時代の遺構はE地区でまとまって検出された。建物4は桁行5間・梁間2間、建物5は桁行3間・梁間2間で、柱穴からは9世紀末から10世紀頃の遺物が出土している。建物の棟軸はほぼ正南北をとる。建物4の北側柱列周辺および建物5の北側からは、完形に近い土器が集中して出土している。土師器の坏・椀・皿を中心として黒色土器椀、瓦、緑釉陶器等が出土し、「正月丸」あるいは「正月丸」と読める刻書土器（土師器）も出土した。時代は9世紀末から10世紀頃である。SK78からはほとんど完形の須恵器20個体分が出土し、地鎮遺構の可能性はある。時期は9世紀中頃である。

2. まとめ

弥生時代中期後半・後期とも、周溝墓は三原郡内で初めての検出例となる。特に円形周溝墓については部分的な検出ではあるが、淡路島内で初めての検出例となる。

集落の位置については、弥生時代中期と後期では変化が見られる。今回の調査では、B地区以外での中期の遺構・包含層は確認されていない。野水遺跡が立地する段丘上は、中期においては墓域としての利用に限られていた可能性がある。弥生時代中期の居住域は、三角州上の行當地区あるいは下内田地区周辺に求めることができる。弥生時代後期になると、段丘上の野水地区や東側の若宮地区に居住域が移動する。古墳時代初頭以降、居住域は再び三角州の方に移動すると考えられる。おそらく弥生時代後期に居住域を段丘上の微高地に移さざるを得ない理由があったのであり、高地性集落の動向とも関係するのではなかろうか。

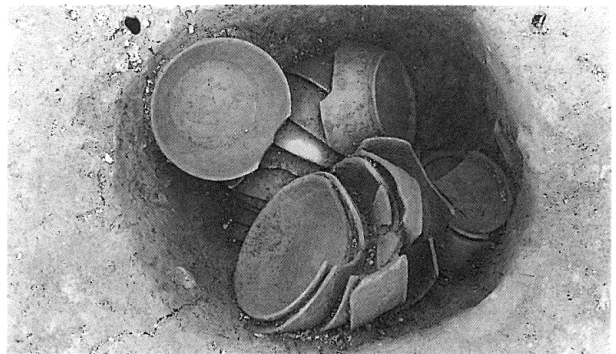
F地区西側の神本寺付近は、南海道「神本駅家」の候補地と考えられている。これと関係するとは必ずしも言いきれないが、刻書土器の出土はこの遺跡の官衙的な性格を示唆するものであろう。

律令期の遺構はE地区以外ではA地区付近に分布している。ただし律令期の遺構の分布は比較的限られており、A地区付近は7～8世紀頃、E地区付近は9～10世紀頃と時代も違う。律令期の集落は段丘上にそれほど広く展開することはなく、開発は水利等の条件の恵まれた場所に限られていたと思われる。中世の柱穴・溝等の遺構はほとんどの地区で確認されており、中世以降広範囲に段丘上の開発がすすんでいったことが推定される。

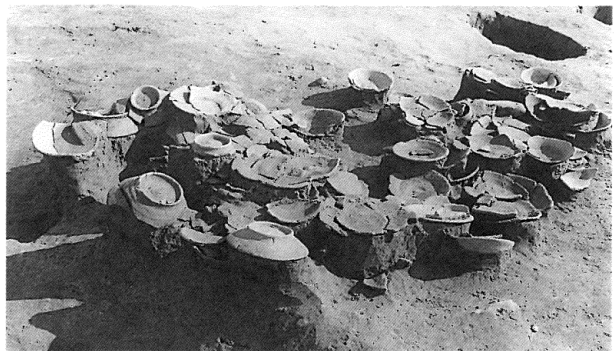
(山崎)



D地区 遺構完掘状況(東より)



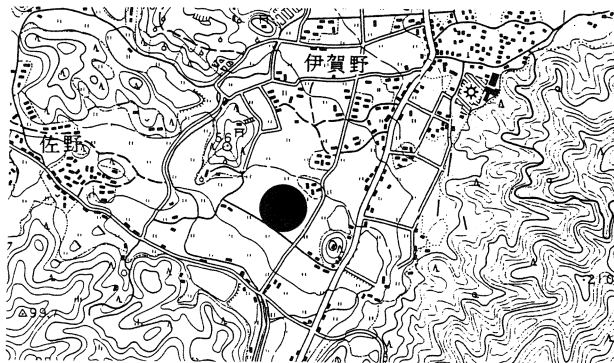
E地区 SK78 遺物出土状況(南より)



E地区 11C区 遺物出土状況(北西より)

しもなかはら
43 下中原遺跡

調査地 三原郡南淡町阿万
上町1411外字下中原外
事業名 基盤整備促進事業（一般型）
調査主体 南淡町教育委員会
担当者 坂口弘貢
種別 確認調査
調査期間 平成11年10月18～29日
調査面積 52m²（13ヶ所）



調査の位置

1. 調査内容

本調査地は、三原平野と阿万の平野部の接点付近で計画されている上記の圃場整備事業に伴い実施した。調査は2×2mの調査区13ヶを設定し重機・人力併用で行った。

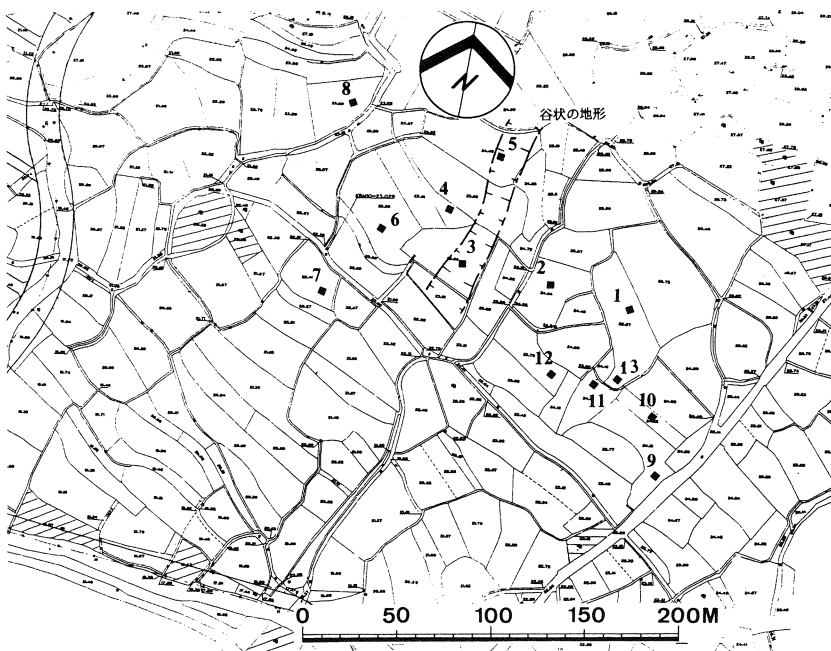
調査の結果、No. 1、No. 3の2ヶ所で柱穴状の遺構を確認した。またこの両調査区の間を設定した調査区No. 3は谷地形を示す土壌堆積となる。

出土遺物は非常に少なく土師質土器、瓦器などがある。また特殊な遺物としてNo. 3調査区の3層から平面形がなすび型をした滑石製の石製品が出土している。石製品は長さ12cm、幅6cm、厚さ3cm、重さ360gを計測する。上方には直径4mmの円形の穴が貫通し、さらに縦方向に両側が溝状に窪む。

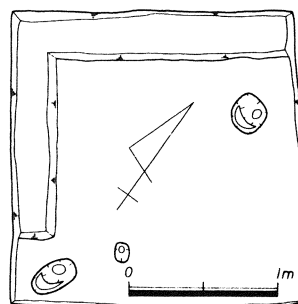
2. まとめ

本調査の出土遺物は非常に少なく、年代決定や性格の判断は難しいが、中世頃の比較的小規模な集落が想定される。

（坂口）



調査区設定図



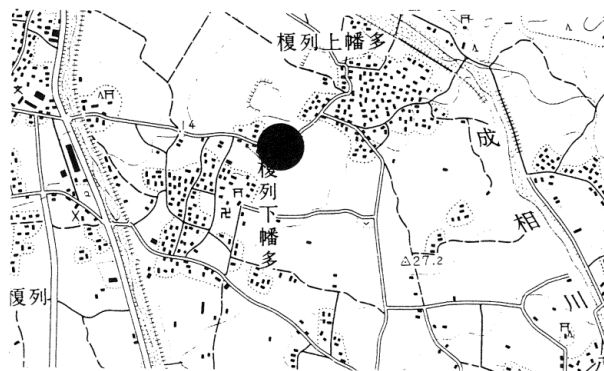
No. 4 調査区平面図



No. 3 調査区出土石製品

44 幡多遺跡 野水地区 - 4次調査-

所在地 三原郡三原町榎列下幡多字東裏外
 事業名 町道幡多山線道路改良事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 定松佳重・的崎薫
 種別 本格調査
 調査期間 平成11年11月22日～
 平成12年3月2日
 調査面積 2,200m²



調査の位置

1. 調査の概要

上記の事業に伴い確認調査を実施した結果、遺跡の埋蔵が確認された。関係課と協議を行い、本格調査による記録保存をすることとなった。

周辺には下幡多池を挟んで200m北に大阪湾型銅戈の破片が出土した幡多遺跡行當地地区、400m東に弥生時代後期～室町時代の集落跡である幡多遺跡若宮地区、200m南に神本駅家推定地である神本寺が鎮座する。

調査期間と周辺で行われている圃場整備の関係から、調査区を道路センターラインで2分し、西側を来年度調査とした。

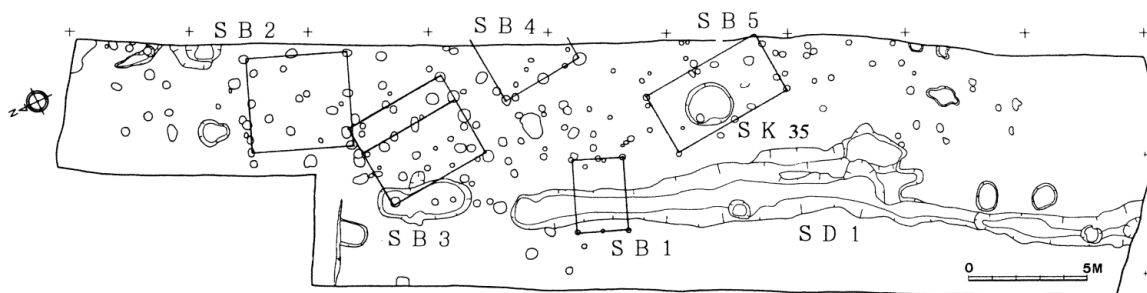
【A地区】

下幡多池のすぐ南脇に位置する。

耕作土直下に、第1遺構面であり平安時代の遺物包含層である黒褐色シルト質土が堆積する。第1遺構面では幅約3mのSD1を検出した。弥生時代後期の遺物も含むが、主に13C前半頃に機能していたと思われる。

SK35はSD1によって一部削られている。深さ約60cmで、底部付近は火を受けた痕跡があり、2次焼成を受け剥離がひどい土師器片が集中して出土した。

掘立柱建物は5棟確認した。SB1・2、SB3・4・5はそれぞれ同一方向に建物軸をとることから2時期の遺構があることが判る。特にSB1・2はB地区で検出された大型柱穴の掘立柱建物と軸を同じくする。



A地区 遺構平面図

【B地区】

梁間2間、桁間4間以上のSB6を検出した。柱穴は大型で約0.9×1.2m、深さ約40cmである。心々距離は梁間が1.8m、桁間が2.1mである。平面は方形を呈しているが不整形で、建て替えが考えられたが検出は出来なかった。柱痕は不明である。

地山の上層である黒褐色シルト質土より完形に近い弥生時代中期（IV様式）の壺が6点横倒し状態で出土している。このことを層位的に考えると大型柱穴は地山より掘り込まれたのではなく黒褐色シルト質土より掘り込まれていると思われる。黒色系の遺構埋土であったため検出出来なかったのであろう。

また、この掘立柱建物と平行した柱列（柱列2）を確認した。この柱穴は大きく削平を受け5cmほどの深さしか残っていない。

SB6を切る形で大型土坑（SK33）を検出した。調査区外に続き約3.3mの隅丸方形である。最下層は非常に堅くしまっている。この土坑からは7C後半～8C初頭の遺物が出土する。スラッグも出土し、周辺の遺構面で焼土面や遺物包含層から焼土塊を確認していることから鍛冶炉があった可能性がある。

また、製塩土器の丸底Ⅱ式の破片が大量に密集していた部分があった。消費後廃棄で遺構内出土と思われるがSB6の東側柱周辺であり、掘立柱建物との関連は不明である。

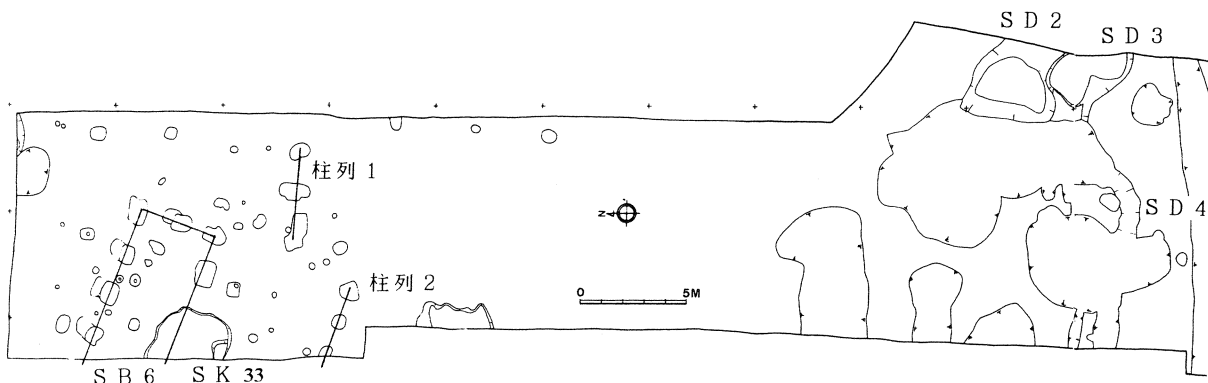
遺物包含層からも7C後半～8C初頭の遺物が出土し、須恵器甕胴部に刻書された破片が出土した。文字は「物」と思われる。

SD2・3は壁面で2つの溝が切り合っていることが判った。最初に北側のSD2があったが溝としては機能しておらず空堀であったところを人為的に埋め戻され、それを切る形でSD3が流れた。時期差はほとんどなく7C後半～8C前半の完形に近い遺物が出土した。

この溝は近代攪乱を受けているため続きが不明であるが、出土遺物から観るとSD4とつながるようである。このSD4より円面硯が出土した。脚部は幅広の



B地区 大型柱穴掘立柱建物（北より）



透かしが入るが失われて無く、上部も1/4の残存である。また、古代と観られる縄目タタキの平瓦も出土している。

遺構が立地するのは北部のみで中央部・南部は明治時代初期と思われる攪乱坑ばかりである。

【C地区】

駅家推定地である神本寺に最も近い調査区で、寺より東に約90mの位置にある。

遺構は直径15cmに満たない小土坑を検出したが、建物は構成しない。幅約50cmの溝からも遺物は出土しなかった。

2. まとめ

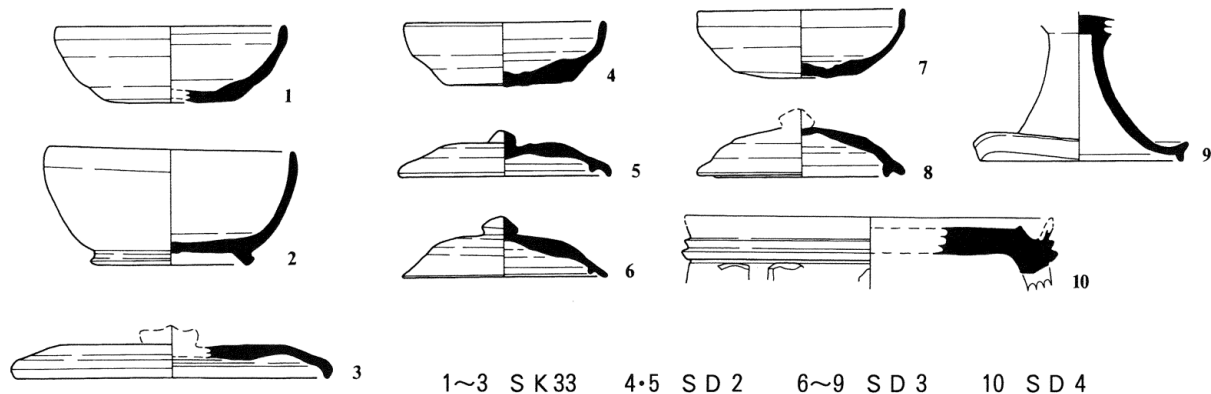
本遺跡は弥生時代中期～室町時代までの集落跡であることが判った。

出土した弥生土器は幡多遺跡下内田地区や行當地地区、若宮地区と同じ形態をしており、頸部に刻み目を施した幅広突帯を持つ広口壺、幅厚さ共に1cm以上の突帯を頸部から口縁にかけて3条施した大型広口壺（中期）や口縁内外面を縦方向のハケ調整を行ったままの小型甕（後期）である。これらは黒褐色の遺物包含層からの出土であると判断していたが、後世の地面削平によって上半分は無いが完形であることから遺構内出土であると見た方がよいであろう。

次に大型柱穴を持つSB6であるが、柱穴からの出土遺物は7C前半の須恵器片と弥生土器片である。このことから掘立柱建物は黒褐色の遺物包含層を遺構面とすることが判る。棟軸はN38°Eに向いているがこれは幡多遺跡行當地地区周辺にあったN30°E方向の条里型地割と一致する。この条里型地割は12世紀代といわれているが、現在の畝と同一方向の行當地地区検出の畝からは奈良時代後半の遺物が確認されており、条里型地割はもう少し古いものとなる可能性が高い。

この大型柱穴の掘立柱建物は、①駅家推定地に近い ②円面硯の出土 ③行當地地区墨書土器（「家」）出土 ④刻書須恵器出土から神本駅家^{みわもとのうまや}関連遺跡を発見した可能性は非常に高い。しかし、1棟のみの検出であり、「馬」「駅」等の木簡や墨書土器は出土しておらず、神本寺周辺の南海道も不明であるため豪族の居館である可能性も否めない。今後周辺の調査に期待がかかる。

この周辺は弥生時代中期の幡多遺跡下内田地区、弥生時代中期・平安時代の行當地地区、弥生時代後期・中世の若宮地区、そして弥生時代中期・中世の野水地区が広がっており、連綿と人々の生活が営まれていたことが判った。三原平野内でこれほどの長期に渡る集落は現在のところまだ確認されていない。これらの遺跡は三原平野内でも有数の遺跡となるであろう。 (定松)



B地区 出土遺物 (S=1/4)

第3章 資料紹介

1. 緑町成福寺原遺跡出土須恵器（緑町教育委員会所蔵）

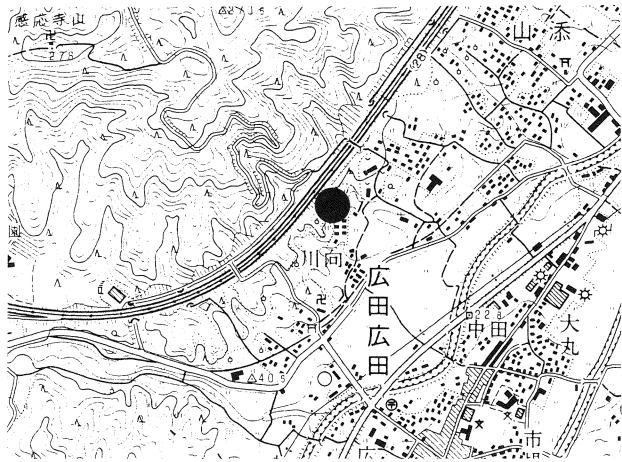
本資料は緑町が所蔵する成福寺原遺跡から出土した須恵器短頸壺の身と蓋である。遺跡は緑町広田の感応寺山東側の山裾に立地している。詳しい遺物の出土状況は不明であるが、昭和48年11月に宅地造成中に出土したとされる。

蓋の残存率約1/6。口径18.2cm、器高2.9cmを測る。つまみ部分は欠損しており、写真のつまみ部分は復元によるものである。天井部は平らで、外面はヘラ削り、内面は回転ナデ調整が施される。

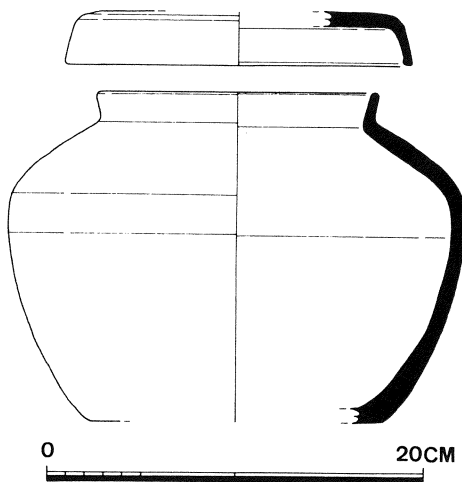
身の残存率は約1/3。口径14.7cm、底径15.4cm、器高17.5cmを測る。体部最大径は24.2cmで

上半部1/3前後にあり、高台は付されていない。色調はいずれも灰色で、焼成は良好である。口縁部はやや外側に屈曲し、肩部の張りは少ない。調整は内外面とも回転ナデである。これらの特徴から8世紀後半から9世紀頃の資料と考えられる。

他地域ではこれらの須恵器に高台が付いた身と蓋に伴って人骨や古銭などが出土する 경우가多く、胞衣壺や地鎮跡、火葬墓（骨蔵器）として報告されている。本資料の場合、供伴資料が不明なため遺跡の性格の判断は難しいが、奈良県の平城京や藤原京では居住域からやや離れた京周辺の山麓に葬地が求められており、本遺跡の立地が感応寺山の山裾ということを検討すれば、火葬墓（骨蔵器）と考えるのが妥当であろう。（坂口）



成福寺原遺跡位置図



成福寺原遺跡出土須恵器

参考文献 『緑町風土記』緑町教育委員会 1977

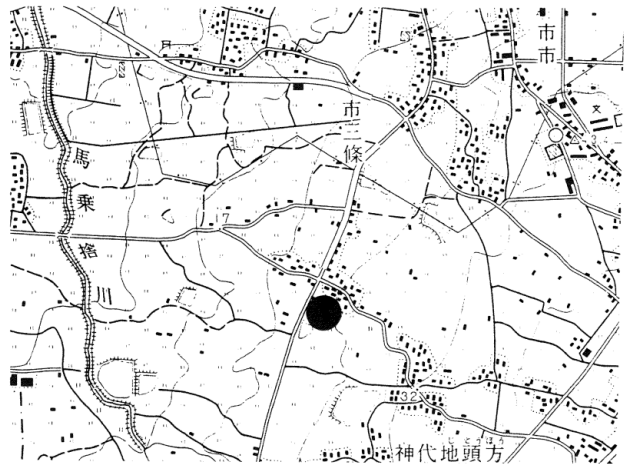
黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所 1980

『古墳時代から古代における地域社会』埋蔵文化財研究会 1996

2. 三原町^{やまそうはいじ}山惣廃寺採集軒丸瓦（三宅進氏所蔵）

本資料は、西淡町在住の三宅進氏が保管されている山惣廃寺から採集された素弁蓮華文軒丸瓦である。

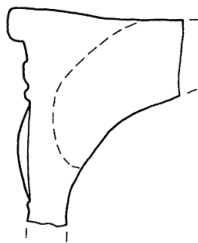
山惣廃寺は三原郡三原町神代地頭方の平野部に位置しており、遺跡西方を国府から福良駅家に通じる推定南海道とされる県道津名五色三原線が南北に通過する。遺跡はこれまで発掘調査が実施されていないが、地元研究者などが多数瓦を採集しており、今回紹介する資料の他にも淡路国分寺跡と同範資料である平安時代の軒丸・軒平瓦などが採集されている。



山惣廃寺位置図

軒丸瓦は瓦当部分を中心とする資料で、瓦当全体からみた残存率は約1/5。復元直径14.6cm、残存高5.1cmを測る。色調は灰色で須恵質をなす。子葉の数を復元すれば8弁もしくは9弁で、凸線で区画される。外区にはやや粗めの線鋸歯文が回る。中房部分が大きく欠損するため、蓮子の配置状況は不明である。

本資料と同時に採集されている土器などが報告されていないため、時代判定は難しいが、淡路国分寺跡や国分尼寺跡から出土している資料（付録 淡路国分尼寺・国分寺跡軒瓦型式一覧1999年度版）を参考にすると外区に線鋸歯文が巡るものは、軒丸瓦01型式などの創建期の資料に限られることから、本資料も国分寺・尼寺の創建期と同時期又はそれ以前に遡る可能性がある資料といえよう。（坂口）



山惣廃寺採集軒丸瓦

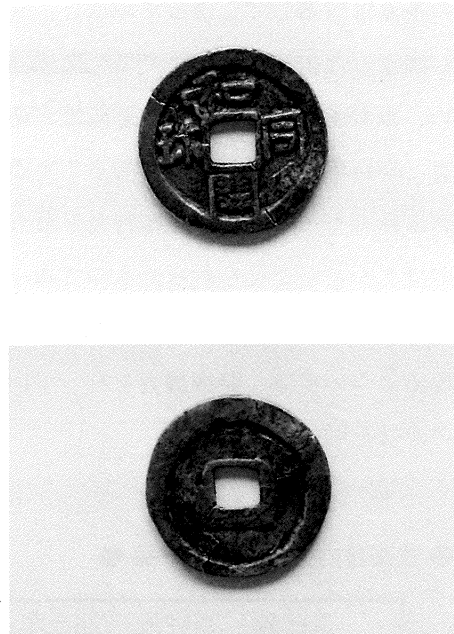
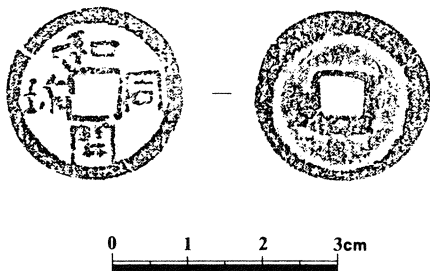
参考文献 岡本稔「淡路古瓦集成」『淡路地方紙研究会会誌』 1964
『淡路国分寺跡』三原町教育委員会 1993

3. 南淡町賀集^{かしゅう}採集和同開珎^{かじや}（三原郡青少年育成センター所蔵）

本資料は南淡町賀集鍛冶屋で採集され、三原郡青少年育成センターで大切に保管されている和同開珎である。保管されている和同開珎は、縦方向の長さ2.34cm、横方向の長さ2.38cm、厚さ1.67mm、重さ5.1gを測り、色調が銀色をなす。中央の四角の穴の周りに「和同開珎」の文字が時計周りに配され、「同」と「開」の間と「珎」と「和」の文字の間で割れ、2分されるが完形品である。また「開」の字は不隸開で「開」となる。さらに注目されることに、本資料は色などから銀銭である可能性が非常に高い。

和同開珎は708（和銅元）年5月に銀銭が、その翌年の709（和銅2）年2月に銅銭がそれぞれ発行されるが、同年8月には銀銭が廃止されたことが『続日本紀』に見える。また銀銭に限っていえば、1996年現在全国で27遺跡、44例が知られている。

現在までのところ、本資料の正確な採集場所や採集時期は確定されておらず、中世の古銭などに混じって出土したものか、又は律令期の遺跡に伴うのか全く不明である。ただし現在までのところ南淡町賀集鍛冶屋地区では律令期の遺跡はいまだ確認できていない。（坂口）

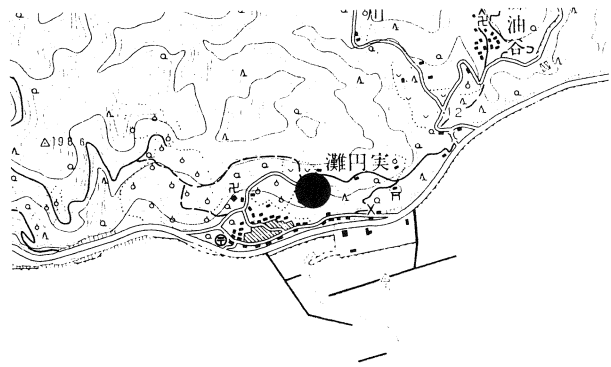


参考文献 三上 善孝「古代銀銭の再検討」『出土銭貨第9号』 1998

阿部 義平「大川天顕堂コレクションの古代銀銭」『出土銭貨第9号』 1998

4. 南淡町灘城方山ノ神出土大量銭

紹介する出土銭は、南淡町灘城方という淡路島でも南端に位置する海岸地帯から不時発見されたものである。出土地周辺は古来より地滑りが多発していた土地であり、出土地点を残した左右両域でも地滑りが起こっている。発見の経緯は土地所有者である中尾福夫氏が菊畑を耕作中、10年ほど前から古銭が出土していた。平成8年頃に農作業を行っていたところ、堅いものを引っかけたため掘り起こしてみると壺と古銭が出土した。



大量銭出土位置図

口縁部から肩部が欠損していた壺は備前焼と思われる、中に収まっていた古銭は繻状の塊に固まった状態にあったらしい。このように古銭が大量に出土したのは島内で5例目であるが、残念なことに現在その多くは散逸してしまっている。

出土した古銭は現在までに1,220枚を数えているが、長年の耕作作業によって攪拌が行われているため、未だ土中に残っている可能性がある。最古銭は開元通寶（初鑄年621年 唐）で、最新銭は永楽通寶（初鑄年1408年 明）であることから15世紀中葉頃に埋蔵されたと考えられる。出土銭の傾向は全国的にみても一般的で、埋蔵行為が最も盛んだった時期にあたる。加工が施された古銭が数枚含まれ、そのほとんどが穿孔を行ったものであったが、1枚だけは文字を削った“削り銭”であった。この削り銭は開元通寶の開と通を削ったものであるが、何の目的で文字を削ったかは不明である。古銭を埋蔵した理由については、発掘調査を行っていないことや文献資料が残っていないため備蓄のためか埋納されたのかは不明である。

(的崎)

● 淡路島内大量出土銭一覧 ●

	遺跡名	所在地	出土年	出土枚数	現存枚数	最古銭	最新銭	容器
1	土居	西淡町 松帆脇田	1748 ~1751	約10,000	不明	不明	不明	壺
2	下内膳	洲本市 下内膳	1942	約12,700	126	五銖	至大通寶	甕
3	大崩	五色町 下堺大崩	1956	約10,000	1	貨泉	不明	不明
4	高山	一宮町 山田高山	1965	約10,000	明確な枚数 は不明	開元通寶	永楽通寶	無し
5	山ノ神	南淡町 灘城方	1988 ~1998	1,220	1,220	開元通寶	永楽通寶	壺

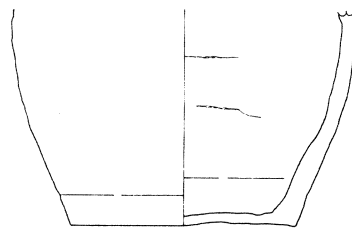
● 山ノ神出土銭一覧 ●

	銭貨名	王朝名	初鑄年	枚数
1	開元通寶	唐	621	113
2	乾元重寶	〃	758	3
3	開元通寶紀地錢	〃	845	2
4	宋通元寶	北宋	960	2
5	太平通寶	〃	976	14
6	淳化元寶	〃	990	6
7	至道元寶	〃	995	26
8	咸平元寶	〃	998	25
9	景德元寶	〃	1004	36
10	稱符元寶	〃	1008	33
11	稱符通寶	〃	1008	20
12	天禧通寶	〃	1017	23
13	天聖元寶	〃	1023	68
14	明道元寶	〃	1032	4
15	景祐元寶	〃	1034	23
16	皇宋通寶	〃	1038	161
17	至和元寶	〃	1054	12
18	至和通寶	〃	1054	8
19	嘉祐元寶	〃	1056	10
20	嘉祐通寶	〃	1056	37
21	治平元寶	〃	1064	19
22	治平通寶	〃	1064	1
23	熙寧元寶	〃	1068	91

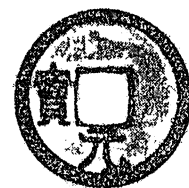
	銭貨名	王朝名	初鑄年	枚数
24	元豐通寶	北宋	1078	134
25	元祐通寶	〃	1086	103
26	紹聖元寶	〃	1094	68
27	元符通寶	〃	1098	23
28	聖宋元寶	〃	1101	44
29	大觀通寶	〃	1107	7
30	政和通寶	〃	1111	38
31	宣和通寶	〃	1119	4
32	宣和通寶折二錢	〃	1119	1
33	大定通寶	金	1178	2
34	淳熙元寶	南宋	1174	3
35	紹熙元寶	〃	1190	1
36	慶元通寶	〃	1195	1
37	開禧通寶	〃	1205	2
38	嘉定通寶	〃	1208	7
39	紹定通寶	〃	1228	2
40	淳祐元寶	〃	1241	2
41	皇宋元寶	〃	1253	1
42	景定通寶	〃	1259	3
43	洪武通寶	明	1368	4
44	永樂通寶	〃	1408	18
45	不明			15
合計			1, 2 2 0	

● 銭貨の王朝別割合 ●

王朝名	枚数	比率%
唐	118	9.7
北宋	1,041	85.3
金	2	0.2
南宋	22	1.8
明	22	1.8
不明	15	1.2
合計	1,220	100.0



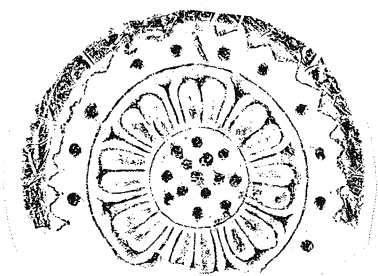
出土容器 S=1/4



削り銭 S=1/1

付録 淡路国分尼寺・国分寺跡軒瓦型式一覧 1999年度版

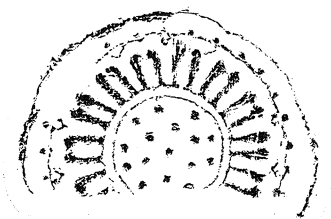
淡路国分寺の寺域内において平成10年度に2回、淡路国分尼寺については平成11年度に1回それぞれ発掘調査をする機会が与えられ、内容については先の報告の中で紹介してきた。国分寺出土の軒瓦については、三原町教育委員会が平成5年度に発行した『淡路国分寺発掘調査報告書』で詳細に報告されているが、今回の調査や採集資料の中に新しい資料が確認できたので、ここで合わせて両寺院の軒瓦を紹介したい。 (坂口)



01 型式



02 型式



03 型式



21 型式



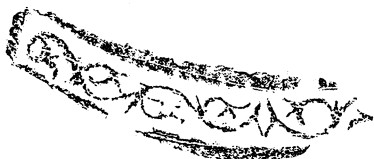
22 型式



01 型式



02 型式



21 型式



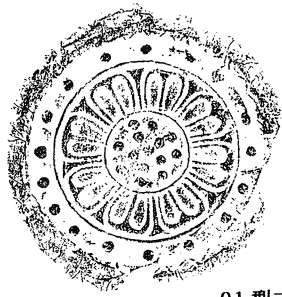
22 型式



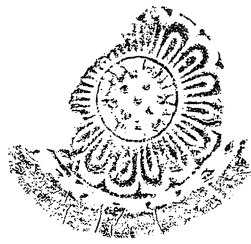
23 型式



国分尼寺跡軒瓦



01 型式



02 型式



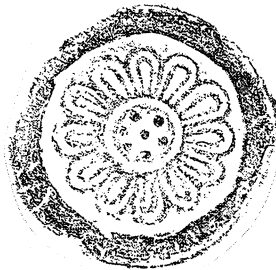
03 型式



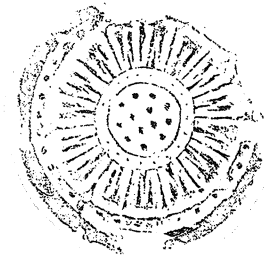
04 型式



05 型式



06 型式



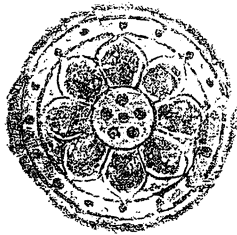
07 型式



08 型式



09 型式



21 型式



22 型式



23 型式



24 型式



25 型式



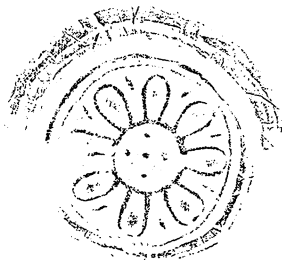
26 型式



27 型式



28 型式



29 型式



30 型式



国分寺跡軒丸瓦



01 型式



02 型式



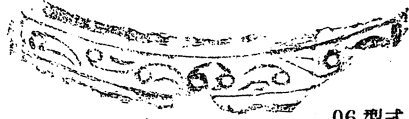
03 型式



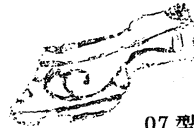
04 型式



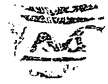
05 型式



06 型式



07 型式



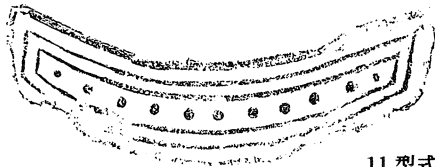
08 型式



09 型式



10 型式



11 型式



12 型式



21 型式



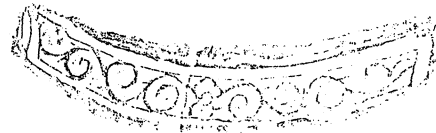
22 型式



23 型式



24 型式



25 型式



26 型式



27 型式



28 型式



29 型式



30 型式



31 型式



32 型式



国分寺跡軒平瓦

あ と が き

ようやく5ヶ年分の年報が完成した。毎年未報告の調査成果が山積みになっていく中で、なんとかしなければと思いつつ、ただ月日だけが流れてしまった。

第1章の三原郡内の埋蔵文化財事業の動向は、事務所開設からの10ヶ年分を対象としたため、調査量の集計には、おもいもよらず手間取ってしまった。過去のデータを忘れてしまったもの、簡易な報告は口頭で済ませているものが多々あり、実績報告書・協議資料などを一つずつあたる作業となった。実績報告書に添付してある写真や本文を見返すたびに、こんな成果があったのかと、あらたな発見があったり、調査方法を反省したり、調査当時の作業のハプニングや思い出が懐かしくよみがえってきた。

一方、その思い出以上に、それぞれの遺跡に残された何百年、年千年の歴史の重みにも痛感した。特に平成11年度に実施した淡路国分尼寺跡推定地での調査は、不時発見の短い調査期間中、台風がきたり地元地区への説明等、非常に忙しい毎日が続いた。出土した瓦の洗浄が進むにつれ、国分寺と同文の軒瓦が多数含まれていることがわかり、版築状の整地層などと合わせて考ええると、国分寺と対になる国分尼寺跡であることが確定的となり、身の引き締まる思いであった。

また、平成10年度から兵庫県下の中学校で始まったトライやるウィークは事務所所在町内の三原中学校の生徒が毎年数名発掘調査や遺物の整理作業を体験していった。作業自体は比較的簡単な事から進めてもらったが、いざ教えるとなると結構難しいもので、トライやるウィーク期間中は心地よい緊張感の中、初心に還って自分自身が勉強するいい機会になったと思う。



平成10年度 トライやるウィーク風景

今回の年報は5年分しか報告できず、またその内容も紙面の都合上決して十分といえる内容ではないが、まずは年報の完成をよしとして、事務所開設の平成2年度から6年度の残り5ヶ年分の報告を次年度の宿題としたい。

最後になりましたが、各遺跡の調査ならびに本書作成にご協力・ご指導いただいた方々に対し、改めてお礼申し上げます。

(坂口 弘貢)

2001年3月31日発行

三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ

1995～1999年度 埋蔵文化財発掘調査

編集・発行 三原郡広域事務組合

〒656-0401 兵庫県三原郡三原町市善光寺18-27

TEL 0799-42-0056

印刷 浜田タイプ

〒656-0521 兵庫県三原郡南淡町潮美台2丁目6-5

TEL 0799-52-1080